

擧せられた。

第三節 検査官^(前)及び軍吏の制度^(三) 執政官の権力はこれに代りし執政官的護民官に移つたのではない。紀元前四四三年ローマ人は、新に貴族の保安官たる二名の検査官 *Censor* を創設した。其の主なる職務は市民と其の財産とを登録し、部落及び階級を定むるものにして、從來執政官の掌理せし任務であつた。彼等は又た租税徴收権を最高の評價者に委託し、公共建造物の營繕にも注意を拂つた。彼等は通常五年毎に選舉せられ、就職後十八個月以内に戸口調査を完成せねばならぬ。

検査官は久しく貴族出身の保安官に限られた。然し他の方面に於て平民派は官職争奪戦に大成功を博した。紀元前四二一年二名の軍吏 *Military quaestor* は軍隊の財務を執掌する制度が定められ、同時に平民は文武を問はず會計吏の職に就き得ること、なつた。

第三節 リキニウスの法^(前) 然し平民は特に執政官職にも登用せらるることを希望し、又た負債の壓迫を感じ、官憲の公有地處分に就き不満を感じてゐた。

ローマ人は戦争の結果土地を獲得するや、(一)其一部を移住民に賦與し、或は(二)これを賃貸し若くは(三)賣却した。此等の處分方法に對し貧民は何等反對はしない。然し(四)大部分は未測量の

果物は年産額の五分の一を政府に支拂ふべしと要求し、また牧場として使役するものよりは牛羊の一部を徴收した。斯る處置は一見寛大なるが如きも、貴族及び富裕なる平民のみ此等の土地を『占有』若くは『所有』する特權を有せしこと明である。彼等はこれを賣買遺贈し、終にこれを自己の所有地と考ふるに至つた。富裕なる地主はこの特權を以て足れりとせず、屢々附近の貧民より其の貓額大の土地を奪ひ、これを自己の土地に兼併した。されば貧民がこの制度の不正なる運用に不満を感じたるは怪しむを須るぬ。由て護民官リキニウス *Licinius* は同僚と共に一個の改革案を提出し、すべて不満なる平民の支持を求め、久しく争論の後この案は紀元前三六七年に法律となつた。其の條項は次の通り。

(一)自今執政官的護民官を廢止し、二人の執政官のうち一人は平民であらねばならぬ。
(二)既に支拂ひし負債の利子は原本より減額するを要す。殘金は三回に分ち同額宛年賦を以て支拂ふこと。

(三)何人も公有地五百ユゲラ *Jugera* ^(註)以上を占有するを得ず。恐らくこの條項は殘餘の土地を七町歩宛貧民に配布するために制定されたものである。

(四)何人も百頭以上の牛と五百頭以上の羊を公有地に放牧してはならぬ。

(註) ローマの町歩はユゲラム *Jugerum* にて、英町歩の三分の二に相當す。

第三節 リキニウス法の影響 リキニウス法の第二項は貧民の苦惱を唯表面的に救済したるに過ぎぬ。貧困の原因を除去したるものではない。

貴族は依然熱心に出来得る限りの権力を保持せんとした。されば元老院は平民が新しき三名の貴族の保安官を承認するまで、第一項の實施を欲しなかつた。即ち大判官 Praetor なる民事裁判官と二名の造營奉行 Curule aedile とである。後者は道路・公共の營造物・市場及び公共の競技を監督する。平民は執政官に就職し得るに至りし後は、他の國家の名譽・權力ある地位を占むるとは困難でなかつた。この世紀の終りに平民はすべての官職と司祭・卜師との團體にも參加することが出来た。執政官を平民に開放せし結果貴族階級は増加した。今後貴族階級とは獨りパトリシアンのみならず、高官(註二)に任ぜられたるすべての平民——彼等は『新人』と稱した——と其の子孫とを含むに至つた。換言すればパトリシアンとプレベイアンとは黨派でなくなつた。今後は(一)官吏及び其の子孫より成る貴族と、(二)他の市民たる平民とに分れた。

貴族は、その數が少ければそれだけ名譽の大なるを得ることを知り、強硬に新人の參加に反對した。彼等は一人の新人を其の特權階級に加へるよりも、彼等の二人を數日執政官の職に就かしめ、或は其の他の高官に任ずるを優れりとした。然るに法律(註三)により何人も十年間は同一の職に就く能はず、同時に兼職を禁じられてゐたから、自然多數の新人は選舉せられ、其の結果として貴族は全體より見て人民の代表者たるに至つた。

(註一) 第三六節註二

(註二) 紀元前三四二年のゲヌシウス法 Genucian Law

第三節 民會の解放 平民派の領袖が漸次政權を獲得しつゝある時、平民は民會を元老院の支配より法律上自由の境に置くことに努力した。上述せし如く(註二)百人會及び部落會は、共に元老院の批准を経ずしては其の決議に法律の效力を生じなかつた。然るに紀元前四世紀の後半に至り、百人會はこの支配から脱却することが出来た。本來百人會は自由に其の適當と認むる法律を合法的に通過するを得た。更に重要な部コミチア・フリビエタ落會の解放であつた。紀元前二八七年大都統ホルテンシウス Hortensius の法律により、部落會に於ける平民の決議は元老院の承認を要せず法律の效力を有すること、なつた。

憲法上民會は今や元老院の束縛を受けず國家權力の主體となつた。されば形式は民主政治であつたが、實質は依然貴族政治であつた。元老院は從來よりも更に實際的權力を行使し、國家の最も手腕あり經驗ある人物を網羅し、従つて其の道德的勢力に對抗することは困難であつた。元老院は卜師の團體により鳥占を管理し、保安官も共に人民もこれに對しては宗教的尊敬を拂つた。

(註一) 第三六、三六節 (註二) 第三四節

第三〇章 初期の共和政(上)平民の權利獲得

第三節 制度發達撮要(前五九)

一、保安官

此の期間政務は一層繁多となり、複雑を加へたため官職の數は漸次増加した。(一)最初(イ)二名の執政官を置き、主なる行政事務・大判官及び軍隊の統帥を兼ね、(ロ)二名の會計官は財務を管掌し執政官より任命を受け、尙ほ時に(ハ)大都統を任じ絶對的の權力を與へ政務を總理せしめた。次に(ニ)市民を壓制より保護するために平民の護民官を設け、最初二名であつたが漸時其の數を増して十名とし、(三)二名の平民出身の造營奉行は更に護民官を助けた。(四)法典編纂の十法官と(五)執政官的護民官とは執政官に代つたがそれは一時の方便であつた。(六)二名の検査官は五年毎に選舉せられ、人民の戸口調査を掌り且つその所屬を定めた。次いで彼等は市民の道德を監督することゝなつた。(七)二名の軍吏は軍隊に従ひその經理を掌るために任命された。(八)大判官は民事の裁判官(九)二名の高位の造營奉行は道路・市場及び競技を監督した。間もなく平民出身の造營奉行がこれ參與することとなつた。會計官及び大判官の數は漸次増加した。

二、民會

(一)王政時代には唯一の民會——コミチア・クリアタ(クリア會)のみ存し、(二)共和政治のはじめに新しき民會——コミチア・センツリアタ——が設けられた。前者の議員は平等であつたが、後者に於ては市民は其の富の多寡により投票の順序があつた——財産を多く有するものは投票數を多く計算された。コミチア・センツリアタはクリア會に代り、後者は單に形式的のものとなつた。(三)共和政の初期に第三の民會——コミチア・ツリビエタ(部落會議)——が開かれ、最初は單に平民の事件のみを處理したが、ヴァレリウス・ホラチウスの法により、元老院の承認を得てこれに國家立法權を與へた。此の民會はすべてのものにコミチア・クリアタの如く平等の投票權を與へた。然しこの部落會議のために平民の得たる利益は、この會議が護民

官を議長として開かれ、護民官は自然貴族よりも平民に一層利益ある法律案を提出する傾向ありし事實に存する。間もなく貴族の保安官は同様にこの會議を召集し、法律を制定し下級の保安官を選舉することゝなつた。三種の民會の區別は主として組織上の問題である。實際上の目的に於ては同一のものと考へて差支ない。百人會及び部落會の組織後、次に起りし問題は憲法上元老院が彼等に對して行使せし支配權を放棄せしことであつた。これは紀元前二八七年のホルテンシウス法によつて成就された。

三、元老院

上述せし經過により元老院は民會を支配する憲法上の權利を失つた。然し同時に(一)保安官及び人民より等しく認識せられし其の偉大なる權能により、又た(二)其の占トを管掌することにより従來よりも一層實際の權力を得た。元老院はこの時代の末期に法律上は兎も角實際上は最高の權力であつた。

四、平民の權利

共和政の當初、平民は(一)市民として當然受くべき保護を缺き、(二)すべて政治的・宗教的官職に就くを阻止されてゐた。彼等は(イ)護民官の設置、(ロ)十二鏢法の公布によつて必要なる保護を獲得した。其の後平民は官職に就くを主なる目的とし、(一)法典編纂の十法官に、(二)執政官的護民官に、(三)會計吏に就職することゝなつた。(四)リキニウス法は次いで執政官の一人は平民たるべきことを定め、これにより平民は遙かに重要な利益を得た。其の後(五)すべての官職及び勢力ある司祭の職は急に彼等に開放された。此の階級闘争の初期に當り貴族平民間の婚を通ずる權利はカヌレイウス法(前四四五)によりて規定せられ、平民の主なるものは婚姻によつて貴族と縁戚となり、政權の爭奪を有利に導いた。身體財産の保護以外にこの争闘により平民の利せしところは僅少であつた。大體の傾向は民主政よりも貴族政であつた。國家の主要なる人物は新に官職に就きしため貴族階級に入り、昔時のパトリシアンとプレベイヤンとの區別は

消滅した。

第三章 初期の共和政(下)ローマの覇業(前百九)

第一款 南エトルリア及びダチウムの併合

第三五節

ローマの微力・ラテン人との同盟

上述せし如くローマ人は政府を改革し、平民の生活

状態を改善すると共に、漸時其の勢力を伊太利に擴張しつゝあつた。今その領土發展の經過を辿るに當り、吾人は共和政治の創立より、前章に述べし時代の物語を續けねばならぬ。

王政の没落はローマを微力にした、戦時には軍隊を指揮し、内紛を鎮定する唯一有力なる統治者を失つたからである。貴族と平民との乖離(註二)は隣國の乗ずることとなり、多年都市同盟を組織せし(註三)ラテン人の攻撃は最も危険であつた。彼等は王政の末期ローマの覇權を認めて居たが、今や叛亂を起し、暫らく交戦の後當時ローマ第一流の政治家スプリウス・カシウス Spurius Cassius (註四)は、ラテン同盟と恒久的平和條約を締結した(註五)。

(註一) 平民の分離に就ては特に第三二節を見よ。

(註二) 第三五七節 (註三) 第三八三節

(註四)

これはローマがはじめて平民の護民官を出した年である、第三二節。

第三六節

エクイア人及びヴォルスキア人との戦(前百六)

ローマ人とラテン人との同盟更新は、機

宜に適したものであつた。彼等は間もなく山間に住せる貪慾なる種族に對し、生命財産を保護するために長き苦戦を経験せねばならなかつた。サビニ人は毎年山間の住居を下りてローマの領土を荒掠し、エクイア人も亦屢々農家を焚き其の家畜を強奪した。物語によれば彼等は曾て執政官と其の軍隊とを欺きこれを谿谷に圍んだ。爰に於てか他の執政官は元老院の要求によりシンシナタス Cincinatus を大都統に(註一)任命した。命を奉ぜし使者はチベル河を渡り、彼の有する四町歩の田圃を訪れた。彼は外衣のみ、耕作に従事し鋤を杖に一と休みせる時、使者はその大命を傳へた。額の汗と塵とを拭ひながら彼は使者の言を傾聴した。彼は指揮官となり、直ちに包圍された軍隊を救出して敵を屈服し、多くの分捕品を携へてローマに凱旋した。此の電光石火的快勝は元老院をして凱旋式を舉行することを許した。斯くて壯嚴なる行列は聖路(註二)を経てフォラムを過ぎ、カピトールの丘に登りヂュピターの神殿に赴いた。先頭には捕虜となりしエクイア人の酋長が進み、次に敵より奪ひし軍旗を捧ぐる兵士これに續き、其のあとには美装して坐する將軍の凱旋車が行く。車の後には軍人たちが分捕品を携へ、凱旋の歌を誦しながら進む、市民は屋前に食卓を設けて兵士を犒ふ。行列は神殿の前に止まり、將軍は神々の主ヂュピターに勝利を感謝する獻物を奉る。職にあること

僅かに十六日にして彼は指揮權を辭し、再び其の田園に歸つた。これは正史ではない。然しシンシナタスの物語はローマの初期の單純なる生活と、戰勝將軍の凱旋式とを暗示する。シンシナタスの戰勝後、ローマ人は尙ほエクイア人と多年戰を續けたが餘り成功しなかつた。

これと同時にヘルニカ人の住せし地方の南東にある山間の住民ヴォルスキア人も亦ラチウムに下つて國土を蹂躪し、ローマを距る數哩のところに至り、一時は彼等のため殆んどラチウムの全部は占領せられた。然し長き苦闘の後ローマと其の同盟國とは敵を克服し、この世紀の終るに先ちラチウムを回復した(前四〇五)。エクイア人及びヴォルスキア人は依然時に苦惱の種となつたけれども、最早危険ではなくなつた。

(註一) 第三八節 (註二) ローマ市の道路。

第三七節 ヴェイの包圍(前四〇五)

本世紀の末、ローマ人はエトラスカの都市にしてローマと略領域等うし、ローマを距る約十二哩のところに、嶮岨なる高地を頼みて防備を施せるヴェイ Veii に挑戦した。長らくこれを包圍したる後、大都統カミラス Camillus は終にこの地を占領し、その結果ローマは領土を倍加し、間もなく北方キミニニア丘 Ciminius Hill の方面に發展した。

第三八節 ガリア人のローマ侵略(前三九〇)

ローマはエトルニアに於てはじめてガリア人——美しい毛髪と俊敏なる眼の偉丈夫——と衝突した。ガリア人の進軍するや『其の鋭い音楽と、調子外れの

騒音とは至るところに喧々囂々たる音響を傳へた』。これより前彼等はアルプスを横斷し、エトラスカ人をポー河の平野より驅逐し(註二)、進んでその領土に侵入しつゝあつた。ローマを去る約十一哩チベル河の支流アリア Allia に於てローマ軍と衝突した。野蠻人等は密集隊をなして戦ひ、その巨劍はよくローマ人の胄を斬つた。屢々山間の野蠻族と戦ひし經驗あるローマ人も、此等の巨大なる北狄に怖れをなして遁走した。或るものは荒廢せるヴェイに避難し、或るものはローマにこの不幸の報知を傳へた。ローマ市は愕然として恐慌の渦中に投ぜられた、何人も敢て城壁を守備することを考へなかつた。軍人と少壯元老院議員とは急に牙城に走り其の防備を固めた。ローマ市は掠奪され、火を放たれた。

日夜の監視に疲勞困憊し、饑餓に脅かされたカピトールのローマ人は、終にガリア人に對し彼等の撤退を條件として金一千磅を提供した。傳ふるところによれば、野蠻人の酋長は拔劍を衡器に載せ『敗れたるものは禍なり』と言ひ、互にその要求を争つた。この時再び大都統となりしカシラスは軍を率ゐてこの場に現はれ、ガリア人を驅逐し終に金を與へざりしと言ふ。

市民は市に歸り跡始末に従ひ、各自其の便宜の場所に小舎を建てた。一年を経ざるに、ローマは其の狹隘なる街衢と共に灰燼のうちより復活した。將來の攻撃に備へるため、彼等は市の周圍に鞏固なる石造の壁を繞らした。その遺跡は今日尙ほ存して居る(註三)。

(註一) 第三〇節

(註二) 此の事件後暫くして世に出てし古代記者は、この城壁をセルヴァイウス・ツリウスの建設せしものとして居る、第三四節、第三五節。然し現在學者の意見はこの事業が四世紀よりも早からざるものたることに一致してゐる。

第三九節 第一サムニテ戦争(前三四三—三四二)

都市再建後の半世紀間は、ローマに取つて軍事的大成功の時代であつた。ローマはあらゆる方面に其の敵に勝ち、新に領土を増し、若しくは既に得たる土地の統治権を一層確實安全にした。此の時期にローマは、伊太利半島の内部の最も有力なる國家サムニウスと接觸するに至つた。一時兩國は同盟國であつた。然し後にカムパニアの富裕なる都市カプア Capua を争つた。カプアはサムニテ人に脅かされ、ローマの保護を受けその代りにローマに降服した。ローマ人はこの條件を探れ、サムニウムと初めて勝敗を争ふこと、なつた。

兩國民は國力ほゞ匹敵して居た。然し其の國情は全く異つてゐた。サムニテ人は山間の住民にして都市生活の經驗なく、財力に乏しく、國王も貴族政治を持たなかつた。貧しきも勇敢にして而も自由なる彼等は、西方國境に横はる美田良地を虎視眈々として眺めつゝあつた。彼等の武力は此等の豊饒なる土地を占有する權利ありと考へてゐた。

ローマ人とラテン人とは、其の軍事組織と武器とに於て遙かに優つてゐた。彼等の軍隊は農民より成る民兵であり、命令によく服従し、勇敢にして困苦缺乏に堪へ、長行軍と激務とを苦とせず、勝利に驕らず不幸に屈しない。彼等はまたこの戦争が國家のためにして、野蠻人に對する富と文明との擁護にありとの思想に激勵された。されば彼等は極めて元氣に戦ひ且つ成功した。その結果ローマ人はカプアを保持せしのみならず、殆んど全カムパニアの支配權を獲得した。

第四〇節 大ラテン戦争(前三四〇—三四六)

紀元前三四一年ローマとサムニウムとは突如平和條約を締結し同盟國となつた。然るにラテン人と他のローマ同盟國は尙ほ戦争を續けた。終にラテン人は自らロー

マ人と同様に考へ、ローマ市民權の賦與と執政官の一人と元老院議員の半数とを、ラテン人のうちより出すべきものなりと要求するに至つた。この要求は冷笑を以て拒絶された、『外國人の執政官と元老院議員とがデユピターの神殿に詣づることは、國家最高の神にとつて恰も敵國の捕虜となりし如き侮辱を感ずることであらう』(註三)と。戦は續いた。ローマ人とラテン人とは武器と軍制と訓練とを同うしてゐた。而もローマは結束の脆弱なる同盟と異り、一都市としての利益を充分に有して居た。ローマは兩三回の激戦と數回の包圍とに成功し、この戦は終を告げ次いでローマはラテン同盟を解散した。

(註一) リビイ第八卷第四節以下 Livy, viii, 4f.

(註二) 第三七節、第三五節

第三章 初期の共和政(下)ローマの霸業

第四二節 南エトルリア、ラチウム、カムパニアの併合
 ローマの支配する領土は今やエトルリアのキミルニア山より、カムパニアのヴェスヴキウス Vesuvius 山に及んで居た。ローマは最近戦争により獲得せし領土をいかに組織し、又た住民をいかに處理したかを考察する必要がある。

ローマはヴェイの人民を奴隷にし(註二)、その領土をローマ市民の間に分ち、これを四部落(註三)とせしは尙ほ合衆國が新領土を屬州テラトリーより新しき州となすと同一の方法である。然しラテン人を苛酷に待遇する理由はなかつた。彼等はローマ人と血統と言語とを一にし、軍人として將來のローマに取つて甚だ貴重なるものであつた。されば元老院は彼等の多數に完全なる市民權を與へ、彼等と其の領土とを以て新に部落ツライテを組織する決心をした。然し若干のラテン都市は他よりも低い地位に置かれた彼等はローマの市民權を與へられたけれども、ローマに於て投票し、或は官職に就く權利は與へられず、彼等の市民權は制限されてゐた。エトラスカの都市カエレ Caere は、既にローマに併合され此の地位にあつた。斯る人民は投票權なき市民 *cives sine suffragio* と言はれた。彼等は他の市民と等しく軍務に服する義務があつた。カムパニアの大部分はローマの權力に服し(註四)、其の住民は同様に低級市民の階級にあつた。ローマ國家に併合された人民は、市民權の高低如何を問はず、其の地方の問題に就ては自治都市たる地位を維持した(註五)。

然しラテン人はすべてローマに併合されたのではない。チアール、プラエネステ其の他一二の舊ラテン都市は(註六)獨立を維持し、別個の同盟條約をローマと締結してゐた。エトルリヤ及びラチウムに建設された若干の植民地は、チアール及びプラエネステと等しく同盟の地位を與へられた。これ等を稱してラテン植民地と言ふ(註六)。

- (註一) 第三七節 (註二) 第三六節 (註三) 第三九節
- (註四) 第四五節に説明あり (註五) 第三七節
- (註六) 其のうちにはエトルリアのストリウム Sutrium ネペテ Nepete あり、ラチウムのノルバ Norba サトリカム Satricum 及びセチア Setia を數ふ。

第二款 伊太利の征服 (前三六—三四)

第四二節 第二サムニテ戦争 (前三六—三四)
 ローマとサムニウムの間には十五年間平和が續いた。此の間ローマ人は絶えず勢力を増加した。その野心ある政策はサムニテ人をして自己の安全を憂慮するに至らしめた。さればローマがカムパニアの希臘自由都市ナポリを包圍せし時、サムニテ人はこれに援軍を送つた。この非友誼的行動は第二サムニテ戦争の原因となつた。

戦争は波瀾を以て終始した。最初はローマが優勢であつた。次いでサムニウムに幸運は轉じた。紀元前三二一年サムニテ軍の指揮官ポンチウス Pontius は、四萬の軍を率ゐし執政官等を誘ひアペ

ナイン山中の谿谷カウダイン Caudine 峠の伏兵に陥らしめ、終に降伏の己むなきに至らしめた。執政官等はローマ國家の名に於て敵の講和條件を承認する宣誓をした。次いで三本の槍を以て鞭が作られた——二本を地中に立て第三の槍を上部に横に結びつけた。武装を解除せしローマの軍隊は、完全なる降伏を表示するためこの鞭を潜らねばならなかつた。これは軍人として最も不名譽なことであつた。彼等はすべて歸國を許され唯六百の武士は人質として留められた。ローマ人に取つて降伏は軍隊の全滅よりも更に大なる恥辱であつた。されば彼等は直ちにこの條約を破棄する口實を發見した。

カウダイン峠に於ける慘敗後も戦争は繼續した。ローマの政策として其の征服せし土地は、假令寸土と雖もこれを征服し、其の國境には要塞植民地を設けて敵を包圍した。サムニテ人はエトラスカ人及びウムブリア人の援助を得たけれども、ローマは今やすべての戦に勝ち、執政官等はエトルリアを掠め、サムニウムの要塞を占領した。この戦は紀元前三〇四年を以て終り、サムニテ人は甚しき損害を受けしも、彼等は依然自由であり従前の條約を更新した。

第四三節 第三サムニテ戦争 (前二六六—二五〇) 第三サムニテ戦争に於ては、全イタリア民族、エトラスカ人及びケルト種族の侵入者も合流してローマに對抗した。決戦はウムベリアのセンチナム Centinnum にて行はれ、激戦の後辛うじて勝利を得た。ローマは敵の同盟を粉碎した。同盟國に捨てられたサ

ムニテ人は尙ほ五年を支へた。終に農民より起りて執政官となりしマニウス・クリウス・デントタタス

Manius Curius Dentatus は、彼等をして和を求めしめこれをローマの從屬同盟國とした。平野と山地との争ひは、エクイア人及びヴォルスキア人との戦を端緒として、少くとも共和政の當初に始まり(註)、やがてローマとサムニウムとの戦争にその絶頂に達し、暫くの期間を置いて半世以紀上の間行はれた。長き争闘は今や終りを告げた。伊太利はエトルリアよりルカニカに至るまで荒寥に歸し、都市と村落とは廢墟となり、牧場と田圃とは荒野と化し幾千の武士は戦場に仆れ、嘗て自由民たりし幾萬の男女小兒はローマ人の奴隸となつた。文明は勝利を得たが而も大なる犠牲を拂つた。この戦争はローマ人に貪慾心を與へ、古代社會の呪詛たる奴隸制度を培養した。

(註) 第三三節以下、第三六節

第四四節 タレンツム戦争・ピルスとの戦 (前二二九—二二七) サムニウムに勝ちしローマ人は、自然其の同

盟を擴張して南部伊太利を統治するの有利なるを知つた。この地方の主なる國家は希臘人の建設せしものであつた、然し多くの希臘都市は既に土人に征服せられ、ナポリその他若干の都市はローマの同盟國となり、全く獨立せる唯一の主なる國家はタレンツムであつた(註)。タレンツムは既に久しく商工業の中心地として、また羊毛の加工業と染織業とに活躍し、羊毛は大部分をサムニウムより輸入した。従つて彼等はローマの霸權がサムニウムに及ぶを見て貿易上の脅威を感じた。彼等は口

ローマ人と條約を締結し、ローマの船舶はタレンツムに向つてラシニア Tacinian の岬を通過せざる
 こととした。彼等は其の都市に鞏固なる防備を施し、其の艦隊が海上を支配する限り自國の安全を
 確信し、ローマが彼等と海上の覇權を争ふに足る有力なる艦隊を建造すべしとは夢想しなかつた。
 然るに彼等はローマの小船隊が公然禁を犯して出動せるを見て激怒し、數隻のローマ船舶を撃沈し
 また船員を殺害した。ローマ人は使節を派遣して賠償其の他を要求したが、此等の使者に對する彼
 等の無禮なる待遇は遂に兩國の戦争となつた。爰に於てカタレンツムはエピルス Epirus 王ピルス
 Pyrrhus に援助を求め、この軍事的天才を具へし國王は少數の有力なる軍隊を率ゐて來援した。彼
 等はマケドニア密集隊(註三)の武器と戦術とに深く習熟して居た。ピルスは先づ敵とヘラクレア He-
 raclea に於て鋒を交へ(前二)、ローマの輕裝隊は彼の『槍襖』に對して七回も突撃を試みたが、其の都
 度多大の損害を受けて撃退された。次いで彼の訓練せし戦象は、怯ゆる敵陣に一齊射撃の如くに突
 進し其の戦列を紊した。ローマ人は彼等の所謂『灰色の牡牛』の前に戦慄し、最後にテッサリー騎
 兵の搏撃により完全に絶滅した。ローマの同盟國は背きて戦勝將軍に味方し、彼はローマを距る四
 十哩のところまで進軍した。而も最近の戦ひに彼の被害も亦多く、従つて彼は講和を欲し、ローマ
 人の勇氣と訓練とを讚嘆してやまなかつた。彼の使者キネアス Cineas は元老院に於て雄辯を揮つて
 講和を説いた。然るに老齢盲目の政論家アピウス・クラウヂウス・カエカス Appius Claudius Cla-

udius は、擔架に乗つて元老院に至り屈辱的處置に反對した。『ピルスを先づ歸國せしめよ、然らば吾
 人は彼と平和を締結せん』。此の宣言のうち今後ローマは伊太利の問題を自主的に處理すべき原則
 が述べてある。キネアスは雄辯と賄賂とを以てして尙ほ目的を貫徹する能はず、ピルスにローマ元
 老院は國王等の集會なりと報告した。ピルスは更にアスクルム Asculum に勝利を得たが、多大の
 犠牲を拂つた、されば彼は友人に『今一回斯る勝利を得ば吾人は全滅せん』と言つたと傳ふ。次い
 で彼はシシリーに渡りカルタゴ人に對して希臘人を援助した。然しこの地に於て彼は輝やける成功
 を博したるも、敵をシシリーより驅逐することは出来なかつた。僅かの老兵と共に伊太利に歸つた
 彼は、ベネヴェンツム Beneventum に於てデンタタスのために敗れ(註三)本國に引上げた。彼の撤退
 後タレンツムは降り、間もなくローマはルビコン以南の伊太利を統治することとなつた。

(註一) 第二六節 (註二) 第三八節

第三章 ローマの統治組織・文明の進歩

第一款 組織

第四〇五節 ローマ市民 ローマ統治の下に結成されし領土内には、完全なる市民權を有するものよ

り從屬民に至るまであらゆる階級の特權を有する國家社會があつた。先づローマ市民につき述べん

四〇七

に、彼等の多數はローマ若くは其の附近に住し、ローマの市場を賣買に利用し、其の訴訟はローマの法廷に於て審理せしむることが出来た。其の他のものは遠隔の土地に住して此等の利益を享くる能はず、斯る人民の都市はこれをマニシピア *Municipia* と稱した。第一流のマニシピウムは米國の自治體と同じく、独自の政治組織を有し保安官・參事會・民會より成つてゐた。民會は『村會』の如く屢々會合を開き、保安官を選擧し法律に協賛し政務に關與するところが多かつた。其の起原及び一般的の性質に於て、自治都市の民會はローマ若くはアテネの民會と同様であつた。マニシピウムの住民は其の訴訟を都市の法廷に於て審理し、各種の事業を營み、同時にローマ市民としてはローマに赴きて投票をなし、若くは官吏の候補者たる權利を有して居た。斯くの如きマニシピウムの例はタスクラム *Tusculum* であつた。

然し他のマニシピアはこれに比すれば下級のものであつた。彼等は同じく地方的自治機關を有し其の住民は又たローマ市民にして、他の市民と貿易し又た婚姻する權利を有してゐた。然し首府に於て投票し官職に就くことは出来なかつた。カエレは此の種の例として既に述べたところである(註一)。此等の人民は『投票權なき市民』と稱せられてゐた。

ローマは稀に叛亂せし市府を罰するため其の自治權を奪ひ、これを支配統治するため絶對權を有する府尹を送つた。これを稱してプレファエクチュア *Praefectura* と言ひ、最下位のマニシピアである

其の住民は表面投票權なき市民であるが、實際は從屬民であつた。斯る待遇を受けしものは僅かに

二市(註二)に過ぎず、而も其の懲罰は一時的のものであつた。

更に別種のローマ社會があつた。ローマの植民地(屯田)がそれである。これは大體三百の市民より成る守備兵にて、其の家族と共に新しく征服された都市に配置され、主に海岸にありて沿岸の防備に任ずる。土人より沒收せる土地の三分の一は新移住民に與へられ、完全なる自治權を有し、土人に對しては貴族の平民に對するが如き地位にあつた。土人は投票權なき市民權を與へられ、漸次完全なる市民權を獲得し、終に植民者との區別は消滅するに至つた。

(註一) 第E〇二節

(註二) 其の二市とは紀元前三〇六年に叛亂を起せしアナニア *Anagnia* と、第二ポエニ戰役の時にハンニ

バルに味方したカプアとである。

第四〇節 同盟國・ラテン人と伊太利人 以上はローマ市民のことのみである、吾人は同盟國を考察せねばならぬ。ローマ人と血統・言語・慣習及び感情に於て最も近きものはラテン人であつた。彼

等は(一)チブール(註三)の如き二三の舊ラテン都市にして、未だローマの市民權を有せざるものと、(二)伊太利の各地に建設されしラテン植民地とより成つて居た。ラテン人もローマ人も等しく此等の植民地に赴きしが、其のラテン植民地と稱せられたる所以は、彼等がラテン人の權利を有し――

即ち舊ラテン都市と同様の状態にありし故である。ラテン都市はすべて起原の如何を問はず、殆んど自治自主の國家であつた。各都市はローマと夫々別箇の條約を締結して兩者の關係を規定してゐる。ローマに上りしラテン人は、こゝに貿易を行ひ財産を獲得し、ローマ人と婚姻すれば容易に市民權を與へられた。此の種の植民地は附近の國土をローマに歸屬せしむる前衛地として、またラテン語と其の文明とを土人に弘通する手段として貢獻するところ多かつた。

ラテン人よりも下位にありて單に伊太利人と稱せし同盟國がある。その一例はサムニテ人である。ラテン人の如くローマと特別の條約を締結した。彼等の間にはあらゆる程度の特權を有し、或ものはローマに對する權利に於て多く他と譲らず、これに對して獨立の程度の一層制限された都市があつた。ラテン人も伊太利人もローマに對しては租稅若くは貢賦を拂ふことなく、唯條約の定むるところによりローマの開戦する場合に一定の軍隊を出して從軍せしめた。海岸にある都市、特に希臘諸市は船舶と船員とを提供した。すべての同盟國は夫々其の軍隊に武器糧食を供し、その給料を支拂はねばならなかつた。而も宣戰若くは講和には何等容喙する權利を有しなかつた。

こゝに述べし伊太利の政治組織は、ローマを盟主とする小國家同盟の形式を備へ、ペロポネサス同盟若くはデロス同盟の如く、唯其の何れに比するも遙かに中央權が強大であつた。ローマはルビコン以南を掩有し、イタリア人の占據するウムブリアの沿岸を除く。イタリア人はローマの征服せ

し朝貢臣從民であつた。伊太利人はローマを盟主として一民族を組織し主にガリア人に對抗した。——短袴を着けし國民に對する外衣の國民である。伊太利國民性に基礎を置きローマを指導者とするこの聯邦組織は、伊太利半島の平和を保障し、ローマに世界的大國家たる地位を與へた。當時東方(註)の大國家には埃及あり——ローマはこれと紀元前二七三年に同盟す——マセドンあり、セレウカス家の帝國あり、西方にはカルタゴあり、ローマがあつた。

(註) 第三三節

第四七節 ローマ・伊太利同盟諸國

一、ローマ市民

1. ローマ及び其の附近に住し、其の市場と裁判所とを利用する。
2. 第一級のマニシピアの市民——地方的自治權を有し、ローマに於て投票權及び官職に就く權利を有す。
3. 第二級のマニシピアの市民——地方的自治權を有するも、ローマに於て投票權及び官職に就く權利を有せず。
4. 第三級のマニシピア即ちプレフェクチュアの住民——地方的自治權及びローマに於て投票、官職に就く權利を有せず。
5. ローマ植民地の市民——其の特權は第一級のマニシピアの住民に等し。

二、同盟國

條約により戦時はローマの指揮を仰ぎ、出征する義務あるも朝貢國にあらず。

1. 特に優遇を受くるラテン人は容易にローマ市民権を獲得するを得。

イ、舊ラテン都市の若干。

ロ、ラテン植民地。

2. 待遇の程度低き伊太利人の特権は夫々非常の相違がある。

三、宦從民——ウムブリアのガリア人、朝貢國

第四八節 軍制改革・軍團の組織

共和政最初の百年間は、セルヅキス(註二)の編制せし密集隊が用ゐられた。軍人は無給にて其の資産に應じて武装を調へた。然しヴェイとの戦争に際し、元老院は其の勤勞に報酬を支拂ひ、斯くて軍制の徹底的改革が行はれた。蓋し此の後市民は夏季短期軍務に就くの習慣であつたが、必要に應じては一年を通じて服務することとなり、富者も貧民も等しく完全なる武具を備へるとなつた。されば武具と軍隊の編制とに現はれた階級的區別は、軍務の経験による編制に代つた。新兵は輕裝隊に入り暫くして重甲兵の第一線に就き、次いで第二線に轉じ、老兵となるに及んで第三線に参加する。第一第二線の兵士は各自防身具と共に二本の投槍 *Pila* 及び刀劍を帶び、老兵は同じ武装を爲すも投槍の代りに長槍を携へる。

堅固なる密集隊フランクの代りに重裝せる兵士の戦列は、*Maniples* (小隊) と稱する十隊に分れ相當の間隔を置く、其の間隔は第二列の部隊によつて蔽護され、各戦列は數伍に達する。普通一軍

團 *Legion* は二千の重甲兵と一千二百の輕裝兵より成り、軍團の數は戦争の場合によつて異り、普通三百の騎兵が各軍團に配屬されてゐた。

此の軍制改革は有名なるヴェイの占領者大都統カミルス(註三)の斷行せしところと言はれ、ピルス戦争の終に殆んど完成した。

(註一) 第三六節 (註二) 第四四節

第二款 文明と特性

第四〇節

土木事業

ローマ人は伊太利を支配し、其の法律制度を改善しつゝ、進んで更に國富を増加した。彼等は紀元前第四世紀青銅を以て貨幣を作り、第三世紀の初には銀貨を鑄造した。貴族は征服せる土地の大部分より生ずる利益を收め、多數の奴隸を買収した。國家も亦征服によつて多大の財を得、此等の富はその一部を土木事業に使用した。アピウス・クラウヂウス・カエカス(註四)は長く検査官の職にありし間(前三三)に、水道を作りこれをアピウス水道と命名したが、これによつてローマは約十哩隔りし山中より新鮮なる清水を多量に供給せられた。水路の大部分は地下道を通つたこれはローマに於ける此の種の最初の事業であつた。この後ローマは數世紀に互り人口の増加につれて、更に大なる水道を建設せねばならなかつた。其の或ものは高き石造のアーチを以て通水路を

支持した。

彼は又たローマよりカプアに達する軍用道路——アピウス街道——の建設を試みて完成することを得た。此れ亦この種の最初のものにて、能ふ限り直線に又た平坦に造られ、峻岨なる丘陵は墜道にて貫き、沼澤と深き谿谷とには石造の廣大なる堤道が架けられた。平坦なる道路は路床を強く堅め其の表面は至るところ平滑耐久力ある大石を敷き、路傍には里程標を立て、其の間には乗馬の際に使用する踏石を置いた。クラウヂスの範例は他の模倣するところとなり、終に數世紀の間に普ねく敷設された。其の主要なる目的は軍隊の行動・軍需品の供給を敏活にし、公文書を速達するにあつた。此等の道路は又た旅行、商業其の他の目的にも自由に利用せられ、これによつてローマは其の大帝國を保護し、これを完全に統治し、商業及び共通の文明によつて各地方を結束することが出来た。これ實にクラウヂウスの範例に本づく雄大なる結果である。

(註) 彼は本節に叙せし土木事業建設のため、斯く長期間検査官の職にあつた。

第四〇節 教育と知力 野心あるローマ人は初期の時代にも商業と外交上の必要より希臘語を學んだ。恐らく當時は尙ほ學校なるものなく、兒童は其の家庭に於て両親若くは希臘人の奴隸より教育を受くるのであつた。十二鏢法及アピウス・クラウヂウスの編纂せし若干の詩・箴言及び雄辯以外には、ローマ人は如何なる種類の書物をも有せず、希臘文學は二三の個人を除き尙ほ研究するに至ら

部と、サルヂニア全島とシシリイの大部を有し、其の他多くの小島嶼を網羅してゐた。カルタゴが將にシシリイの殘餘を併合せんとせし時、ピルスは希臘人を援助するため此の地に來り(註二)、カルタゴ人とシシリイを争ひしも結局失敗に終つた。彼はこの地を去るに臨み嘆じて曰く、『吾人は中原の地をローマとカルタゴとの逐鹿に委ねんとする』と。此等の兩國民は當時ピルスに對抗して同盟してゐた。然しピルスは彼等が間もなくシシリイの争奪戦を開始することを知悉してゐた。その後カルタゴはメツサナ *Messana* とシラクユーズとに屬する領土を除き全島を回復した。若し此等の兩都市を征服したなれば、彼等が伊太利に侵入し來るは自然である。伊太利人の保護者を以て任ずるローマは、この對手の行動を不安を以て眺めて居た。

(註一) "Punic" (Punicus) はフェニキア人のラテン名である。

(註二) 第三八節 (註三) 第四〇節

カルタゴ人の野心は政治的帝國の建設よりも寧ろ商業的霸權にあつた。ローマが共和政となりし時、カルタゴはローマ人にある種の制限を附しカルタゴ帝國内の都市と貿易を許す意嚮であつた。やがて彼等は一世紀半の後にはカルタゴを除き、一切の港灣をローマ人に對し閉鎖し、更に斷然西部地中海の商業を獨占する決心をした。されば彼等は西部諸港に航行するローマの船舶を拿捕し、其の船員を海中に投じた。『ローマ人は吾人の許可なくして海中にて其の手を洗ふ能はず』とカルタ

ゴ提督の一人は傲語した。これに依て見るもカルタゴはローマとの開戦に際し、如何に攻撃的精神を以て磅礴せしかを容易に理解することが出来る。

アジア種族なるカルタゴ人は其の特質と文明とに於てローマに劣つてゐた。彼等の昂奮せし時政府は暴民によつて支配され、平常は富豪の左右するところであつた。彼等の公人は腐敗してゐた、彼等は重税を以て従屬民を壓迫し、而も彼等と同様の權利を許す希望すら與へなかつた。彼等の宗教も亦非人道的であり不道德なものであつた。斯くの如き國情にあるカルタゴ人に歐羅巴の大部分が永久に支配を受くることは非常な不幸事であつたに相違ない。ローマの使命は歐洲の善美高度の文明を此の危険より保護するにあつた。

第四三節 戰因

ポエニ戰爭の根本原因は、カルタゴとローマとの利害の衝突である。カルタゴは

全シシリーより尙ほ進んで伊太利を占領するならば甚だ利益なりと感じた。この時までカルタゴの權力は極めて順調に發展して來た。彼等は海軍を有せざるローマが障碍となるを豫期しなかつた。

これに對してローマは伊太利の盟主として半島を保護する責任があつた。さればローマ人の主要なる動機は、自國と同盟國とを保護するにあり、尙ほ彼等の間には既に有するところを以て満足せず、シシリーの一部をも併合せんと希望せし若干の勢力ある貴族があつた。彼等のうちには單に自己の榮譽と利益とにより打算して戰爭を欲した。ローマの第二義的の動機は、これによつて征服欲より來る

榮譽と利益とにあつたと言ひ得られる。

戰爭の直接原因は次の通りである。シラクユーズの軍務を免ぜられたるカムパニアの傭兵中に、メツサナを占領し男子を殺害し婦人小兒と財産とを分配したものがあつた。一時此等のマメルタイン Manerines (『マルスの子等』)と自稱せし盜賊等は、兇暴の限りを盡し多數のシシリー都市に朝貢を課した。然し希臘人及びカルタゴ人より脅かされし彼等はローマに同族の故を以て援助を求めた。元老院はマメルタインを援助するの不義なるに想到せしも、カルタゴ人にして彼等を征服し全シシリーを支配するに至らば、進んで伊太利に指を染むるに躊躇せざるべきを怖れた。斯る理由により民會は動かされメツサナと防禦同盟を締結するに賛成した。これカルタゴに對する宣戰布告と同じ意味のものであつた。

第四四節

ローマとカルタゴとの比較

兩國の國勢は全く相違してゐた。カルタゴは威容堂々たる

海軍を以て海洋を支配し、其の富は以て多數の傭兵を支へることが出來た。然し此等の傭兵は屢カルタゴに對して叛亂を企てた。市民は多くの商人及び工匠にして全く軍務に適せず、士官を除き進んで從軍するものは極めて少數であつた。斯くの如き軍隊はカルタゴの一大缺點であつた。これに反し伊太利は人口稠密なる農業國であり、その人民は當時の世界のいかなる國家に比して遜色なき軍國民であつた。彼等はその田園に於て困苦勤勞に耐へ、世界無比の訓練を受けた強健なる鬪

士であつた。同時にローマと國土とに對する熾烈なる彼等の愛國心は、他の企及し難き強味であり特性であつた。各國家は鞏固なる同族意識を基本とする同盟を組織し、夫々地方的政務を處理し、而も武力についてはローマに絶對的信賴を拂つてゐた。唯一の弱點は船舶を有せず海軍の經驗なきことである。今や正面衝突を行はんとする二大強國は何れも他の弱點に於て優つてゐた。この戦争は必ず長期に亙り激烈であるに相違ない、何人も其の勝敗を逆賭し得なかつた。

第四節 當初の事件・ミラエの戦(前)

ローマはマメルタイン援助の決心をなし、軍司令官たる執政官は同盟海軍國より數隻の船舶を借り、カルタゴ人とシラクューザ人とが海陸より包圍せしを破り、巧みに軍隊をメッサナに入れた。ローマ人は包圍軍を驅逐しシラクューザの國王ヒエロン Hieron と同盟し、内地の諸市は、シラクューザ若くはカルタゴよりも、ローマに味方するを以て一層安全に感じ直ちに降伏した。カルタゴ人を沿岸諸市より驅逐するには、艦隊を建設する必要があつた。ローマの希臘同盟國は若干の軍船を提供するを得るも、伊太利側には敵の主力たる五段撓船 Quinqueme を所有せる國家は一も無かつた。ローマ人は坐礁せるカルタゴ船を模型として、彼等固有の勇氣と不撓の精神とを以て艦船の建造に着手し、斯く製艦に忙殺されつゝ、他方には船員の養成に努め、海岸に設けし椅子に就いて砂上に漕艇の練習を行はしめた(註)。彼等は其の艦隊を完成するや、これを海に浮べ敵とミラエ Myrae の沖に於て戦つた(註)。此等の船舶は其の運動鈍く船員は

敏捷を缺きしも、最近の發明になる吊り橋を利用して敵船に入り終に勝利を得た。此の成功は彼等の戦争熱を一層煽つた。

(註) この物語は最も信すべき歴史家ポリビウス Polybius の述ぶるところ一點の疑ふべき餘地はない。

第四節 リビア侵入・レグルスの捕虜(前)

ローマ人は次いで三百三十隻の艦船を建造し、こ

れに約十五萬の兵を載せリビア Libya に向つて出帆した。シシリー海岸のエコノマス Economus の沖に於て彼等は敵の大艦隊に遭遇し、これを撃破したる後アフリカに針路を續けた。こゝに執政官レグルス Regulus は數回の勝利を得て若干の都市を占領した。然るにラセデモン人ザンチッパス Xanthipus はカルタゴ人に野戦をすゝめ、其の戦象と騎兵とを有利に使用することを説いた。その結果ローマ軍は惨敗しレグルスは捕虜となつた。

更に不幸が續いて起つた。然し紀元前二五〇年パノルマス Panormus に大勝利を得て、ローマ人は殆んど全シシリーを掌中に收めた。かゝる事情の下にカルタゴ政府は尙ほ俘囚たりしレグルスをローマに派して捕虜の交換を協定せしめ、成功の曉には釋放すると約した。後世ローマ詩人の傳へし物語によれば、彼はローマに元老院議員としては勿論、一市民の資格を以て入城することすら拒絶し、すべての權利は捕虜となりしたため没收せられたものであると言つた。最後に元老院議員より演説を求められた時、彼はカルタゴと決して講和すべからず、又た捕虜を賠償するの要なし、彼等

は寧ろその耻辱を受けし土地に於て死ぬべきである、斯くして彼等は始めて他人の模範となり得べく、彼自身も亦カルタゴに歸り彼等と運命を共にする覺悟なりと述べた。元老院議員は彼の翻意に努力したけれども無効であつた。ローマを去るに臨み彼は頭を垂れ其の妻子を見るを欲せず、カルタゴに歸りし後は其の宣誓に従ひ火刑に處せられたと言ふ。幾分の詩的修飾はあるにせよ、この物語は大體眞實であると思はれる。誓言を忠實に守り、國家の爲には一身はもとより、同じく捕虜たる國人をも犠牲に供して顧みざる嚴格なる愛國者、又た其の運命を知りつゝ、之に殉ぜんとする意思の鞏固なる人物を描きしものである。これ理想的ローマ人の特色であつた。

第四七節 ドレパナの敗北(前二四七) 當時ローマ人はシシリ島の西岸にあるリリバエウム Lilybaeum を包圍し、更に北方のドレパナ Drepana にはカルタゴの提督アドヘルバル Adherbal が其の艦隊を率ゐて碇泊して居た。紀元前二四九年執政官パブリウス・クラウヂウスは、リリバエウムよりドレパナに向ひアドヘルバルを不意に襲撃せんとした。然し提督は敵の術中に陥らず、却つて壓倒的敗北を與へた。ローマ人はこの不幸を説明するに當り、クラウヂウスの攻撃計畫中、聖鶏が食事を取らずとの報告を受けた(註)——神々がその計畫を禁ずる意味の前兆である。然るに彼は若し鶏が食せざれば水にても飲ませよと傲語し、これを海中に投棄した。彼は更に統帥の伎倆を缺き、その不信仰と共に此の一大不幸の原因であると言はれて居る。

(註) ローマの保安官は天體を觀測して卜占を行ひ(第三七節)、軍司令官は戰時聖鶏の一群を陣中に携へ其の食事の状態により勝敗を卜した。聖鶏が食物を貪り食へば愈々吉兆なりと信じた。

第四八節 ハミルカー・バルカ(前二四七) ローマ人がリリバエウムを包圍しつゝ、ありし時、カルタゴは一人の將軍を派遣した。彼自身はもとより其の子等も亦ローマに取つて最も怖るべき敵將たりしものである。それはバルカ Barca(「電光」の意味)と稱せられしハミルカー Hamilcar にして、稀有の軍事的天才であつた。彼は當時ローマ軍の占有せしパノルムス Panormus の上方にあるエルクテ山 Mount Eryx を占領し、山上に家畜を飼育し穀物を耕作して其の軍隊を支へ、兵士も亦彼の天才と相俟つて驚嘆すべき事業を遂行した。或は脚下にある小灣より輕舸を飛して伊太利沿岸を惱まし、或は僅かに鷺の翼を休むるに足る山頂より、電光の如く附近のローマ人の村落に殺到し、忽ちにしてまた再び容易に近づく能はざる古巢の堅塞に歸つた。

三年間この地位を維持せし後、彼は突如この地を捨て、エリッククス山 Mount Eryx の側面に轉じ、遙かにドレパナにある友軍と呼應して共同作戰をなすこととなつた。然しこの少數の手兵を以て大成功は困難であつた。實際兩國共に早やこれ以上に有力なる艦隊若くは軍隊を支持する手段を有たなかつた。ローマは海軍なくしてシシリ島を完全に領有する望みはあり得ない、由つて富裕なる市民は私財を投じて新戦艦を建造し、斯くして得たる二百隻を執政官カタルス Catulus に附し、エー

ガテス群島 Aegatian islands 附近に於てシシリーに軍需品を輸送せるカルタゴの新艦隊と會し全くこれを撃破した(前二) (四二)。

カルタゴ人は最早や戦争を繼續する能はず、ハミルカーに講和の全權を委ねた。最後に成立せし條約によりカルタゴはシシリーを放棄し、十年間に三百五十萬弗に相當する償金をローマ人に支拂ひ、すべての捕虜を無償にて放還すること、なつた。第一ポエニ戦争は二十三年間繼續せし後、紀元前二四一年に終局を告げた。

第二款 『休戦』期間 (前二四二) (一三六)

第四節 ローマ最初の屬領シシリー(前二三三) ローマ人のシシリーに於て勝利を得るや、彼等は最初單にシシリーを伊太利の延長と考へてゐた。斯くの如き思想より彼等はメッサナ、シラクユーズ及び其の他特に好意を有する諸市と同盟條約を締結し、此等の諸國を全く伊太利同盟國と同じ地位に置き、他のシシリー國家は別の階級に屬し、其の數稍多く『朝貢を免ぜられたる自由國』と稱せられた。然しそれは條約によらず、ローマ政府の法令による宣言である。彼等は實質的には同盟國家と同様の權利を有するも、ローマは彼等の地位を意の儘に變更し得るが故に、此等の權利は繼續の保障を有せず、伊太利の聯盟組織とは別個のものであつた。更にその他の殘餘の國家(前二三三)はローマ政

府の法令により、永久に従屬的地位に置かる、に至つて一大變化が行はれた。從屬國家はシシリー屬領を構成し、この島の大部分を占めてゐた。屬領の組織は紀元前二二七年に完成し、爾來ローマは毎年大判官 Praetor を派遣してこれを統治し(前二三三)、主として軍事と司法とを管掌した。大判官は屬領の軍隊を指揮し、ローマ人相互の訴訟を判定した。各國家は夫々其の市民を裁判すべき法廷を有し、自國の法律習慣を保持し、且つ保安官・參事會・民會を具備し通常知事の干渉より免れた。實際ローマ政府は假令これを欲するも各國家の事務を管理するに足る多數の官吏を有せず、従つて地方事務を管掌する思想は、共和政の廢止後も久しくローマには擡頭しなかつた。從屬國家は軍務を免除されし代りに歳貢を課せられ、シシリーの場合には農産物の十分の一であつた。二名の會計吏は毎年シシリーに派遣され此等の財務を處理した。彼等は公然收稅權を最高の評價者に委託し、各國別にこれを実施した。普通國家は其の代表者を派遣して徵稅の計畫を立て、外國徵稅業者の跳梁を防いだ。以上はローマ最初の屬領組織にして、其の後のものは殆んどこれと異らぬ(前二三三)。屬領の數の増加するにつれて彼等は保安官 Magistrates の支配を受けず、前保安官 Promagistrates —— 即ちローマ以外の無任所官にして、而も保安官の階級に屬し其の權力を有せしものによつて支配された。此等の知事は前大判官 Propractor であり若くは前執政官 Proconsul であつた。全體より見てこの行政組織は公正であり、正當に行はれたならば壓制的とならなかつたであらう。この制度の弊害

は別の場合に考察するであらう(註一)。

(註一) こゝに挙げしすべての國家——實際ローマ帝國の殆んどすべての國家は小都市國家であつた。第二八節すべての屬領は斯る國家の集團である。

(註二) 大判官は紀元前三六七年ローマに創始せられた(第五節)。紀元前二二七年には四名の大判官がゐた。うち二名はローマに於て司法事務に従事し、他の二名は同年組織された屬領統治に派遣された。

(註三) 例へば其の他の屬領には一名の會計吏しかゐなかつた。

(註四) 第四四節

第四〇節 傭兵戦争とサルヂニア及コルシカの占領(前四二)

能はず、依つて彼等は叛亂を起し、これにカルタゴの誅求に反抗して起ちしリビア人が参加した。

カルタゴが此等の内亂鎮定に全力を傾けつゝ、ありし虚に乗じ(前四二)、ローマ人はサルヂニアとコルシカとを欺き占領し、カルタゴの抗議に會ふや却つてカルタゴに多大の罰金を科した。カルタゴは

當時結末に近づきつゝ、ありし傭兵戦争に、全く國力を蕩盡し遂に讓歩した。敗者に對して取りしローマ人の行動を、單に道徳的理由を以て評論するは當を得たものではない。彼等の動機は單なる領土欲ではなかつた。彼等は二十三年間伊太利半島を敵の攻撃より保護するためにカルタゴとシシリヤを争ひ、その目的を達するために多くの國帑と人命とを犠牲にした。然しカルタゴがサルヂニアと

コルシカとを領有する限り、彼等は依然敵の攻撃に暴露して居る。されば此等の島嶼を欺き占領せし主なる動機は自己保全であつた。サルヂニアとコルシカとは共にシシリヤと同年に第二一のロー

マの屬領となり(註一)、其の政治も殆んどシシリヤと同じく、其の住民は稍不利なる状態にあつた。

第四一節 ガイウス・フラミニウスとガリア戦争(前三五)

ローマ市民の多數は新しき屬領制度に不

満足であつた。彼等はシシリヤの土地分讓に參與し得ざりしに失望した。而も貴族は貿易と投機と

により新屬領の富を壟斷すると思はれた。更に最近政府がピセナム及びウムブリア沿岸に於て得た

る土地の大部は、貴族のために留保してこれを市民に分與せず、彼等自身『占有』(註二)“occupied”

したるも亦不滿の原因であつた。斯る利己的政策は元老院の支持せしところであつた。然るに紀元

前三二三年の平民護民官ガイウス・フラミニウス Gaius Flaminius は、元老院の希望に反し此等の公

有地を市民に分割する法律を民會に提出して協賛を得た。この法律の結果新に作られし新植民地は、

ポー河の平野に住せしガリア人(註三)に取つて自己の領土を脅かするものと思はれた。紀元前二二五

年彼等はローマに挑戦し、二年後フラミニウスは執政官として軍を督し、その勇氣と熟練とを以て

ガリア人の領土に彼等を粉碎する計畫を立て完全に勝利を収めた。其の翌年即ち紀元前二二二年ロ

ーマの權力はアルプスの山麓に及び、ガリア・チザルピナ Gallia Cisalpina と稱せられしポー河の

平野は、終にローマの屬領となつた(註四)。

(註一) 理論上これ等の地代は政府の經費となつたのであるが、實際占有者は少しも支拂はなかつた。

(註二) 第六〇節、第三六節

(註三) その屬領組織となりし時期に關しては近世學者の間に相當の論議がある。時としてこのガリア戦争を説明するために使用されし言葉——「伊太利の自然的國境(即ちアルプス山)に至る膨脹」——は妥當なものではない、紀元前四二年までガリア・チザルピナは伊太利のうちに含まれてゐない。

第四三節 フラミニウス街及フラミニウス競技場

ローマ人は直ちに新領土のポー河岸に植民地を建設し、紀元前二二〇年検査官に選舉せられたるフラミニウスはローマとアリミナム Ariminum とを連絡する一大道路を築造し、其の名を取つてフラミニウス街と命名した(註二)。これは新領土の保護發展と、並びに軍隊に對する補給と、飢饉に際してローマの市民はポー河の沃野より食糧の供給を受くる等、非常なる價值を有してゐた(註三)。同時にこれによつてローマ人は其の未だ夢想せざりし北方進展の大望に眼を開いた。

こゝに述べし街路はカピトル丘の麓にある門前に發し、カムプス・マルチウス(註三)を通過して居る。門の彼方チベル河の方向にはフラミニウスの牧場がある。昔より彼の家族の所有に屬して居た。フラミニウス若くは其の祖先の一人はこの土地を政府に提供し、こゝに競馬、戰車競争其の他公眾慰安のためにフラミニウスの競技場が建設した。其の圓屋根の迴廊は市民の散歩場となり、小兒は

戲遊し商人は市を開いた。この建築物は市民多數の使用に供せられた。

フラミニウスは終始一貫ローマ偉業の基礎をなす農民のために努力した。伊太利以外の領土の併合によりローマには既に資本家階級が發生しつゝあつた。フラミニウスは資本主義が農民階級の滅亡を來すことを感じてゐた。彼はこゝの點に於て卓見ある政治家であつた。

(註一) 第四九節 (註二) 第五二節 (註三) 第六〇節

第四三節 イリリア戦争(前三元)

希臘貿易に従事せる伊太利商人にして、イリリア海賊のために或は掠奪せられ、或は殺され捕虜となり、抑留されて身代金を科せられしものがあつた。此等の暴行に對する陳情は、既に早くローマ政府に提出せられてゐた。由て元老院は委員をイリリア Illyria に派遣してこれを調査することとなつた。然るに委員は更に虐待を受け、その一人は殺害せられた。こゝに於てローマは戰を宣し、先づ小海戰によつてこれ等の海賊的住民を討伐し、朝貢を約せしめた。コルキラ其の他一二の希臘國家はローマと同盟し、イリリア人の暴虐より將來の保障を得た。ローマの使節は次いでアケーア及びエトリア同盟(註二)を訪れ、彼等の戦争行爲に就て辯明した。兩同盟の當局者はローマの海賊討伐に對して感謝の意を表し、こゝにローマと希臘とは始めて外交關係に入つた(註三)。

(註一) 第三六節以下

(註二) 十年後第二イリリア戦争(紀元前二一九年)起りローマは同様に勝利を得た。イリリアは次いでローマに服屬せしも、そのイリリウム Illyricum なる名稱を以て屬領となりしは紀元前一六七年後にてその正確の時期は不明である。

第四節 西班牙に於けるハミルカー(前二三)

斯くローマが北部伊太利及びイリリアに進展しつつある時、西班牙には一國家の勃興するあり、間もなくローマを脅威するに至つた。ローマとカルタゴとの講和を一時の休戦と見たるハミルカーは、ローマ人のサルデニア及びコルシカに對する欺瞞的態度に義憤を感じた。彼の魂は、武力と譎詐とにより祖國より海上の霸權と最善の土地とを奪ひしローマに對する憎惡に燃えた。彼は其の軍隊を率ゐて伊太利に至り、ローマを攻撃する最善の方法を考へた。彼は傭兵に依頼して失敗せしに鑑み、西班牙に一州を創設し、次に次の戦争には軍隊と糧食との根據地とする計畫を立てた。彼は發するに先ち當時九歳の息ハンニバル Hannibal を祭壇に伴ひ、ローマに對し永久に敵意を抱く宣誓をなさしめたと傳へてゐる。ハンニバルは父に伴はれ、死に至るまでの宣誓を空しくしなかつた。

ハミルカーは九年の日子を費し、戦争よりも主に外交手段により、西班牙に於てカルタゴの屬州を組織するに没頭し、土人は彼の統治の下に平和なる生活を営み且つ國土を開發した。『次いで彼は其の大功業に適はしい死を遂げた。即ち彼は凛然たる勇氣をもつて大膽に戰場を馳驅しつゝ、終に近

いた。彼の後繼者としてカルタゴ人は女婿ハスドルバル Hasdrubal を任命した』(註)。

(註) ポリビウス第二卷第一節 Polybins, ii, 1.

第五節

ハンニバル

ハスドルバルは前任者の賢明なる政策を繼承し、巧妙なる手段を盡して各種族を糾合して帝國の味方とした。斯る功績を續くること八年終にケルト人の刺客の手に仆れし時、兵士等は歡聲を擧げてハンニバルを將軍の天幕に伴ひ彼を指揮官と推舉した(三)。彼等がこの青年將軍を見る時、『老兵たちは青年時代のハミルカーの再起と想像した、彼等は彼の身體に同じ勇氣を、其の眼に同じ活氣を、彼の顔に同じ特色と表情とを見た……危険に際しても彼の勇氣と彼の深謀英慮とは眞に驚嘆すべきものであつた。いかなる勤勞も彼を疲憊せしむることなく、彼の精神を萎靡せしむるものなく、彼は飢餓と寒氣とに堪ゆることが出来る。彼は自然の命ずる以上に飲食を敢てせぬ。日夜働き尙ほ且つ他に爲すべきことなき時にのみ睡眠を考へる。そして征衣の儘地上に横はり哨兵の間に休息する。彼は唯普通の士官の如き服装を纏ひ、唯其の武器と乗馬とのみ俊逸なるものであつた』(註)。

(註) リヴァキー第廿一卷第四節 Livy, xxi, 4.

第三款 第二ポエニ戦争(前二二)

第四三節 伊太利侵入^(前)

ハンニバルは既に準備の成れるを見て、ローマと同盟せる西班牙の都市サグンツム Saguntum を攻め、八個月の包圍の後これを占領した。この行動はローマ人に開戦の口實を與へた。然るに彼等が西班牙及びリビアに侵入を計畫中、ハンニバルは既に訓練の充分なる歩兵五萬騎兵九千と、若干の戰象とを率ゐてピレニース山を越えガリアに急行した。最近ローマ人は北部伊太利のガリア人を征服した^(註)。この國民は其の被りし損害に就き甚しくローマ人の行爲を憤慨して居た。従つて彼等はハンニバルを熱心に援助し、ローン河を通過するまで彼は土人の反抗を受けなかつた。アルプス進軍と共に軍隊は愈々困難を経験した。通路は狭くして凸凹多く、山民の攻撃に悩まされた。彼等は安全なる高地にありて或は石を轉じ石矢を飛ばして、軍隊と蜿蜒たる輜重の縦列を苦しめた。多くの兵士は仆れ、軍馬も亦或は傷き或は倒れ、食糧の缺乏に脅かされた。あらゆる困苦と危険とを経てハンニバルは終に項上に達し、ここに部下を休養させ、次の如き言葉を以て彼等を激勵した、『吾等はこのアルプスの頂上にある。吾等は伊太利の牙城を既に占領してゐる。南の方脚下には吾等に味方するガリア人が居る。彼等は其の沃野より生ずる食糧を吾等に供給し、且つ彼等の敵と戦ふ吾等を助くるであらう。遙か彼方にはローマがある！』

然し彼が平原に達した時には、西班牙を發するに臨みて率ゐし軍隊の過半を失つて居た。殘兵は疲勞と飢餓と寒氣とに身體縮の如く、軍馬は跛行し、彼等の衣服は破れ果て、訓練ある軍隊と言はんよりも野蠻人の群衆と思はれた。斯る軍隊を以て彼は七十萬の軍兵を擁するローマを攻撃せんとするのである。然し戦は一方に偏するものではない。偉大なる指揮官の精神を體した訓練ある兵士を以て未熟練なる民兵に向ふのである。生來の軍事的天才ハンニバルは有名なる父に就き既に軍事學入門の期間を終へた。將軍として彼は西班牙及びガリアの剽悍なる蠻族を征服し、又たアルプスすらこれを克服した。彼は尙ほ弱冠なるも、彼と比較すれば最も俊秀なるローマの將軍と雖も初學者に過ぎぬ。

(註) 第四三節

第四七節 チキヌス及びトレビアの戦^(前)

幾多の征服を夢みつゝ、ありしローマ人の耳には、ハンニバルが既にポー河の平野にありと聞き愕然とした。彼等は間もなくこの戦はローマ國運の懸るところと感ずるに至つた。ポー河の支流チキヌス Ticinus に於ける輕騎兵の衝突に於て、彼は容易に執政官スキピオ Scipio を破つた。カルタゴの騎兵の優勢なるを見て、スキピオはポー河の南岸に撤退し、トレビア Trebia 河附近の丘陵を援護物とした。彼の同僚セムプロニウス Sempronius は一軍を率ゐる來り合し司令官の地位に就いた。スキピオは既に負傷してゐた。

十二月のある暴風の朝ハンニバルは部下に充分の朝食を取らしめ且つ身體に油を塗らしめし後、

一隊の騎兵を派して敵の渡河を誘うた。戦勝の名譽に渴望せるセムプロニウスは朝食前なるに拘らず、直ちにこれに應じて水嵩まさるトレビア河を横斷して其の軍を進めた。飢餓と寒氣に凍えしローマ軍は既に敗北すべき運命にあつた。カルタゴの騎兵は彼等の兩翼を衝き、他方ハンニバルの弟猛將マーゴ Mago は伏兵より起つて背後より攻撃した。戦は久しきに及びしも完全にローマ軍の敗北に終り、唯最善の歩兵一萬は敵軍を突破して遁れ去り、殘兵は或は殺され或は捕虜となり、ハンニバルは彼等の陣營を占領した。この大勝利により從來逡巡せるガリア人はカルダゴと其の運命を共にするに至つた。

敗報はローマを威壓した。市民は冬期間唯この凶事のみを語つた。同時に政府はこれに對抗する準備を進め、執政官の一人にして人望あり、元老院と快からざるガイウス・フラミニウス(註は、一軍を率ゐてエトルリアのアレチウム Arretium に駐屯し、貴族の執政官セルヰリウス Servilius は他の一軍を總べてアリミナムに居た。斯く執政官は各一軍を率ゐてポー河の平野と中部伊太利とを連絡する主要なる街道を守護しつゝあつた。

(註) 第四二一節以下

第四八節 トラスィメネ湖の戦・ハンニバルとファビウス(前二) 然るにハンニバルは別路を取り、ア

ペナイン山を越えて遙か西方に出で彼等を驚かした。アルヌス Arno 河の北方に横はる沼澤の通

過に當り、彼の軍隊は苦しい困難に遭遇した。四日三夜彼等は泥土と水中とを行軍した。遂にハンニバルはエトルリアに達し、フラミニウスの依然アレチウムを準備せるを見、敵を顧慮せずして直ちにローマに至る公道を取り、行く行く掠奪を行つた。フラミニウスは唯これに追隨するのみ、彼は必ず勝利を得て元老院と衝突せる與黨の面目を立てねばならぬと只管感じてゐた。然るに不注意にも彼はトラスィメネ Trasimene 湖畔にて伏兵に陥り、終に殺され其の軍隊は全滅した。この凶報がローマに傳へられた時、大判官は人民に對し『吾人は一大戦争に敗れたり』と告げた。長く不幸に會はざりしローマ人は悲歎と驚愕の淵に沈んだ。而も元老院の忠告に従ひ彼等はクキンタス・ファビウス・マキシマス Quintus Fabius Maximus を大都統に任命した。慣習によりその任に當るべき他の執政官は餘りに遠隔の地に居たからである。

ハンニバルはローマを攻撃せず、半島を横斷してアドリア海の沿岸に出で、漸次南下し其の過ぎし土地より夥しき掠奪品を得た。ファビウスは戦を敢て挑まず、敵を尾行しつゝ、その掠奪を妨げ、他日其の部下をして敵と容易に戦ふ訓練を施した。その戦術の故を以てファビウスはカンクタール(Cunctator「遷延者」と稱せらるるに至つた。而も彼の避戦策はカルタゴ人の進軍と奪掠とを充分に阻止するに至らず。由つて彼は甚しき不評と非難とを受けしも、彼が執拗に戦争を避けし結果、ローマは一年間再び惨敗より救はれたのである。

第四九節 カンネーの戦(前二)

ローマは翌年の夏に至るまで軍隊の徵募と、これが訓練とに最善の努力を拂つた。新執政官エミリウス Aemilius 及びヴァロ Varro は、同盟國の軍を合して八萬餘の兵を率ゐてハンニバルに向つた。これはローマが戦場に出した最大の軍隊にて、これに對して敵は約五萬を數ふるに過ぎなかつた。兩軍はアプリアにあるアウフキダス Aufidus 河畔のカンネー Cannae に遭遇し、當日の指揮官ヴァロは中軍に勢力を集中し(註)、戦列を深くして唯重力を以て敵を壓する計畫に出でた。敵の優勢なる騎兵に其の兩翼を襲はれながら、其の中軍は堅固なる密集隊を以て前面のイベリア人とケルト人を一旦は驅逐したが、遂に各方面より壓迫を受けた——ガリア人とイベリア人とは正面より砂塵を立て、殺到し、兩翼は百戰老練のリビア兵に包圍され、背面には騎兵の強襲があつた。餘りに軍隊を密集せしめたため、戦列を維持しまたは武器を充分に使用する能はず、ローマ人は屠夫の刀下にある羊群の如くに仆れた。全軍の八分の七はアメリウス及び七十の元老院議員其の他多くの名士と共に戦場に横はり、ヴァロの許に残りし兵士は僅に一萬に過ぎなかつた。此の敗報はローマに非常の打撃を與へた。あらゆる家庭は其の死者を悼み、同時にすべての市民は都市と一身との危険を憂慮した。然し元老院は男性的精神を以て敢然この危機に當面し、人民を激勵して市の周圍に哨兵を配置し、國家を救護するあらゆる方法を講じた。

戰終りし夜カルタゴの騎兵隊長マハルバル Mago は司令官に向ひ、「騎兵を以て先づ前進することを許せ、貴下は軍隊を率ゐて後續せよ、さらば五日にして吾等はローマに於て食卓を共にせん」と言つた。然しハンニバルは現在の軍隊を以てしては、ローマを強襲若くは包圍するも占領し得ざるを知り、同盟國の叛亂によりて自然にローマを滅亡に導くことを望んだ。

(註) 第四〇八節

第四〇節 戦況一變

カンネーの戦と共に戦況は一變した。南伊太利にあるローマの同盟國は、カプア、タレントゥム等の大都市と共に殆んどすべて叛亂を起した。シラクエーザ王ヒエロン(註)の死後シシリイも亦ローマを離れた。希臘半島に對する元老院の干涉を嫉視せしマセドン王フィリップ五世(註)は、戦勝のカルタゴと同盟した。此等の同盟國は何れも實質的の援助を與へざりしも、ハンニバル自身は伊太利の友邦を保護する義務を感じ、斯くして已むを得ず守勢に出でし爲め、彼の軍隊は漸く疲勞を加へ、赫々たる名聲を傷け終に失敗を齎した。彼の進路に横はりし最大の困難は、伊太利に散在せるラテン植民地の要害であつた。彼等は依然ローマに忠誠を守りて動かず、ハンニバルは此等の要塞を奪取する能はず。他面ローマ人はファビウスの政策を踏襲し、伊太利に於てはハンニバルとの會戦を避けた。

然し彼等はシシリイの恢復に多大の努力を拂つた。長き包圍の後マルセラス Marcellus はシラクエーザを占領して、奪掠を行ひ多くの人民を殺戮した。そのうちには有名なる數學者アルキメデス

Archimedes もあつた。彼の發明せし機械はこの市の防禦に使用された。次にローマ人は三軍を以てカプアを包圍し、ハンニバルはローマ軍を牽制して包圍中の同盟國を救はんとし、急に軍をローマに進めローマを距る三哩の地點に陣を設けた。住民は怖るべき敵が既にカプアのローマ軍を討滅し、間もなくローマの牙城に殺到するものと想像した。幸にして新募兵は陸續として附近より入市するあり城壁の守備は完全になつた。さればローマはカプアの包圍と關係なく自市の防備を修め、ハンニバルもカプアの救援を斷念した。カプアの陥落するやローマ人はその不信を責め、元老院議員を誅し人民はラテン植民地間に分散せしめ或は奴隸に估つた——これ等はすべて叛亂を企圖するものに對する警告であつた。タレンツムも後日占領され同様の刑罰を受けた。

(註一) 第五節 (註二) 第三節、第四節以下

第三節 西班牙に於けるスキピオ・メタウルス河の戰(前)

他方には又も重大事件が西班牙に起つた。ハンニバルの弟ハスドルバルは數年間この國の指揮權を委任されて居たが、パブリウス及びグネエウス・スキピオ Gnaeus 兄弟の率ゆるローマ軍に比して劣勢なることが分つた。而も彼は終にカルタゴよりの援軍を得て、此等兩將軍の軍を個々に壓倒して擊破し、彼等は勇敢にも其の部下と運命を共にして仆れた。この戰勝により全西班牙は將にカルタゴに奮回せられんとした時、ローマ人はこゝにプロコンサル(前執政官) (註)として戰役せる將軍の子にして同名のパブリウス・スキピオ

オを派遣した。新指揮官は猶廿代の青年なりしが、才幹拔群眞に軍事の天才たることを示した。彼は着任後間もなく敵の重要なる武庫のありし新カルタゴ市を襲ひこれを陥れた。而もハスドルバルは巧に彼を避け、其の大軍隊と夥しき財寶とを携へて伊太利に向ひ、陸路兄の救援に赴いた。

戰爭の危機は紀元前二〇七年に至りて絶頂に達した、この時ハスドルバルはアルプスを下り、ガリア人及びリグリア人を其の戦列に加へ、南下してハンニバルに合せんとした。敵の兩軍にして合せんか、ローマの勝利は殆んど望み得られなかつた、其の國土は至るところ荒蕪に歸し、其の忠實なる植民地は戰爭に疲弊して援助の餘力なく、最後の軍隊は既に戰場に繰り出されて居る。ローマに取りて幸運なりしことは、ハスドルバル到來の報を齎せし使者がハンニバルと南伊太利に對抗中の軍司令官・執政官ガイウス・クラウヂウス・ネロの手に落ちた。密かに北上急行せしクラウヂウスは麾下の軍を同僚マーカス・リヴキウス・サリネートル Livius Salinator の軍と合し、ハスドルバルの軍を不意にメタウルス河 Metaurus に襲ひこれを潰滅せしめた。クラウヂウスは南歸するに當つて敗北せるハスドルバルの首級を携へ、これをハンニバルの陣營に送り彼に其の不幸を傳へた。弟の蒼白なる容貌を見てハンニバルは、自己の運命とカルタゴの將來とを觀取した。

戦後ハンニバルは依然南伊太利に滞留して居たが、パブリウス・スキピオは終に西班牙を征服恢復した。その戦役は彼のローマンチックな冒険と武士的行動とを物語つてゐる——彼は親切にして寛

容なる性質と快活なる精神とを具へ、吾人の嘆賞禁ずる能はざるローマの第一人者である。

(註) ローマ以外にあつて執政官の地位と権力とを有する官吏(第四九節)。最初のプロコンサルは紀元前三二六年に任命された。

第四節 ザマの戦(前二〇二)・戦争の終結(前二〇一)

西班牙の統治者スキピオはローマに歸り、更に執政官として阿弗利加に侵入してカルタゴを脅した。ハンニバルは政府の召喚に應じて伊太利を去り、少數老巧の軍隊に新募兵を加へ、スキピオとカルタゴの南方にある一市ザマ Zama を距る遠からざるところに對陣した。こゝに久しきに亙りしポエニ戦争の最後の幕が撤せられた。幸運に恵まれしスキピオは第二軍及び第三軍の部隊を第一軍の背後に配置し、兩者の間には通路を作り、敵の戦象はこの間を通過して戦列を紊すに至らなかつた(註二)。ハンニバルは始めて決戦に敗れた——而もその戦敗は再起の力を餘さなかつた。

續いて成立された條約によりカルタゴは西班牙を放棄し、ローマに五十年間毎年銀二百タレント(註三)を支拂ひ、すべての戦象と十隻を除く戦艦とを譲り、リビア以外に於ては戦争を行はず、尙ほローマの許可なくしてはリビアに於ても戦争を行はざるを約した。嘗て海上の女王たりしカルタゴは、其の大艦隊が焔のうちに沈没するを悲痛の眼を以て眺めた。更にその苦惱はリビアに於て戦争を禁ずる條約の一項であつた。これによつてローマの同盟國ヌミディアの國王マシニツサ Masinissa

を如何ともする能はず、彼は其の欲するが儘にカルタゴの領地を荒した。斯くの如きはローマの戦敗者に對する政策であつた。

(註一) 第四〇節、普通の部隊配列に就ては第四八節を見よ。(註二) 第三三節註三

第五節 第一マケドニア戦争(前二二五—前二〇五)

ハンニバル戦争前、ローマは若干の希臘都市を同盟國とした(註)。當時希臘の強國はマセドンのフェリツプ五世であつた。彼は希臘國家のあるものを實際に征服した。他の諸國は恐怖の餘り、或は獨立を維持することの困難を察して彼と同盟した。フェリツプはローマが彼の勢力範圍に干渉するを憤り、ハンニバルの大成功の報を聞き直ちに彼と同盟し、伊太利に軍隊を派遣するために艦隊を準備した。然るに本國附近の小戦争に敗れ、彼は其の野心を抛棄し、國力を擧げてローマの援助を得たる希臘人に對し守勢に出づるの已むなきに至つた。第一マケドニア戦争として知られし十年に亙る防禦戦の後、フェリツプは終に和を講じた(前二〇五)。ローマは次いでエトリア、アテネ其の他の重要な希臘國家と同盟條約を締結した。

(註) 第四三節

第三章 ローマ権力の膨脹(前二〇〇)

第四節 第二マケドニア戦争(前二〇〇—前一九六)

カルタゴの屈服後ローマは引續き意の儘に、其の國力を擧

げて残餘の地中海諸國を討滅するに至つた。ローマは最初から斯る目的を抱きし譯ではない。征服毎に更に他の戦争の機會を發見したのである。其の最初の衝突はマセドンであつた。フキリツプ(註)はローマとの平和を利用して希臘に於ける權力の恢復に没頭し、その計畫を遂行するに當つてローマの同盟國を攻撃した。依て此等の諸國は使者を派して元老院に急を訴へ其の援助を求めた。元老院は既にフキリツプがハンニバルに味方せしことを憤りしが、今や彼を膺懲する機會の到來せしことを喜んだ。彼等は又た若しこの野心ある國王にして希臘を蹂躪するを得ば、進んで伊太利攻撃に着手するものと信じた。さればローマ人は概して平和を切望してゐたが、元老院は百人隊會議をして希臘同盟國のためマセドンに宣戰せしめた。

ローマの指揮官フラミニウス Flaminius は二萬五千の軍隊を率ゐ、フキリツプも殆んど同數の軍隊を擁してゐたが、多數は少年であつた。文明世界は軍團レギオンと密集隊ファランクスとの優劣に興味を懸けて居た。密集隊は平野に於てはこれを征服し難きも、山間にあつては容易にこれを撃破することが出来る。これに反して軍團は輕快にして敏活である。特に中部伊太利の山民と戦ふを目的として發達せしものである。テッサリーの丘陵キノスケファアレ Cynoscephalae(犬の頭)に於て兩軍は衝突し、激戦の後に遂に軍團は勝利を得た(前二)。ローマの成功は、其の軍隊組織と、敵軍の素質が劣りしと、就中ローマ軍にありし優秀なるエトリア騎兵の有力なる活動とによる。

國王フキリツプは其の領土をローマに割讓せねばならなかつた。然しローマの平民は東方に帝國の擴張を欲せず、元老院は自然寛大なる態度を取ることとなつた。斯くて翌春コリント地峽に開かれし祝祭に、平和の使節フラミニウス及び同僚は傳令使に命を傳へ、從來フキリツプの支配せし土地の希臘人はすべて自由民たることを會衆に傳へた。『競技の終りし後彼等は歡喜の餘り、殆んどフラミニウスを殺さんばかりであつた。或ものは親しく彼に見えて彼等の保護者なりと叫ばんとし、或ものは彼の手に觸れんことを熱望した。多數のもの、投ぐる花環や飾紐のため彼は窒息せんとした。』(註)。フラミニウスは希臘人の幸福を欲したのである。然し彼の與へし自由は確かに幻影であつた。彼等は自由の保障たる平和すらこれを維持することが出来なかつた。彼等の保護者にして平和の保障者たるローマは、斷えずその爭論を審判する勞を求められた。この干涉は間もなく彼等の自由を破却する運命を導いた。

(註) ポリビウス第十八卷第四六節 Polybius, xviii, 46

第四五節 アジア戦争(前二)

ローマは間もなくセレウカス家の帝國(註)と紛争の渦中に捲き込まれた。此の國はアレキサンダーの亞細亞の領土を殆んどすべて繼承せしが、今や大に衰微の兆を示した。波斯本國以東の太守領は現在バルチア帝國に屬し、僅かに小亞細亞に二三の領土を残すに過ぎぬ。壓制君主アンチオカス三世は、第二マケドニア戦争の虚に乗じて小亞細亞全土を蹂躪し

ラキアに侵入した。ローマが希臘人をフキリップより解放せし後、アンチオカスは小軍隊を率ゐて希臘に入り、自ら代つて希臘をローマより保護せんとした。而も彼は歐羅巴より驅逐され、小亞細亞のマグネシア Magnesia に於て、アフリカヌスの弟ルシウス・スキピオ Lucius Scipio のために壓倒的敗北を蒙り、その結果タウラス山以西の領土を抛棄し、ローマは小亞細亞の諸國をその保護の下に置き獨立國とした。アンチオカスは人民のために石殺され、彼の大帝國は急轉直下シリア小王國と化した(註一)。

(註一)

第三四節

(註二)

第四六節

第三三節 希臘の狀態・第三マケドニア戦争(前二七二—一六八)

然るに希臘諸國は常にローマの元老院に對し他國を批議排斥し、その紛争の審判を求めた。されば元老院の委員は相次いで希臘に來り、其の紛争を處理し又た共和政治の利害を監視した。若し希臘人がマケドニア人を盟主として鞏固なる政府を組織したにしても、彼等は永くローマの宏大優勢なる國力に對抗し得る望みはなかつた。個人の自由と都市の完全なる獨立とに對する彼等の熱愛は、恒に堅固なるものがあつた。これがために彼等は共通利害を擁護する必要より結束を圖ることをせず、又た屢々國家間に嫉妬と争鬪とを惹起した。彼等の天才はペリクレス時代程に活氣あるものでなかつたにしても、決して道德的にも知的にも墮落してゐた譯ではない。事實彼等は引續き文明世界を通じて人生のすべての高貴なる活動にそ

の頭腦と修練とを寄與してゐた。獨立の精神、それは彼等の最も高貴なる特性であつたが、政治的破滅の責任も亦主としてそこにあつた。ローマ人は最初彼等の保護者として、第二マケドニア戦争後は彼等の支配者たる態度に出でた。然し彼等の希臘文化に對する尊敬はその分裂を妨げこそすれ、これを助くるのではなかつた——彼等はすべての國家に於て、ローマに従順なる政派の發達に援助の勞を吝むものではなかつた。煽動的なるヘレネスの愛國者を除くため、此等の『希臘の愛慕者(ローマ人)』は時に暗殺手段をも辭せざるものであつた。

斯くの如きはフィリップの死後、其の子ペルセウス Perseus が王位繼承せし時代の形勢であつた。彼は野蠻のローマに對しヘラスの代表たらんとする野心を抱いてゐた。彼の巧妙なる外交と希臘獨立の熱望とは、希臘人を驅つてマセドンと握手するに至らしめた。この時ローマは此の怖るべき同盟を打破せんとしてペルセウスに宣戰した(前二七二)。

ローマ軍の指揮官ルシウス・エミリウス・パウルス(註一)は稀に見る正直才能の人物であつた。彼はマセドンの一市ピドナ Pydna に於てペルセウスと會戰しこれを撃破した。『エミリウスは當時ペルセウスの軍に見ゆるまで、密集隊を見たことがなかつた。彼は其の後屢々ローマの友人に、斯くの如き恐怖すべきものを見しことなしと驚嘆してゐる、而も彼は餘人と等しく獨り觀戰者たるのみならず、多くの戰場に馳驅せし勇士であつた(註二)』王は遁走し、後捕へられて其の子女と共に戰勝者

の凱旋式に附隨し獄裡に歿した。自殺したのか或は獄吏に虐待せられし結果である。ローマ人はマセドンを四個の共和國に分割し相互の交通を禁じた。斯くして大國家は滅亡し、各都市はローマに家具貴金屬及び美術品を讓渡した。

(註一) カンネーに戦歿せしエミリウスの子なり(第三九節)

(註二) ポリビウス第二十九卷第一七節 Polybius, xxix, 17.

第三七節 屬領マセドン^(前)

希臘は既に自由に見捨られてゐる。戦争中ペルセウスに同情を寄せし人々は、ローマに送られ審問に附せられた。その數アケーア同盟のみにも約千人程あり、そのうちには政治家にして歴史家たるポリビウス Polybius も居た。然し彼等は裁判に附せられず、エトルリア諸市に十六年間抑留させられ、その後ポリビウスの勢力により當時尙ほ生存せし三百名は釋放された。

此等の亡命者は歸國後、彼等に斯くの如き不當なる待遇を與へしローマに對し全國民の奮起を促した。當時スパルタはアケーア同盟を脱退し、アケーア人はその復歸を冀望した。ローマ人はスパルタに味方せしのみならず又た他の諸國に同盟脱退を命じた。アケーア人はローマに對し戦備を修め、一方マセドンはローマに對して叛亂を起したが、メテラス Metellus の指揮する軍隊は容易にこれを鎮定し、次いで四共和國を併合して屬領マセドニアとした。此れ實に當時は世界に最大最強を

誇りし國家の最後である。

第三八節 希臘自由の最後^(前)

メテラスの尙ほマセドン滞在中、アケーア戦争がコリントに勃發した。偶然其の地にありしスパルタ人は殺され、ローマの使者は僅かに身を以て遁れた。二回の戦争にアケーア人は再起し難き敗北を蒙り、指揮權を繼承せし執政官マムミウス Mummius は次いでコリントに入り、多數の男子を殺し殘餘の住民を奴隸とし、更に掠奪後悉く灰燼に附した。家具・彫刻・繪畫等大家の作品は船に満載されてローマに送られた。コリントの破却は表面ローマに對する謀叛の膺懲にあつた。然しローマの商業的競争者を亡ぼす動機の方が更に強くあつた様に思はれる。蓋しローマは今や資本家の支配するところとなり、彼等はカルタゴの資本家^(註一)の如く、其の競争者を排斥し商業と投機とを獨占せんとした。

曩きに述べし如く^(註二)、最近の戦争にローマに忠誠なりし希臘人、例へばスパルタ人、アテネ人及びエトリア人は引續き獨立を維持せし、彼等の同盟はすべて廢止され、地方的政治に參與する權利はすべて富者に限られた^(註三)。戦争に参加せし國家も同様に同盟と民主政治とを捨てねばならなかつた。彼等は又た其の獨立を奪はれ、マケドニア知事の支配を受くるに至つた^(註四)。

(註一) 第四二節 (註二) 第二章第三四節

(註三) 斯くの如き貴人政治 Timocracy と稱す。第三三節。ローマは弱小同盟國及び臣從國家に對して帝國

を通じて同一の政策を取つた。

(註四) 紀元前二七年頃までは、マケドニアの南にある希臘全土は未だアケイアと稱する屬領とはならなかつた。

第三五節 ペルガモン王國とアジアの屬領(前二八九) ローマがアンチオカスとの間に締結せし條約

(前二八九)により得たる小亞細亞の保護權は、マケドニア及びアケイア戰爭中にも繼續した。此の地は、若干の土人王國と希臘都市國家とより成り、そのうち最も重要なものはペルガモン王國にして、エーゲア海を距る遠からざる同名の都市に其の中心を置いた。この國はヘレネスの文明を輸入し、一般に藝術と文化の所在地として、アレキサンドリア(註三)に名聲匹敵するものであり、國王は恒にローマの盟友であつた。然し其の王家は甚しく墮落し、最後の國王アタラス Attalus 三世は斷えず病身にして、死に臨み(註三)其の王國と財寶とを擧げてローマに讓渡した。ローマ人はこれを繼承せんとしたが、王位の僭稱者は彼等の要求を抗拒した。紀元前一二九年右の僭稱者は終に殺され、王國は附近の土地と共にアジアのローマ屬領となつた。

(註一) 第三五節 (註二) 第三六節

第四〇節 第二ポエニ戰爭(前二四九) 紀元前一四六年ローマは終にカルタゴを亡ぼした。此の事件

の發端は、これを第二ポエニ戰爭に廻らねばならぬ。ハンニバルの締結せし條約によればカルタゴはローマの許可なくしては敵の攻撃を防ぐとすべし出来なかつた。此の條件を利用してローマの同盟國ヌミヂア王マシニッサ(註二)は、絶えずカルタゴの領土を侵略し其の豊饒なる土地の一部を奪取した。カルタゴの愁訴に對しローマは數回委員を派遣したが、委員は常に侵略を煽動すべき秘密訓令を受けて居た。其の委員のうちにはやがて後に説く狹量の政治家ケートーがあつた。彼はカルタゴの富と繁榮とに關し驚くべき報告を本國に送つた。彼の意見によればハンニバルの都市は依然ローマを脅して居る。實に彼は元老院に於ける演説に當り、其の問題の何たるを問はず、『カルタゴ滅亡せしめざるべからず』と結んだと言はれて居る。世界商業の獨占を欲し、且つ元老院議員の多數を擁する資本家を説得するは容易であつた。執政官は大軍を率ゐるウチカ Cato に向つて出帆した。戰爭を回避するがためにカルタゴ人はあらゆる讓歩を試みた。最初彼等は三百の少年を人質として渡した。彼等の母たちは『狂氣の如く叫びて少年に抱きつき、彼等を連れ去る船や官吏を捕へて離さなかつた。』(註三)若し卿等にして眞に平和を願はば、何故に武器を必要とするか。これ引渡すべし』と執政官はウチカに着するや宣言した。人民の抗議は聞入れられず、彼等は終に其の武器を抛棄した。執政官は更に續けて言ふ、『我等は卿等の敏速なる處置を慶賀す、次にカルタゴを我等に委ね、海岸を距る十哩の地點に移住せよ、我等は卿等の都市を破壊せんと決心せり。』

人民は最初悲歎に暮れた。然し彼等は血の最後の一滴まで其の都市を防守する決心をした。彼等

は新に武器を製造せねばならなかつた。彼等は寺院を工場に代へ、婦女は其の毛髪を弓絃とし、花しく執政官の攻撃を退くること三年間、英雄の如く死守した。遂にスキピオ・エミリアヌス(豊)は城壁を破りて入り、兵士は住民を屠殺し、次いで奪掠を行ひ最後に火を放つた。彼等は無辜の住民を屠りし後、ローマの當局者はこの地を呪ひ都市の再建を許さなかつた。カルタゴの支配せし土地はアフリカ屬領となつた。

(註一) 第四三節

(註二) アピウス『外戦史』第八卷第七七節 Appian, Foreign Wars, viii, 77.

(註三) エミリウス・パウルスの子(第四三節)、ハンニバルの征服者スキピオ家に養はる。エミリアヌスなる名はそのゲンスを示す。

第四二節 リゲリア及びガリア戦争 上述せし希臘とカルタゴとの征服は、ローマがハンニバル戦後半世紀間に行ひし戦争の特質を物語つてゐる。此の時代の大部分を通じて戦争は北部伊太利に行はれた。ハンニバルの擧兵に倣ひて蹴起せしガリア人は、彼の没落後その希望の失はれたに拘はらず長らく戦争を續けた。彼等は決死の勇氣を揮ひ奴隷の境涯よりも死を選んだ。彼等の同盟者なる剛毅のリゲリア人はガリア西部國境の山間に住してゐた。此等種族の戦争に、年々執政官は多數の兵士を兵ひしが、この世紀の中葉に至りて彼等の証言は完成し、彼等の勇敢なる精神は形跡された。

數千のリゲリア人はサムニウムに遷され、他の種族を牽制するため、軍用道路アウレリウス街はローマよりエトルリアの西海岸に沿ひアペニン山まで建設された。

第四一節 西班牙戦争(前二七)

ハンニバル戦争の結果、ローマはカルタゴの西班牙領をすべて奪

ひ、紀元前一九七年東西班牙・西班牙の二屬領を設け、二名の大判官 Praetor を派遣して統治せしめた。然るに土人はこれに反抗し、前古未曾有の凄慘なる戦争が始まつた。山間の住民は征服し難く、彼等がローマ軍團を全滅するは珍しきことではなかつた。而も其の要害を奪取せし時には唯焦土を残すに過ぎなかつた。女子も男子と共に戦ひ、捕虜たるを嫌ひ、男子と同じく子女を刺して自殺した。彼等は常に毒藥を懐中し、敵に捕へられし時に用ひた。紀元前一七八年土人に有利なる講和條約成立せしも、十五年後には新しき叛亂起りローマ人は別に征服事業に着手した。武力に失敗せし彼等は詐術を弄し、條約を無視して降伏せる軍隊を屠殺した。叛亂の中心はヌマンチア Numantia と稱する小都市にて、少數の勇敢なる西班牙人は數年間ローマの權力に對抗してこの地を守した。包圍軍の陣營には占卜師・山師・その他の不良人物蝟集して兵士を墮落せしめ、將軍等も亦賤劣無能を極め、軍事行動を指揮する元老院も對敵方針を全く缺いでゐた。ローマ軍は幾度か撃退され、多くの將軍は汚名を受けて職を去り、終にスキピオ・エミリアヌス代つて指揮を取るに至つた。彼はすべて陋劣なる人物を却け兵士に嚴重なる訓練を施し、終にこの地を占領したが、當時僅

かに五十名の生存者ありしのみにて、彼の凱旋式に附隨した。全西班牙は北西の山嶽地方の小部分を除き、全くローマの権力に屈服した。

西班牙のローマ植民地は極めて少數であつた。然しこの戦争中伊太利より數千の兵士を迎へた。彼等は戦後除隊若くは脱走してこの地に移住し、西班牙人を妻とし土人の間に交つた。此等の移住民によりてラテン語と其の文明とは西班牙に傳はり、ヌマンチア陥落後二世紀を経ざるにイベリア半島は全くローマ化した。

第四節 領土約説・屬領及び從屬同盟(前二四二より約二三三に至る)

上述せし時期の終り、ローマ人はタウラス山より大西洋に至る地域の大部分を統治して居た。彼等は七個乃至九個の屬領を有し、首府より知事を派遣して支配してゐた。此等の屬領を年代順に擧ぐれば(一)シシリー。四四一年占領、(二)サルヂニア及コルシカ。シシリー占領後間もなく領有し、シシリーと同年に屬領とす、(三)東西西班牙及び西西班牙。第二ポエニ戦争の際占領、一九七年屬領組織成る。(四)ガリア・チザルピナ。第二世紀の初期に再征し、其の後不明の時期に屬領とす(註二)。(五)イリリウム。第三マケドニア戦争の時に占領、(前二)其の屬領組織の時期不明、(六)マケドニア。一四六年屬領となる。(七)アフリカ。同年に占領屬領となる。(八)アジア。一三三年に占領、四年後屬領となる。

を網羅し、阿弗利加にはヌミヂアと埃及とリビアとが共にこの地位にあり、亞細亞のシリア王國は更に多くの自由を有せしも、既に被護國の地位に沈湎しつゝあつた。

ローマが伊太利以外に膨脹政策を取りてより僅かに一世紀半に過ぎぬ。更に同一の期間内にローマ帝國は擴張して地中海に面する一切の國家を網羅するに至つた。然し此等の征服によりローマの政情と其の市民の生活に重大なる變化を生ずるに至つた。

(註一) 紀元前八一年より以後にあらず。

(註二) この名稱の起源は、ローマに對する關係が尙ほ被護民と主人とのそれに似たるを以て也、第三七節。

第三章 金權政治の發達 (前二四二—一三三)

第一款 政治及び社會狀態

第四節 ローマ統治の特色 ローマの如き都市國家は、小國家として全市民が民會に出席し、公務に參與し得る間は政治の運用が圓滑に行はれた。然るに國家の膨脹につれローマ附近の市民のみ政權を掌握し、自己の利益のために遠隔なる地方人民を犠牲とするに至り、従つて領土的膨脹は政治上の不正と壓制とを増加した。

ローマの伊太利に於ける初期の霸權は、全體として公正なものであつた(註三)。屬領もローマの統

治により同様にある種の利益を得た(註三)。即ち屬領は概して平和を樂しみ、都市は自己の法律慣習を保持し、地方の政務に就いては自治を原則とした。文明の普及せざる地方の人民も亦、ローマの習慣と思想とを採り少からず益するところがあつた。

此等の利益の存せしに拘はらず、彼等の状態は幸福ではなかつた。貿易上の規定を設くるに當つても、ローマは地方の臣従民を犠牲としてローマ市民の利益を謀つた。されば土着の商人に代りて多數の貪慾なる金貸業者、投機業者及び商人がローマより屬領に闖入し、ローマ市民權(註四)の保護の下に屬領の財貨を夥しく搾取し、住民を負債と不幸のうちに沈めた。此等の投機業者は農民を土地より驅逐し、代ふるに奴隸を以て耕作する尠大なる田圃に兼併した。ローマの租稅徵收請負制度(註五)も亦これが弊害を伴つた。財力により租稅徵收請負者となりし武士(註六)は、屬領民の責務に數倍する額を請求搾取した。後にケートーの如き清廉潔白、斯る弊害を矯正せんとせしもの(註七)ありしも、一般に屬領の知事は殘酷壓制であつた。彼等の貪慾は其の屬領民の富を搾取するを以て満足せず、更にその藝術品を奪ひ、その禮拜する神々の像を掠め、又た多數の自由民を奴隸に賣つた。官吏の頻々たる交迭は更にこの弊害を繁くした。彼等は短き任期間に三種の目的を以て蓄財した。第一に其の地位に就くため贈賄に要せし負債の償却に、第二にローマに歸國後告訴されし場合司法官を買収する費用に、第三に餘生を安樂豪華に送る資財としてである。屬領の苛斂請求を審理する特

別裁判所(註八)は何等の効果を擧げなかつた。裁判官も被告も同一の精神を抱けるものであつた。盜賊と奪掠者とは同じ盜賊と奪掠者とを審判する席にある。斯くして屬領民は其の不正より保護せらるゝ方法を缺いてゐた。彼等に取つて『ローマの平和』は、奴隸制度と滅亡と死とを意味してゐた。

(註一) *Plutocracy* 富者のための富者の政治、第四六節。

(註二) 第四六節以下。此の二節を注意して参照するを要す。

(註三) 第四九節を注意して参照せよ。

(註四) 屬領に於けるローマ市民は屬領民の有せざる多くの特權を有し、一般に彼等の非行を罰することゝ出來なかつた。

(註五) 第四九節。 (註六) 第三〇、四六節。

(註七) 第四九節。 (註八) 第四九節。

第四五節 伊太利の衰微・商業及び農業状態 伊太利も屬領同様に衰微するに至つた。ローマが伊

太利人を正しく待遇せし間こそ、彼等は其の統治に満足した。最初彼等はローマに味方してハンニバルに對抗せしも、カンネーの戦後半島南部のものは多く去つてハンニバルに屬した(註九)。ローマの再び彼等を征服するや、これを過失を冒せし同族と見ず、從屬民及び奴隸の待遇を與へた。ローマは彼等の土地の大部分を奪ひ、多數のものを同盟者より農奴の地位に貶下した。

ローマの資本家は伊太利貿易の獨占により、都市の繁榮を破壊した。カプア、タレントム等の盛大なりし商業都市は其の姿を没し、曾て繁榮せし希臘都市のうち尙ほ殘存せるもの、街頭には、商人の代りに乞食の横行するを見た。

農民階級も商人同様の苦痛を経験した。ローマは食物の供給を屬領に仰ぎ——奴隸勞働による低廉なる産物——伊太利の農民は穀物市場を發見する能はず、貧困其の他のために土地を失ひし農民は陸續とローマに集まり、不逞なる無賴漢の數を増加した。奴隸勞働による大農制度は全伊太利にも行はれ、大地主は強制的に貧民の土地を兼併した。自作農は衰微せしも、奴隸勞働は屬領と等しく伊太利に於ても莫大の利益を收めた。『斯くて貴族は暴富を累ね、奴隸の増加と共に伊太利人は貧困と租税と軍務とに壓せられ、人口は減退し且つ無力となつた(註二)』。これ前章に述べし外國征服時期(前二三四)の末期に於ける伊太利の状態であつた。

若し伊太利人がローマの元老院に代表者を出してゐたならば、彼等はこれによつて其の財産と自由とを保障し得られたであらう。その方法は幾度か暗示せられたるに拘はらず、元老院の迂愚なる短見者流はこれに考慮を拂はず、またローマ人も外國人に對する將來の自由政策を抛棄しつゝ、あつた。帝國民として享くる特權と名譽とを甚しく尊重せし結果、彼等は其の後ローマ市民權を僅少の場合を除き他人に賦與することを拒んだ。外國征服の結果貴族の地位に登りし平民すら、伊太利人を劣等視し輕侮の眼を以てこれを見た。

(註一) 第四節

(註二) アピウス、『内亂記』第一卷第七節 Appian, Civil Wars, I, 7.

第四節 **ローマ市民・ポプラーレス、オプチマーテス、エクキテス** 奴隸勞働者の競争に堪へず、

伊太利農民同様ローマ農民も滅亡した。更に首府に於ては熟練工業と商業とは富豪若くは武士組合の掌中に歸し、彼等は主として奴隸の勞力と解放者の經營上の才幹とに信賴した(註三)。正直なる生活方法を失ひし多くの農民と商人とは、乞食と窃盜とに化し若くは大地主の被護民となつた。理論からすればローマ市民は征服により世界の主人公となりしとは言へ、事實に於て彼等の多數は不幸に陥り、自ら治むる能はざるに至りしことを容易に理解し得る。政治上平民の多數と其の指導者とをポプラーレス Populares (貧民黨) と言ふ。

第二ポエニ戰爭の終末以來、閥族即ちオプチマーテス Optimates は急に其の品性と能力とを失ひつゝ、あつた。彼等は世襲的階級となす若干の貴族より成り、其の特權圈内には容易に新人の侵入を許さなかつた。彼等はすべて高官を壟斷し其の家族の間に傳へた。

青年貴族は士官として先づ軍務に服し、更に屬領の會計吏として富を成したる後、高位の造營奉行に選舉せらる(註四)。この地位に就きしもの、義務は、自ら資を捐て、壯大なる宗教的祝祭と、觀覽

物とを催して人民に媚び、人氣と投票とを得て更に高き地位に進む。この合法的敬神的の買収により公然贈賄の必要がない。斯くして大判官に進み執政官となる。大判官・プロプレートル・プロコンサル(註一)として出で、屬領を統治すれば、こゝに掠奪を恣にして自ら富み且つ飽き、責任なき權力を揮つて傲慢と殘忍との限りを盡す。若し夫れ廉直なる生活に聲名を博すれば、検査官に選舉され人民の感謝を受く、これ貴族最高の名譽である。此の時代の貴族を眞に理解せんとせば、彼等は名譽のために官職を熱望せるのみならず、これを利用して世界の富を壟斷する手段とせし資本家なることを忘れてはならぬ。名譽ある貴族階級は狹量利己的なる金權政治に代つた。換言すればローマ帝國は、今や富者のために富者の支配する政治となつた。

貴族と他の富者とは百人會の武士即ちエクキテス Equites の十八部隊を組織し、更に他の餘裕あり、自ら騎馬を具して軍務に服し得るものも亦武士と稱せられた。武士階級は本來元老院議員を含む資本家であつた。彼等は租税の徵收・公共營造物の請負を大部分其の手に收めてゐた。

(註一) 第五九節。

(註二) 第三三節。

(註三) 第四九節。

第四七節 政府・元老院、保安官、民會 政府は従前の如く元老院・保安官・民會より成り、元老院は保安官及び民會を犠牲となして權力を獨占してゐた。議員は主に前に本國の官吏たり、又は軍隊の指揮官或は遣外使臣たりしものを網羅し、其の主なるものは經驗ある練達の行政官・將軍・外交

官であり、一度検査官により元老院に登簿せらるれば、終身その地位に在るを例とした。さればローマの外國征服に當り、斯る議員より成る元老院が最高の權力を有するは自然のことである。既に元老院議員たり、若くは元老院議員たらんとする保安官等が、其の命を遵守しこれに違反する如きは殆んど稀有の例外であつた。高位の保安官に就ては既に其の階級の順序に従ひ上述せしところである。

原則から言へば完全なる權利を有する市民は、すべて民會に出席し得ること、なつてゐた。ローマ市及び其の附近にある住民のみこれ等の集會に出席し、遠隔の地にある市民の多數はこれに参加する能はざる實情にあり、従つて急に賤民化しつゝ、あるローマの住民のみが投票權を行使した。更に民會の議員は法律を提案し官吏の候補者となり、或はある種類の問題に就て發言するを得ず、單に議長の提議する官吏候補者及び提案の賛否を表示するのみ。提案者たる議長は其の意思を民會に強要し得られた。換言すれば保安官は民會を左右し得たのである。

この時期には初期同様二個の主要なる民會があつた。部落會ツクピクタと百人會センツアタとである。部落會は會計吏、造營奉行、護民官を選舉し、講和條約を批准し、罰金其の他の訴訟に對する保安官の判決につき上訴を受理し、主要なる立法權を有してゐた。百人會は高位の保安官を選舉し、宣戰を協賛し重罪については最高法院たる職務を行ひ、時には法律を通過した。兩民會は單に其の組織に於て相違せる

のみであつた。

第二款 ローマの名士と文明

第四節 スキピオ・アフリカヌス ローマ人の特色は知名の士を研究することにより理解することが出来る。特に注意に價するはスキピオ・アフリカヌスである。西班牙の征服とザマの勝利とは彼をローマ最大の人物とした。彼は十五年間元老院の第一人者であり、再び執政官に就任し又た検査官となつた。彼は征服せし諸國を屬領とせず、從屬的同盟國とすべしとの確信を抱いてゐた。蓋し屬領守備の爲めに伊太利の國力は間もなく疲弊するを見たからである。この主張を實施せんが爲めに彼は伊太利に若干の植民地を設け、その兵力を以て半島の防禦に備へることとなつた。斯くして彼はフラミニウス(註一)の植民政策を支持した。

然し彼には多くの敵があつた。戦場に出で、絶對的指揮官たりし習慣より、彼はローマに於ても國王の如く振舞つた。彼は其の勢力を利用して一家の政治的利益を進め、公金私消の罪より肉親を保護せんが爲めに法律を蹂躪した。最後に平民の護民官は彼を收賄と奢侈且つ壓制を理由に告訴せし時、彼はこれに取合はず次の如く語つたといふ、『人民の護民官並びに卿等ローマ人よ、幸運と成功とに恵まれしこの記念日に、予は阿弗利加に於てハンニバル及びカルタゴを敵として戦つてゐた。

さればこの日予は辯論と訴訟とをやめ直ちにカピトールに赴き、こゝに最善最大の神ヂユビターとヂュノーとミネルヴァと、其の他カピトールと牙城との守護神たちに對し、この日と更に多くの他の場合に、神々が予に充分の意思と能力とを與へ、國家に最高の奉仕を爲すを得せしめたことを感謝せんと欲す。これ適宜のことなり。ローマ人よ卿等も又た予と共に來りて、予の如き軍將の與へられんことを神々に祈り求めよ。』(註二)民會は舉つて彼に隨つた。然し彼は教養の人にして文學と豪華とを好みしも、彼の才能は軍事に限られ、彼は政敵と對抗する能はず、田園に退き私的生活に入つた。

(註一) 第三節。 (註二) リヴァキー第三八卷第五節 Livy, xxxvi ii, 51.

第四節 ケートー スキピオの好敵手たりしマークス・ポルキウス・ケートー Marcus Porcius Ca-

to は、狹量にして同情心に乏しく吝嗇なりしも、道義的にして古ローマ美德の權化であつた。彼は農家に生れ生涯の靈感を、かの往時の偉大なる農民政治家マニウス・クリウス・デンタタス(註一) Manius Curius Dentatus に得た。彼の小舎はケートーの父祖傳來の田圃の附近にあつた。されば『彼は其の奴隸と共に冬は袖なき粗衣を纏ひ、夏は唯上衣トニックのみにて働き、彼等と食事を共にし同じパンを食ひ同じ葡萄酒を飲んだ。』(註二)

富裕なる隣人の保護と更に其の才能と正直とにより、この勤儉なる農民ケートーは終に國家最高

の地位に立身した。

『サルジニアの知事たりし時、前任者は其の天幕、寢床、衣服を屬領に賦課し、更に又た莫大なる饗應費を支出せしめたるに、彼は前代未聞の節約を行ひ、何ものをも屬領に課せず、各都市を訪れるにも輿を用ひず、獨り徒歩にて僅かに一名の従者を伴ひ、これに正装と祭典に供する奠酒の器具とを携へしめしのみ。同時に治下の人民に對しては極めて愛想よく又た卒直に、法を行ふに極めて嚴正情實に囚はれず、命令の實行には極めて細心の注意を拂つた。さればローマのサルジニア統治は、彼が知事たりし時程常に恐れられ親しまれた時はない』(註二)

彼は常に不屈の勇氣を以てスキピオ家を代表とする一派の奢侈・華美及び教養を攻撃し、有力なりし彼等の没落せしは主に彼の勢力による。貴族等は紅毛碧眼粗貌の『新人』ケートーを怖れ又た憎んだ。彼が恐る、ことなく彼等の愚昧と罪惡とを非難せしが故である。彼等の反對にも拘らず彼は検査官に選舉せられ、元老院より不評判の議員を排斥し、奢侈品に辛辣なる課税を賦課し、土木事業を管理し、國家の契約には私情を交へることをしなかつた。

(註一) 第三節。

(註二) プルターク、マールカス・ケートー傳、第三 Plutarch, M. Cato, 3.
(註三) 同上 第六 Plutarch, Marcus Cato, 6.

第四節 文明・文學、宗教及び道德

この時代に教育は一層普遍的となり、前代の如く富者の子弟は、其の家庭にて學識ある希臘奴隸の訓育指導を受けた。然し無産階級のためには私立學校設立せられ、僅少の費用を以て教育を施した。希臘語もラテン語も共に教授され、ラテン文學も出現するに至つた。ローマ人は詩・歴史・雄辯の著述に着手し、ラテン語に著されし最初のローマ史はケートーの述作であるが、現存して居らぬ。僅かにこの時代のプラウタス Plautus 及びテレンス Terence の喜劇數篇と、其他ローマ文學の斷章とを有するに過ぎぬ(註一)。

ローマ人は美よりも效用に留意した。下水道・橋梁・道路及び上水道の如き土木事業は、世界最善のものであつた。彼等は彫刻繪畫を自ら制作することなく、シシリー及び希臘都市より美術品を奪掠して輸入した。眞に美の理解なき貴族等は、其の邸宅と別墅とを此等の美術品にて裝飾した。

外國の藝術と共に外國の思想、宗教及び道德が輸入された。彼等は酒と未來生活をふくめての生命の神、希臘のディオニソス Dionysus 即ちバッカス Bacchus 及び神々の母フリヂアのキベレ Cybele の禮拜を始め、鼓・笛・鏡等を奏しつ、行列を作り街頭を練り歩いた。ローマ固有の宗教は靜的にして形式的であり、従つて彼等は東洋の刺戟ある宗教に満足を見出した。

ローマ固有の道德は既に萎微しつ、ありしが、東洋の影響により更に腐敗した。想像力を缺ぐローマ人は希臘神話と藝術とに美を認めず、寧ろその爛熟せる文明に伴ふ卑猥なる快樂を歓迎した。

同時に希臘の懷疑主義(註二)は、ローマ人の道德生活の根柢となりたる宗教的信仰を不安ならしめた。然しすべてのローマ人が今や惡徳となつたと考へてはならぬ。社會的滅亡を免れし農民は依然健在なる精神を有し、貴族社會に於てすら純情の人スキピオ・エミリアヌスを出し、來るべき革命時代の指導者たるべき高貴なる犠牲的精神を抱けるグラッカス兄弟を産した。而もローマは腐敗の雰圍氣に充ち、多數の寄生蟲的被護民は貴族の周圍に蝟集し、其の投する一片のパンと、時々彼等を樂しましむる道化芝居・觀世物・劍客の鬪技(註三)により貴族を支持した。胃の腑の満足と鬪技の見物とは、此等無頼の徒に最大の快樂を與へた。上流に就ては資本家の貪慾と貴族の倨傲は既に述べた。彼等の汚れたる生活はこれに勝るものがなかつた。他方帝國のあらゆる階級間には深く恐怖と憎惡とが潜在してゐた。斯る實情はこゝに改革の必要を絶叫するものを出すに至つた。

(註一) 最も有名なる詩人はナエウキス Naevius とエンニウス Ennius とであつた。最古のローマ歴史家フアビウス・ピクトル Fabius Pictor はエンニウス戦争中に元老院議員であり、そのローマ史 (Annals) は希臘語で書かれた。當時の希臘政治家ポリビウスは優れたローマ權力發展史を著し、その大部分は今日に傳はり、貴重なるものである。

(註二) 第二四節 (註三) 第四三節

第二節 金權政治の發達約説 (一)ローマ治下の伊太利の政治組織は全體として公正なるもの

であつた。それは同盟國家に保護を與へ、地方自治を保障せし故である。(二)これに對して屬領民は臣從民であつた。彼等は一般に外敵より保護され、且つ野蠻民族ほどローマ文明との接觸により多くの利益を得た。而も彼等は商業上の制限と、ローマの貿易業者・投機業者・租稅徵收請負者・貪慾なる知事の壓制を受けた。(三)屬領制度のために伊太利も亦衰微し、ローマは同盟國を壓迫し始めた。彼等はローマ資本家の貿易業者乃至は屬領に於ける奴隸勞働による大規模の農業と競争することが出来なくなつた。(四)ローマの平民は伊太利人同様の苦痛を受け其の範圍は更に甚しかつた。(五)帝國に於て利益を得たるものは少數の大資本家に過ぎなかつた。彼等は其の事業を獨占し又た有利なる官職を占めた。(六)此等の新事情は舊貴族的共和政治を化して金權政治とした。(七)同時にローマに傳へられし希臘文化はグラッカス兄弟及びスキピオ・エミリアヌスの如き偉大高貴なる性格の發展を助け、他方には懷疑思想と惡徳とを醸しつゝ、あつた。(八)すべての方面に於て帝國は衰退の徴を示してゐた。

第三章 軍國主義への革命(前二九)

第一款 グラッカス兄弟の改革(前二三)

第肆二節 **グラッカス兄弟** 前章に述べし弊政の改革は、チベリウス及びガイウス・グラッカス兄弟によつて企てられた。彼等は平民ではあるが最高の貴族階級に屬し(註)、彼等の父はあらゆる高官に就き、母コルネリア Cornelia はハンニバルを征服せしスキピオの娘であつた。彼等の教育は其の門地及び其の縁戚と相俟つて、榮譽ある生涯を送るに適してゐた。教育ある母は彼等に雄辯を教へ、希臘人教師はヘラスの哲學と政治思想とを傳へた。彼等兄弟は共に貴族の家庭と結婚縁組し、青年として軍務と屬領事務とに關與せし時には、同盟國民も從屬民も、更にローマを敵視するものすら彼等の祖先の親切と彼等自身の高き品性とを尊敬し敬愛した。彼等は農民と屬領民と更に奴隸とに對する寛容と同情とを父祖より繼承してゐた。

(註) 第叁二節

第肆三節 **下層階級の狀態**

九歳の年長者兄チベリウスは下層階級の悲慘なる狀態に注意した。

前章に述べし如く少數の富豪は、國有地の使用(註)と共に世界の富を殆んどすべて壟斷し、他方多數の民衆は其の家庭を營むことさへ出来なかつた。こゝに彼等の狀態を述べしチベリウスの演説を引用する、『伊太利の野獸は其の棲家を有する。而も伊太利の防禦に生命を賭する彼等は空氣と日光の他に何物をも所有せぬ。休息すべき家なく土地なく妻子と共に彼等は漂泊する。而も彼等の指權宜は自己の墳墓と殿堂とを守るため、歎いて兵士を戰場に送る。されど多數のローマ人のうち、

一人だも其の家族の祭壇と祖父の墳墓とを有するものなく、唯他人の富と奢侈とのために戦ふ。彼等は眞に自己の所有と稱する一片の土塊なくして、而も世界の君主と稱へられて死す』。嚴格に言へば恒産なきものの軍務は禁ぜられてゐた。然し吾人はこの演説より、事實に於て軍隊は最近貧民の家庭を有せざるものより成りしことを知る(註)。

(註一) 第叁二節 第肆二節參照

(註二) マリウスの時代以前には斯る軍隊組織は例外であつた。第肆三節。

第肆四節 **チベリウスの土地法** (前二)

貧民の生活改善に全力を盡す決心をしたチベリウス・グラッカスは、紀元前一三三年平民の護民官となり、有名なる當時の法學者・執政官ムシウス・スカエボラ

Mucius Scaevola の賛成を得て次の如きリキニウスの土地法(註)の再制定を提案した。

(註) 第叁二節

- (一) 何人も五百英町以上の公有地を使用すべからず。
- (二) 何人も公有地に於て百頭以上の牛若くは五百頭以上の羊を飼育すべからず。
- (三) 農園労働者のうち一定數は自由民たるべし。

此等の條項に彼は更に次の項目を追加した。

(四)現在の土地占有者の男兒は——其の數二名を越ゆべからず——各自二百五十英町の公有地を所有するを得。

(五)部落會の選出する三名の委員は、殘餘の土地を必要ありと認むるものに、各三十英町宛に區分してこれを分與すべし。

彼の計畫は、能ふ限り多數の家族を懶惰と貧困より救濟し、奴隸の代りに勤儉なる農民を以て國家を充實するにあつた。貧民に生計の機會を與へ、以て彼等を正真有用なる市民と爲さんと欲した。同時に彼は適法有資格の市民を増加し、以て軍隊を有力ならしむるを目的とした。然し既に公有地を私有財産の如く賣買贈與し來りたる富者は、彼の法案を盜賊の具なりと言ひ、彼がこれを民會に提出せし時、彼等は護民官オクタヴゥスをしてこれを拒否せしめ、その通過を阻止した。

チベリウスの忠告により民會は、頑迷なる護民官の職を奪ひ、次いで土地法案は反對なく通過し其の後極めて圓滑に執行せられ、四年後の國勢調査によれば、約八萬の軍務に服し得る市民を増加してゐる。人口の減少を阻止し、多數の有用なる市民を増加するは、偉大なる愛國的政治家の事業であつた。

第五節

チベリウスの合法的行動

オクタヴゥスの貶黜については更に検討を必要とする。これより以前保安官にして未だ會て其の地位を奪はれしものはない。従つてこれは長年の習慣を不意

に破壊せしことを意味する。然し共和政時代に民會の得たるすべての權力は、殆んど同様の方法によつたものである。換言すれば民會の新しき權能は法律によつて得たるにあらざりて、單に其の權能を得て引續きこれを行使したのである。本則より論ずればローマ政府は民主政であり、民會は最高の權力である。若し保安官を廢止する慣習を始めるとすれば、民會はその權能を有してゐる。然し紀元前二二二年フラミニウスの護民官以來民會は、元老院に一切の發議權を委ねてゐた(註一)。さればチベリウス・グラッカスの下に民會が其の至上權を行使せんとせし時、元老院は自然其の行動を以て違憲なりと宣言した。彼等は理論上長く承認せし權能も、實際に行使せらるゝを欲しなかつた。而も其の後數年を経ざるに元老院は、保安官の官職を奪ひ得る新原則を承認してゐる(註二)。

土地法の實施後間もなく、チベリウスは護民官に再選せらるゝことを欲した——これ更に慣習に反する。然しその適法なるや否やに就ては同様の考慮を必要とする。彼の留職は彼自身又た彼の同情者にとつて、土地法の實施と他の改革のために必要であつたと思はれる。

(註一) 第四三節

(註二) 此の問題に就てはグリーンニツヂのローマ史 (Greenidge, History of Rome, I, 123-127) ホッフォー
Z. (Botsford, Roman Assemblies, 367 f.) を参照せよ。

第五節

チベリウスの死

(前二)

選舉の當日、彼を援助する農民は收穫に忙しく、投票の開始せ

らる、時に至れば、元老院議員及び彼の反對者は民會を解散した。二名の護民官は裏切りて混棒にてチベリウスを撲殺した。三百の與黨は彼と共に殺され、其の死體はチベル河に投棄された。これより曩き共和政治の歴史に於て、民會は幾度か元老院の衷心より賛成せざる行動を取つた。元老院の政策はすべて適法的手段に訴へて斯る法案の採擇を拒否し、適法なる反對方法を誤りたる時には讓歩し、昂奮期の靜まるを俟つて徐ろに其の法律を無効にした。現在の場合にもこの方法を取るべしとは、法學者にして前例に通ずるスカエボラの意見であつた。然し彼の穩健なる對策は元老院議員を満足させなかつた。コリントとカルタゴとの破却を主張し、譎詐と殘虐とをもつて外敵を待遇する政策を唱道せし彼等が、政敵を仆すに暴力に訴へしは自然のことである。これローマの政争に於ける最初の流血事件であり、暴民を指揮せしは元老院議員であつた。この事件は更に他の人民不滿の原因と相俟つて、爾來百年に亙る革命の尖端となつた。貴族に反對する革命派の目的は、理論に於ても實際に於ても民會を以て元老院に代へ、民主政治を以て寡頭政治に更ふるにあつた。然るに豫期に反して革命は共和政治の顛覆を以て其の終りを告げた。

第壹七節 民主政治の前途

チベリウス・グラッカスの死後暫くしてカルタゴの征服者スキピオ・エミリアヌスは、土地の分配を停止し改革はこゝに一頓挫を來した。

等に市民權を與ふることを提議した。此の提案は若し元老院がこれを抑壓せざりしならば、伊太利人は喜んでこれを容れたであらう。彼等は更に候補者を缺ぐ場合には、護民官の再選を許す法律を通過した。尙ほ重大なるはガイウス・グラッカスの出現である。人民は彼の法廷に於ける友人辯護を聞き狂喜した。彼に比すれば他の雄辯家は小兒の如きを見て、彼等のために彼の偉才を利用しようと考へた。彼は一時政治を回避した。然し彼の宿命は兄の事業を完成するにあつた。一夜チベリウスは夢に彼の枕頭に現はれて曰く、『ガイウスよ、何の躊躇ぞ。卿の運命は予の如く人民のために生き又た死するにある。』

(註) 伊太利人は同盟國民としてそのローマとの政治的關係は第四六節に述べた。彼等は帝國の發展のために甚しく惱まされた。第四四節。

第壹八節 護民官ガイウス・グラッカス

(前二三)

彼は紀元前一二三年の護民官の候補者となり、貴族

等の反對に拘はらず全伊太利の熱心なる支持を受け、選舉の當日人民はカムプス・マルチウスに溢れ、屋上より彼等の希望を絶叫した。其の任期の滿了するや、彼等は再び彼を選舉した。

兄チベリウスは農民に依頼して失敗した。農民は政治のために其の田圃を去ることが出来ない。従つてガイウスは先づ側近に忠實なる後援者を得るを目的とした。依つて彼は法律を制定し、市民には市價の半額を以て、政府の穀物を毎月頒布することにした。世界の政治的中心としてローマの

人口は激増し、更に伊太利全土を通じて農地の荒廢せし結果、數千の流民は都市に溢れ、而も彼等は殆んど生業を得ることが出来なかつた。ローマには工業なく、常に屬領の輸入品に頼るのであつた。生活問題は繁榮の時代にあつても、多數の人民には其の解決が困難である。況んや最近各種の不幸により穀物の供給減少したる際に、政府の補助は切迫せる飢餓に對する唯一の救濟方法と思はれた。ガイウスの穀物法 *Frumentarian Law* は決して新しき原理を創めた譯ではない。元老院は從來屢々廉價若くは無償を以て穀物を人民に頒布し、貴族は多數の被護民を支持してゐた。ガイウスは單に人民を少數貴族の手より奪ひ、彼の改革案の後援者たらしめたに過ぎぬ。斯くして彼は假令有力なる帝王と雖も如何ともする能はざる鞏固の革命軍を組織した。彼の制度は國庫を窮乏に導き、懶惰を奨勵する惡結果を生じた。而も偉大なる彼の改革にして完成したならば、恐らくこの弊害は全く矯正されたであらう。

第壹九節 ガイウスと他の改革

ガイウスは次いで帝國の經濟的發展に留意した。チベリウスの土地法を更新し、國有地の餘剰を貧民に分配する計畫を立て、更にタレンツム、カプア其の他伊太利沿岸にある各地に商工植民地を設くる政策を定め、ローマ資本主義のために破壊されし伊太利の繁榮を恢復せんとし、伊太利以外に於ては舊カルタゴの附近に一植民地を設くる計畫をした。ローマ市民を以て屬領に植民せんとする思想は全く新發の地であつた。この種の植民地を以て「*coloniae*」と云ふ。テン語とラテン文明とは土人に傳播し、斯くしてその後數世紀間にローマ市民權を屬領民に與ふることとなつた。ガイウスの植民政策はその實行せられし範圍内に於て、間もなく伊太利及び帝國の商業の繁榮を恢復し、ローマの貧民を地方及び小都市に配分し、こゝに彼等の生活の機會を得せしめた。

ガイウスの護民官たりし以前に、特殊の犯罪を審理する裁判所が設立された(註一)。一は伊太利及び屬領に於ける官吏の不法誅求を審理し、他は殺人罪を處斷するものであつた。此等の法廷は大判官を裁判長とし多數の元老院議員を陪審員として構成されてゐた。不法誅求の場合には被告の官吏は多く元老院議員であり、従つて概して有罪と無罪とを問はず陪審員によつて免訴された。この弊害を除くためにガイウスは、陪審員は武士たることを必要とする(註二)法律を定め、此等の法廷を通じて武士は元老院に對し權威を有することとなつた。然るに數年にして武士も亦其の權力を濫用し、恐らく元老院議員よりも一層腐敗せるものとなつた。さればガイウスの法律は彼の希望せしほどに廓清の實を擧ぐるに至らなかつた。

ガイウスは伊太利に道路を建設し(註三)穀倉を設け、こゝに人民に廉賣する政府所有の穀物を貯藏した。彼は親しくすべて此等の事務を統督し、彼の邸宅は帝國行政の首腦官署となつた。人民は彼が多くの建築請負師・工匠・外國使節・保安官・軍人・學者に圍繞され、彼等と親しく應接せる様を見

て驚嘆の眼を瞠つた。彼は威嚴を保ちながらもすべてのものに愛想よく、其の人に應じて態度を更へた』(註二)。斯くして彼は偉大なる雄辯家・改革者たると共に、實際的手腕ある行政官たることを示した。

最後にガイウスは、完全なるローマ市民権をラテン人に、ラテン人の権利を伊太利人に與ふる提議をした。すべての市民権を壟斷せんとするローマの住民には、この提案は彼等に對する冒瀆であつたに相違ない。彼等は憤を發して彼に反對し、三たび護民官の候補者に立ちし彼を破つた。元老院が彼のカルタゴ植民地建設の計畫を妨げんとせし時、兩派はその解決を暴力に訴へた。執政官オピミウス Opimius は、元老院より絶對權を委任せられ(註三)て民黨を仆し、グラッカス及び其の與黨三千を殺戮した。人民は或はガイウスと共に暴民の暴手に仆れ、或はオピミウスによつて無審理の儘死刑に處せられた。

(註一) 第四四節

(註二) 第四六節。公務に供する馬匹を所有し、コムチア・センツリアタのエクキテス十八部隊に屬し、その

投票權を有するものに限り被選舉權を有す。

(註三) 其の位置は不明である。

(註四) プレタールク、ガイウス・グラッカス傳六 P. Praetor, C. Gracchus.

(註五) 第二ポエニ戰役には大都統に任命せられしものなく、グラッカス兄弟の時代後暫くしてスツラの時に復活した。此の間元老院は軍法を施行する新方法を發見した。即ち『執政官(及び其の他の保安官)をして國家の被害を豫防する爲め』なる決議により保安官に大都統に等しき權力を與へた。オピミウスは元老院よりこの絶對權を受けた最初の人である。キケロも亦カチリンの陰謀に際しこの權力を與へられた。

第四〇節 **グラッカス兄弟の批判** チベリウス・グラッカスは一大改革を案出してこれを實行した。

ガイウスの目的は社會の革新にあつた。彼は伊太利人を出来る限りローマ人と平等にし、伊太利及び屬領に農業植民地を建設し、すべての貧困者にも家庭と、正直なる生活手段とを與へんとした。彼は又た商業植民を以てローマの破壊せし經濟生活を恢復せんとした。其の他はすべて此等の目的を達する方法であつた。彼の改革にして完成せばローマに貧民なく、穀物法は不要となり、奴隸制度は制限され、伊太利は繁榮に赴いたであらう。

彼は此等の改革を實行するために、護民官の地位を尙ほペリクレス時代のアテネの將軍(註二)の如く、國務長官とすることを希望した。國務長官は高官の候補者を指命し、元老院の諮詢を経て、親しく帝國の行政を總理すべきである。約言すれば護民官は政府の首腦たるべきであつた。彼等は廣汎なる權力を有し、人民が部落會に於て彼等を信任する限り毎年その職に留まる必要があつた。グラッカス兄弟の失敗は、彼等の後援を求めし市民が餘りに無智且つ利己的にして、高遠なる爲政家的

政策を支持する能はざりし事實に原因する。彼等は穀物の廉賣其他自己の利益となることに賛助を吝まなかつた、然しガイウスが他人にも又た利益を與へんとするを見てこれに反対した。

無理解と裏切との犠牲となりし彼等も、死後は民黨の聖者となり殉教者となつた。『一時屏息せし人民は間もなく深くグラッカス兄弟を悼み、兩人の彫像を公園に建て、彼等流血の地は聖地としてここに四季最初の收穫を獻け生贄を供し、恰も神々の殿堂に於けるが如くに禮拜した』(註二)。人民はコルネリアの子息を以て國史の顯彰せし最高人物とし、これを祭祀崇拜せしは正しく適當の事である。

(註一) 第三五節

(註二) プルターク、ガイウス・グラッカス傳一八 Plutarch, Gaius, 18.

第二款 元老院の權力恢復(前二二)

第四二節 ガイウス・マリウスとユゲルタ戦争(前一一)

活となつた。ローマ帝國の安全と幸福との爲めには、この腐敗せる貴族社會を根本より顛覆し、其の代りに正しき強き政府の樹立が必要であつた。勿論ガイウスは將來の手段を明察して居たけれど、政黨改派は一として彼の改革を支持しなかつた。新政府の實現なるは、元老院の權力恢復の復

彼の後繼者ガイウス・マリウス Gaius Marius 12 遭われた。

マリウスはラチウムの山間にある相當の家庭に生れ、少年時代に勤勞と嚴格と服従とを教へられた。弱冠して軍隊に入り、士官となり平民の護民官に進み、其の後西部西班牙の知事としてその廉直と力量とを示した。彼の西班牙より歸るや貴族ケーザル家のユリアと結婚し、間もなくヌミヂアに兵略家としての天才を發揮するに至つた。

マシニッサ(註)の孫ユゲルタ Jugurtha は、正統の相續者を弑してヌミヂアの王位を僭奪した。

元老院はこれに干渉せしも、彼は相次いで問責の使節を買収した。ローマの宣戰するや、彼は最初の指揮官に贈賄して阿弗利加より撤退せしめ、第二回遠征軍の士官を買収して軍隊を降伏せしめ、これを軛の下に送り、同時にローマを訪れて元老院に其の行動を辯疏した。彼はまたローマに滞在中王位の競争者を殺戮した。其の後彼はローマに永く留るを得ず、去るに臨み『腐敗せる都市ローマよ、何れは買収されて衰亡すべき運命にある、唯買収者の出現を俟つのみ』と放言せしと傳へられて居る。斯くの如きは精力家メテラス Metellus が軍司令官に任せられし時のローマの状態であつた(前二)。彼はマリウスを副官として遠征の途に就き、マリウスの援助を得て無秩序の兵士を軍律に服せしめ、更に一年間に費して尙ほユゲルタを征服若くは捕虜とする能はず、武力と計略とを兼ね用ひしも空しく失敗に終つた(前二)。其の翌年メテラスは漸く勝利を得たるも、ユゲルタは間もな

く新軍隊を集め其の勢力頓に強大を加へた。この時執政官に選ばれしマリウスはメテラスに代つて指揮権を取り、敵の要塞を相次いで奪取しユグルタを二回戦場に撃破した。最後に彼の下に會計吏たりし青年貴族ルシウス・コルネリウス・スッラ Lucius Cornelius Sulla は、謀計を以てユグルタを捕虜とした。彼はマリウスの凱旋式を飾りし後獄裡に死し、領土を減小せしもヌミヂアは依然従屬王國として残された。この戦争はこれより以前の事實と共に、明かに元老院の無能と道德的墮落とを示すものである。

(註) 第三節

第四節 キムブリ人及びチュートン人との戦^(前二三) ローマ人はガリアの南岸に沿ふ狭長の土地を得、これをナルボネンシス Narbonensis と稱して屬領とした^(前二三)。この屬領の北部には好戦民族にして、多くの獨立せる部落をなすケルト種族が住してゐた。當時ケルト種族はガリアのみならず、アルプス北部にある狭長の土地、南部獨逸よりダニューブの平野に散在してゐた。

ユグルタ戦争の始まりし時、ゲルマニ種族のキムブリ人はアルプスの北部にあるケルト種族の領土に侵入した。執政官カルボ Carbo は軍隊を率ゐて急に赴き、この地方にあるケルト族のローマ同盟者の援助に向ひしが、却つて侵入者のために敗られ辛うじて其の軍隊を以て免れた^(前二三)。二年後キムブリ人はライン河を過ぎ、ガリアの土人に挑戦し更にナルボネンシスを脅した。彼等の間には

今やチュートン人が参加してゐた。學者の説によれば後者はゲルマニ種族なりと言ひ、或はケルト種族とも言ふ。此等の野蠻人は更に四回も執政官の救援軍を撃破し、進んで伊太利に侵入せんとする形勢を示した、然し三年間にローマは充分の準備を整へた。毎年執政官に選舉せられしマリウスは、軍隊の組織と訓練とに忙殺されてゐた。終にチュートン人のアルプス横斷の準備成りし時、彼は南ガリアのアクアエ・セクスチアエ Aquae Sextiae に彼等と會戦し、その大部隊を全滅せしめた^(前二)。同様にして彼と同僚カツラスは、翌年アルプス横斷に成功せしキムブリ人を、北伊太利のヴェルセラエ Vercellae に於て蹂躪した。

斯くの如き大勝利を得たる軍隊は、全然新しき性質のものであつた。マリウス以前の軍隊は民兵であつた。即ち従來ローマの戦争に従事せし兵士は、本國に土地と家庭とを有するローマ市民であつた。然るにこの中産階級に屬する市民は、伊太利の經濟的衰退と共に其のあとを斷ち、グラッカス兄弟はこれが復活を計畫せしも、貴族の妨ぐるところとなつた。されば國家を外敵より防禦するためにマリウスは、軍隊を主として無産階級より組織する必要を感じた。彼は従來不合理例外視せしものを習慣的とした。彼は其の部下を長く軍隊に留め、これに特別なる訓練を施し、以て専門的の軍人とした。彼等は一切の希望を其の指揮官に置き、あらゆる計畫に於て、假令政府に反抗するも指揮官に追従せんとするに至つた。マリウス自身は國家に忠誠であつたけれども、後の將軍は軍隊

を共和政治の顛覆に用ひた。斯く考へ來らばグラッカス兄弟の政策は、實際に於て保守的なことが明瞭である。即ち彼等は中産階級の復活によつて共和政治を救済せんとしたのである。然し彼等の改革を排斥せし結果、必然的に市民の忠誠心を缺き、且つ進んで共和政治を仆し軍閥政治を以てこれに代ふる軍人階級の崛起を促すに至つた。

第四三節 貴族の支配

貴族は元老院議員となり、あらゆる高官を獨占し、暴力と流血とに訴へてグラッカス兄弟の改革運動を阻止し、ガイウスの死後彼が植民地の建設、土地の分配によつて完成せし善良なる施設を破壊した。彼等は進んで彼のカルタゴ植民地設置の法律を廢し、次に土地法をも中止し、尙ほ買収若くは暴力を以て、既に土地法によりて農民の所有せし小田地を、彼等富豪の手に兼併する方法を講じた。而もガイウスが一時の便法として開始せし穀物の廉賣は繼續し、依て以て自己の權力を維持する手段に利用した。嘗て元老院の受けし尊敬は今や殆んど地を拂ひ、唯暴民の歡心を求めて國家最高の地位を維持するに過ぎぬ。ユグルタ戦争に於て貴族は自己の無能と腐敗とを暴露した。其の後平民より崛起せし一個の人物により國家は外敵の侵略より救はれた。貴族は一見其の權力を完全に恢復せし如く見ゆるも、革命的暗流はローマに、ラテン人、伊太利人のあひだに急に其の勢を加へ、やがて元老院と共和政治とを壓倒せんとしてゐた。

第四四節

マリウス、サツルニナス及びグラウシア

(前)

マリウスは第六回の執政官職につくや

(前)護民官サツルニナス *Murcius* 及び大判官グラウシア *Churcia* と盟約し、部下の老兵士のため植民地を屬領に建設する法律を通過した。此等兩名は其の手段に於ては無法であつたが、グラッカス兄弟の改革を實行するを目的とし、元老院を援助する都市の賤民に對抗して農民を代表してゐた。即ちサツルニナス及びグラウシアは、武装せる與黨を率ゐるて部落會に臨み、此の法案を協賛せしめた。其の後間もなく賤民と農民との間に暴動が起つた。爰に於てか元老院議員と武士とは、マリウスを最高の保安官として動亂の鎮定を求めた。彼は心ならずも軍隊の一部を武装し、憲法擁護のために以前の盟友サツルニナス及びグラウシアに對抗した。暫くして彼等は降伏し、その政敵は彼等の死刑を要求した、然し『マリウスは適法の處置を仰ぐために彼等を元老院に送つた。暴民はこれを單に口實であると考へ、屋上の瓦を剥いで彼等を打ち殺し、同時に職章を帶びし會計吏、護民官及び大判官各一名同じ災厄に仆れた。』(註)

味方たる改革者に背き、敵の貴族と運命を共にせしは、マリウスの一大過失であつた。ローマ世界に取つては、彼がこの機會に自ら國家の統治者となり、必要あれば武力を用ひても緊要なる改革を遂行せしを遙か勝れりとしたであらう。然し政治的才幹を缺ぎし彼はこの機會を逸した。事實彼は餘りに偉大なる成功に酣醉し、其の堅實なる農民的特性を消耗した。彼は終に其の運命を逸した。ローマの運命は他人の手に移つた。

(註) アピウス『内亂記』第一卷第三節 Appian, Civil Wars, I. 32.

第四五節 ドルスス(前)

元老院は四面楚歌の裡にあつた。武士と賤民と農民とはすべて公然或は秘密に敵意を示し、同時に壓迫された伊太利人は、將に叛亂を起さんとしてゐた。此等の事情は一層自由思想の貴族をして伊太利人に市民権を與へ、彼等の援助を得んとするに至つた。此の運動の領袖マルカス・リヅキウス・ドルスス Marcus Livius Drusus は巨富を擁せる名門の家庭に生れし青年であつたが、紀元前九一年平民の護民官となつた。彼の伊太利人に選舉權を賦與せんとする提案は、民會を通過せしも元老院に於て否決され、其の後間もなくドルススは殺された。次いで何人にも伊太利人の市民権獲得に援助を與ふるものは告訴すべしとの脅迫的の法律が通過した。

第四六節 同盟戦争(前)

ドルススの死と此の法律の通過とは、伊太利人より平和の手段によつて權利を得る最後の希望を奪つた。彼等はローマに出でて投票權を行使するを欲したのではない、彼等の多數は遠隔なる土地に住し、斯る權利を行使する事が出来ない。然し彼等はローマ市民権の保護を必要とし、兵士は指揮官より人間的待遇を希望し、平時にはローマ人と同じく財産と貿易の權利を求め、就中ローマの官吏乃至市民が娛樂のため若くは怨恨の餘り、彼等を侮辱し鞭打し、或は殺戮するなきを欲した。ローマ市民権とは彼等に取つて畢竟斯くの如き意味のものである。

を創設し、首府としてコルフキニウム Corfinium を選び、ローマの政府に模し、この自由戦争に參加せしものに市民権を與へ、伊太利全體を併合するを目的とした。ローマと其の同盟國 Socii (註一)との間に始りし争闘は、同盟戦争 Social War と呼ばれて居る。相對抗する勢力は數個の小軍隊に分れ、従つて其の軍事行動は複雑を極めた。ローマの大軍隊を相手として伊太利人は第一年には大成功を収めた。由つて其の年の終りにローマ人は、尙ほローマを棄てず忠誠なる伊太利人に對しては、市民権を賦與することを保證するの已むなきに至り、其の後間もなくローマに復歸し忠誠を誓ふものにも、同様に市民権を與ふることとした。此等の讓歩は常に叛亂の彌蔓を防止せしのみならず、更に彼等の勢力を弱め一年後にローマは同盟國の勢力を打破するを得た。

伊太利人は既に其の都市 Municipia (註二)の地方的自治を有せし上に、今やローマ市民権を與へられ、ルビコン以南の全伊太利國民は終に一大國家に結束された。然し新市民は八個の新部族に登録せられ、舊來の三十五部族の次に投票することとなつた。此の状態に満足せざる伊太利人は依然元老院とローマの賤民とを彼等の壓制者と見、有力なる專制者の出現を歓迎し、彼等の敵を足下に蹂躪するを期待するに至つた。斯くて王政の思想は一步を進めることとなつた。

(註一) 第四六節 (註二) 第四五節

第四七節

マリウスとスッラ

斯くて政治は新局面に轉換した。即ち將來の問題は、何人が權力

を掌握し、如何なる程度に元老院の權威を剝奪するやにあつた。最初の衝突は百戰老巧のマリウスと、ユグルタ戦争に際し彼の會計吏たりしスッラとの間に起つた。後者は貧かりしも尙ほ貴族に屬し戦争と外交と政治とに優秀なる才幹を具備してゐた。『彼の清く澄める藍色の眼は人を射る如く、食事に混ぜた桑實の如くに、彼の白面に點々散在せる赤班と共に一層險惡なる容貌にした』(註二)。同盟戦争に將軍として成功せしスッラは、紀元前八八年執政官に就任することとなつた。

この年ローマは、東方の領土を脅しつゝ、ありし有力なるポンツス國王ミトリダテス Mithridates (註二)に、軍隊を派遣する必要があつた。通常斯くの如き重要な軍隊の指揮權は、元老院より執政官に附與せられ、執政官は一年の任期終るや前執政官 Proconsul の稱號を以て其の任務を繼續した。この場合に軍隊の統帥は執政官スッラに委ねられた。然るに民會はマリウスに指揮權を與へた。此の種の軋轢に於て人民を主權の本體とする民會は、憲法上最高の權利を有してゐた。然しスッラは軍隊を率ゐてローマに至り、この問題を武力によつて解決した。マリウスは阿弗利加に遁れた。これは軍隊が政治に干渉せし最初のことであつた——歴史上共和政治の危機であつた。吾人はグラッパス兄弟に始まりし革命が今尙ほ進行中なることを記憶するを要す、而も革命の指導者は最早や護民官にあらずして將軍であつた。元老院の權威を恢復し、これに護民官を統御する充分なる權力を與へし後、スッラはミトリダテスと戦はんが爲めに軍隊を率ゐて出發した。

(註一) プルターク、スッラ傳 第二 Plutarch, Sulla, 2.

(註二) 第四九節

第三款 元老院統治の顛覆及び復活(前七)

第四節 マリウスの革命(前七)・キンナの統治(前七)

クタヅキウス Octavius とキンナ Cina との間に、伊太利人を舊部族と同様登録するの可否に就き衝突を生じ遂に武力に訴ふるに至り、その結果約一萬人の死者を出した。貴族派の領袖オクタヅキウスは、伊太利人の代表者キンナをローマより放逐し、元老院は民黨の領袖たる彼の執政官職を奪つた。然るにキンナは早くも伊太利人の軍隊を集め、マリウスを召喚しスッラの例に倣つてローマに進軍した。マリウスは多くの冒險を冒し間一髪の苦境を脱して亡命地より歸國した(註二)。既に彼の偉大なる性格も、老境に入りては貴族に對する狂暴なる憤怒と變じた。『長髮垢面の彼は各地を巡遊して其の悽慘なる風采を示し、幾多の戰場を往來し、曾てはキムブリ人に勝ち、既に六回も執政官たりしとある經歷を説き』(註三)、更に鞏固なる決心を以て伊太利人に彼等の權利を約束した。革命の二領袖は伊太利人・外國人及び逃亡奴隸の一團を率ゐてローマに入り、オクタヅキウスその他有名なる貴族を殺戮せし後、五日に亘つて其の反對派を探索してこれを殺し、其の財産を沒收した。

彼等は伊太利人に約束の権利を與へた。マリウスは第七回の執政官の職に就きしも、其の後間もなく歿した。

吾人はマリウスの殘虐なる政策を非難すると共に、貴族はグラッカス兄弟の與黨を殺戮し、あらゆる穩和なる改革手段に反對し、其の貪慾と壓制とを以て終に自らこの怖るべき膺懲を招くに至りしことを忘れてはならぬ。

こゝに述べし革命は、再び元老院を顛覆し民黨を政治の首班とし、領袖キッナは毎年執政官に再選せられ、紀元前八四年まで權力を維持した。而も此の間彼は何等改革の計畫に着手せず、貴族と同じく無能を暴露した。最後に亞細亞より歸國するスッラに對抗の準備中、彼に背きし部下の軍人に殺された。

(註一) 彼の冒險に就てはボツツフォード著『ローマ史』中に叙述あり。Botsford, Story of Rome, p. 177.f.

(註二) アピウス『内亂記』第一卷第六七節 Appian, Civil War, i. 67.

第四九節 第一ミトリダーテス戦争

(前六)

上述せし如く(註)紀元前一八九年アジア戦争の終りに、

ローマは小亞細亞に保護制度を布き、その結果ローマと從屬的同盟を締結せし小王國のうちに黒海の南岸にボンツスがあつた。元老院がユグルタ戦争を開始せし頃、ボンツスの王位はローマの強敵となる一青年の占むるところとなつた。そはミトリダーテス六世にして屢々大王と稱せられ、勢力

人に優れ親むべき性格と卓越せる天才であつた。彼は希臘教育の研磨を受けし普通の東洋人として多くの勳功ありしに拘はらず、狡猾・無作法・兇暴を以て始終一貫した。ミトリダーテスはローマのユグルタ戦争及び後には其の同盟戦争を利用し、急に其の權力を征服と同盟とによつて擴張した。

最初黒海の北岸一帯の地を收め、次いで小亞細亞を併合するに及び、其の保護國たるローマはこれに干渉して戦争となつた(前)。ミトリダーテスは間もなく小亞細亞の主人公となり、其のうちには

ローマのアジア屬領をも包含してゐた。すべての伊太利住民はこの屬領に於て國王の命により、男女小兒を問はず、其の數約十萬一定の日に殺戮された。其の後彼は軍を率ゐて海を越え希臘に赴いた。希臘人は彼をローマの壓制より解放する救世主として歓迎した。かくてローマは將にアドリア海の東方にある領土を喪はんとした。然しアジアに於ける伊太利人の虐殺は、全市民を憤起せしめ時を移さず對應手段を講ずることとなつた。

スッラは五軍團を指揮して希臘に急行し、アテネを包圍してこれを占領し、更に二回の勝利を得て大王の軍を歐羅巴より驅逐した。同時に小亞細亞は殘忍なる國王より離反し、彼はローマと其の同盟國より奪取せる征服地を抛棄して講和の已むなきに至つた。其のうちにはビシニア Bithynia 及びカパドキア Capadocia の兩王國があつた。然し彼は機會あらばこの條約を破棄するに至るべきは何人も疑はざりしところであつた。

(註) 第五節

第五節 最初の内亂^(前八四) スッラは急に講和條約を締結せし後、心服せる戰勝軍を率ゐて伊太利に歸り、ローマの權力を掌握せる民黨は彼の歸國に對抗し、こゝに兩者の間に内亂が起つた。民黨の首領はカルボ及びマリウスであつた。後者は有名なるマリウスの子である。彼等は主として同盟戦争に参加しながら終に降伏せざりしサムニテ人及びルカニア人の援助を受けた。戦争についてここに詳述する必要はない。決戦はローマのコリン Colline 門外に行はれた。スッラは激戦の後に全く敵を粉碎し、幾千の捕虜を用捨なく屠殺した。カルボは既に阿弗利加に遁走し、小マリウスは長くプラエネステに包圍されて居た。彼は部下の降伏に先ちて自殺し、殘餘の守備兵は虐殺され、間もなく全伊太利はスッラの足下に屈伏し、勇敢なるサムニテ人は殆んど絶滅した。同盟戦争と内亂とは、既に久しく富と人口との衰微を見つゝ、ありし伊太利を、更に此等の大破壊によりてその滅亡を殆んど完成した。

第六節 スッラの政治^(前八三)・彼の制度

スッラは自ら政府の首腦となるに及び、進んで政敵の絶滅に冷酷殘忍なる手段を講じた。彼は日々其の犠牲者『公權被奪者』の人名表を揭示し、何人にても彼等を殺戮し尙ほ且つ報酬を受くるを得た。公權被奪者の財産は没收され、其の子女は選舉權を失つた。斯くしてローマに於て殺害されしもの、數は殆んど五千に達し、そのうちには元老院議員

と武士とを含んでゐた。多數のものは私的憎惡の犠牲となり、更に多數のものは單に富豪の故を以て殺害され、同時に殺人と没收とは全伊太利を通じて行はれた。何人も犠牲者を庇護する能はず、子女と雖も兩親を如何ともすることが出来なかつた。この惡鬼的法律は、親切と愛情とに犯罪的烙印を與へ、惡意と貪慾と殺人とに褒賞を授けた。

暫くしてスッラは久しく行はれざりし大都統の地位に就き、貴族制度の復舊に着手した。(一)多數の元老院議員は、戦争と公權剝奪との爲めに死亡したるを以て、彼は各部族の與黨より新議員の選出を命じ、元老院議員の總數を六百名と定めた。この數はケーザルが更に増員するまでの一定數であつた。(二)元老院の許可なくして法案を民會に提出することを禁じた。この法律は紀元前二八七年のホルテンシウス法^(註)の廢止であり、元老院は共和政の初期に有せし完全なる立法の支配を與へられた。(三)平民の護民官たりしものは高官に就くを得ざること、なつた。此等の新法令は他の同一性質のものと共に、スッラはローマの政府を二百年前に還元せんとした。然し此等の制度は僅に十年間繼續せしに過ぎぬ。他の有用なる改革はその後も久しく續いた。(四)彼は會計吏の數を二十名に増加し、この職を以て元老院に入る正規の一段階とした。其のうち八名はローマに於て任務に服し、他の十二名は屬領の財政を管理した。(五)六名の大判官を八名に増した。その目的は刑事裁判所の判官を置くにあつた^(註)。(六)當時この種の裁判所は七個存し、各特殊の犯罪を擔任

してゐた。各裁判所は大判官と裁判長とし、多数の陪審員より構成されてゐた。ガイウス・グラッカスは唯武士のみ陪審員たり得るものと定めた(註三)。然しスッラはこの法律を廢し、陪審員はガイウス以前の如く元老院議員のみより成るものとした。十年後この法律は訂正された。(七)何人も大判官となる前に會計吏たらざるべからず、執政官たらんとするには大判官ならざるべからず、而して十年間は同一官職に就くことが出来ない。(八)大判官及び執政官は特別例外的場合に於てのみ軍隊を指揮した。彼等は全然文官の権能を有し、ルビコン以南の伊太利に限られた。(九)然し彼等は任期の盡きし後更に一年間、屬領に於て兵馬の權を有する前保安官 *Promagistrates* となつた。此等の法律は既に述べた例外と共に、永久に繼續せしローマの制度であつた。

スッラは此等の法規を完成せし後、私的生活に隱退した。其の後間もなく彼は死し、前代未聞の壯麗善美を盡せし儀式を以て埋葬された。而も彼の生存中に政府は早くも動搖を始めた。(註四)。

(註一) 第二三節 (註二) 第四四、四五節

(註三) 第四九節

(註四) この時代の約説は次期のそれと併せ第四九二節を見よ。

第三章 軍閥と共和政との衝突 (前七〇—前七二)

第一款 ポムペイ、キケロ及びケーザル (前七九—前七四)

第四三節 **ポムペイ** (前七〇に) スッラは軍隊を以て其の意思を國家に強制せし最初の人物であつた。

彼より以後政權は將軍の掌握するところとなつた。

軍隊に於て擡頭せる將軍のうち、グナエウス・ポムペイ *Gnaeus Pompey* はスッラの政策を繼承するに最も適せる人物であつた。彼は尙ほ青年士官たりし時民黨との内亂に参加し、軍人としての技倆を示しスッラをして『大將軍』なりと讃嘆せしめた。スッラの死後ポムペイは、更に政府に叛する民黨の鎮壓を助けて貴族派の闘士たることを立證した。西班牙は時に適當なる將軍を必要とした、元老院はスッラの計畫に従ひ、既に執政官たりしものを知事として、に派遣すべきであつた。然しこの資格を具備する適當なる人物を得る能はず、由つて會計吏たらざりしもポムペイに前執政官の地位を與へた。

民黨の領袖セルトリウス *Certhius* は内亂の際知事として西班牙に赴任し、スッラを僭奪者とし自らローマ政府の眞の代表者なりと宣言した。彼は恐らく被治者に同情を表し、彼等の利害に全力

を注ぎ、また彼等にラテン文明の眞利益を與ふるに腐心せし最初のローマ人であつた。彼は僅少の軍隊を以てボムペイ其の他のローマ軍を撃退した。若し彼が部將の一人に暗殺されなかつたなればボムペイと雖もこの戦争の結末をつけることが出来なかつたであらう(前)。

第四三節 スバルタカスの亂(前)

西班牙戦争の終局後久しからずしてローマは、本國に於て大危難に遭遇すること、なつた。新しき敵は劍客スバルタカス Spartacus であつた。劍客とは刀劍其の他の武器を以て、娛樂のために眞劍勝負をなすものを言ふ。此の種の見世物はエトルリアに端を發し葬式の際餘興として行はれ、後ローマに輸入せられた。最初は極めて稀に私人間に行はれしが、ボムペイの時代以前既に保安官等は、此の残忍酷薄なる競技を以て市民を慰安する習慣になつてゐた。カプアに劍客の養成所ありて、こゝに奴隸を劍客として訓練してゐた。トラキア生れの勇敢聰明なる軍人スバルタカスは、捕虜となり奴隸に賣られこの養成所に送られた。彼は同僚數名と共に看視人を倒しヴェスヴキウス山に遁亡し、奴隸・囚人・その他あらゆる階級の不平の徒を味方とし、終に十萬餘の軍隊を指揮するに至つた。彼は二年間大判官及び執政官の率ゆるローマ軍を撃退し、次いで大判官マーカス・リキニウス・クラッス Marcus Licinius Crassus は八軍團を以てこれを撃破し、スバルタカスを殺し其の軍隊を解散した。クラッスは西班牙より歸國せしボムペイより、僅かの援助を受けしはその結末をつける時だけであつた。

第四四節 執政官ボムペイ(前)・海賊の討平(前)

クラッスとボムペイとは共に熱心に執政官を望んだ。然るに元老院はボムペイが未だ會計吏、若くは大判官たりしことなきを理由として躊躇の色あるを見、彼は人民に援助を求めスッラの法律を廢止する約束をした。彼は紀元前七〇年執政官に選まれ護民官の權力を恢復し、スッラの元老院に與へし權力を奪つた。斯くして貴族政治は僅かに十年にして其の建設者スッラが『大將軍』と稱讚せし人物の手に顛覆された。然しそれは民主政治の勝利と言はんよりも寧ろ軍隊の勝利であつた。復活せる護民官は偉大なる軍隊指揮官の願使する儘に動いた。

過去數年間海賊は地中海を横行しつゝ、あつた。彼等は都市を奪掠し、ローマの貴族を捉へこれを抑留して身代金を要求し、或は穀物の供給を遮斷してローマを飢餓に瀕せしめた。元老院はこの損害を阻止する能はず、護民官ガビニウス Gabinius はボムペイに、三年間全地中海及び其の沿岸五十哩以内の陸地につき、ローマ帝國の全勢力圏内に互りて絶對の支配權を與へる提案をなし、ボムペイは多くの船艦と兵員とを擁し、且つ巨額の軍費を委託せらるゝことなつた。元老院は一人に斯る絶對の權力を賦與せし前例なきを理由とし、この提案に反對せしも人民は熱心にこれに賛成した軍容の完成後四十日を経ざるにボムペイは早くも海賊を掃討し、キリキアにある彼等の巢窟を破壊しこの地をローマの屬領とした。

第四五節 第二・第三ミトリダーテス戦争(前八三—八二) 紀元前八四年スッラのミトリダーテス(註)との講和後、東方に於けるスッラの指揮権を繼承せし者は、却つてポンツス國王を驅つて第二回の戦争を起さしめた。然し間もなくスッラの命により平和は恢復した。

ローマが西班牙に於てセルトリウスと交戦中ミトリダーテスは新に戦争の準備に没頭した。彼は有力なるアルメニア國王と同盟し、黒海北岸の蠻族の援助を得た。紀元前七四年ビシニア國王の歿するや其の領土をローマに獻じ、ローマは直ちにこの地を屬領とした。ポンツス王は兼てこの地を切望せし爲め、この事件は彼をしてローマに開戦せしむるに至つた。ミトリダーテスは有力なる陸海軍を指揮せしも、百戦老巧の將軍・執政官ルシウス・ルクルス Lucius Lucullus は五軍團を率ゐる、先づ敵軍をアジア及びビジニアの屬領より追ひ、次いでポンツスに侵入し、殆んど戦はずしてミトリダーテスを本國より追放した。ミトリダーテスは女婿アルメニア王チグラネス Tigranes と共に亡命した。

ルクルスは少數の軍隊を率ゐて大膽にもアルメニアに入り、チグラネスの優勢なる軍を破つた。彼は或はアルメニアを征服し得たであらうが、然し部下の軍隊は彼に叛き歸國の已むなきに至つた。ミトリダーテスはポンツスに歸り、ルクルスは占領せし領土を恢復した(前)。

(註) 第四六節

第四七節 東方に於けるボムベイ(前六) 若しローマ人がルクルスを十分支持したならば、彼は疑もなくミトリダーテスを直ちに討滅したであらう。然し多數の人民はこの大敵を征服し得るはボムベイのみと思つてゐた。されば護民官マニリウス Manilius はボムベイに對し、彼が既に得たる權力の上に、更に東洋に於ける軍隊の指揮権を與ふる法律を通過した。彼は容易にミトリダーテスをポンツスより驅逐し、領土の大部分を新屬領ビシニアに併合した。其の後國王は彼自身の希望により、ガリア人の一傭兵に殺された。

ボムベイは次いでアルメニアに入り、チグラネスの降伏を容れた。後者は既にシリア及び其の附近の諸國を征服せしが、今や本國以外的一切を抛棄せねばならなかつた。紀元前六四年ボムベイはシリアに入りこれを屬領とした。これ實にセレウカス家帝國の終熄である。猶太人は降伏を欲せず依つて彼はエレスレムを包圍し、三個月後住民の安息日に乘じてこれを占領した。彼は高僧以外には入る能はざる神殿の『聖の聖なる場所』に闖入した。然し彼は神殿を奪掠することなく、他面土人の宗教に尊敬を拂つた。エレスレムはローマに好意を有する祭司の下に自治を繼續することとなつた。

ボムベイは東方經營に慎重の注意を拂つた。既に述べし新屬領はキリキア、ビシニア及びシリアである。クリートも亦屬領となり、小亞細亞及び其の附近には若干の小國が残された。此等の統治

者は名は同盟國民と稱するも實はローマの臣下であつた。ボムペイは更にユウフラテス河の彼方にある大バルチア帝國とも親交條約を締結した。此等の經營は實に稱讚に價するものがある。斯くしてローマは、其の從屬同盟國と屬領とを率ゐる、今や全地中海の沿岸を掩有するに至つた。

第四七節 カチリナの陰謀^(前)

ボムペイの不在中重大なる事件がローマに起つた。紀元前六三年

年キケロ Cicero は執政官となつた。彼は自治市 Municipium ^(註一)に生れ中産階級に屬せしも、其の雄辯と行政の才幹とを以てローマ最高の地位に就いた。彼の執政官たりし時、政府顛覆の陰謀が相當の期間に互り大規模に計畫されて居た。首領ルシウス・カチリナ Lucius Catiline は貴族の出身にして、非凡なる才能を有し而も惡徳無賴のものであつた。彼の周圍には伊太利の不良分子を集めそのうちには内亂の再起と殺戮とを希ふもの、負債者・賭博者・刺客等があつた。陰謀の首領はローマにあり、其の與黨は半島の各所に散在して居た。此等の無政府主義者の陰謀は既に完成し、將に保安官と貴族とを殺戮して政府を彼等の手に乗取らんとせし時、炯眼なる執政官キケロは早くもこれを看破し、カチリナを元老院に彈劾した。陰謀の首領は遁れてエトルリアに準備せし軍隊に投ぜしが、其の後間もなく敗死した。キケロはカチリナの殘黨數名をローマに囚へた。彼等は元老院より有罪の宣告を受け、執政官はこれを死刑に處した^(註二)。國家の危難を救済するに功ありしキケロは、一時ローマの最も有名なる人物となつた。人民は彼

を遇するに國父の禮を以てし、彼は「新人」^(註三)なりしも元老院議員の領袖と仰がれた。彼は共和政治に強烈なる執着心を有せしも、反對の勢力は更にまた壓倒的に強硬であつた。いかに偉大なる政治家と雖も、時勢の力は最早彼等を時代後れの人物とした。今や將軍の時代である。軍人のみが勢力を有し、政治家は其の傀儡たるに過ぎぬ。さればキケロはボムペイを共和政治の擁護に當らしめんとしたが、それは無益の業であつた。

(註一) 第四五節。自治市の住民はローマ市民であつたけれども、ローマの住民は通常これを劣等視してゐた。

(註二) キケロは元老院より陰謀者を處断する絶對權を受けた(第四九節註二)。然し彼は元老院に處罰の責任を轉嫁することを欲した。而も民黨は元老院が斯る場合に法廷たるべき權利を否認し、キケロは審理を行はずして彼等を死刑に處せりと斷定した。

(註三) 第三三節

第四八節 第一三頭政治^(前)

ローマ市民はボムペイの東方より歸り來るを、不安の念を以て眺めてゐた。貴族も民黨も彼を必要としつゝ、尙ほ彼がスッラの例に倣ひ軍隊の力を以て政府を顛覆し、自ら大都統の地位に就くを怖れた。然し彼は自己の勢力のみを以て一切の名譽と權力とを贏ち得るものと信じ、其の軍隊を解散し一個の市民としてローマに歸つた。而も彼は甚しく失望を感じた。

常に彼に對し滿腹の信任を置かざる元老院は、彼の東方經營を承認することを躊躇した。偉大なる將軍はマリウスの如く政治的に孤獨なる自己を發見した。

而も偶然有名なる二人の政治家が彼の援助を必要とした。其の一人はクラススである。彼は百萬の富を擁し且つ勢力を有してゐた。他の一人はガイウス・ユリウス・ケーザル Gaius Julius Caesar であつた。青年ケーザルは貴族なりしも民黨の首領であつた。彼はクラススと共にボムペイの如く軍隊の指揮官たることを希望した。ボムペイの元老院より顧みられざるを見て、彼等は共通の利害の爲めに共同の行動を取ることを彼に提議した。此等三者の結末は非公式ながら第一三頭政治と稱せられ、ボムペイは其の軍事上の名聲を、クラススは其の財力を、而してケーザルは其の人望と明晰なる頭腦とをもつて合流した。彼等の協定によりケーザルは紀元前五九年に執政官となり、其の代りにボムペイの東方經營を承認した。三頭政治の傀儡として、或は少くとも其の庇護を受けて護民官クロヂウス Clodius は、キケロ追放の命令を發した。其の理由は彼が執政官たりし時、審理を行はずして市民を死刑に處せし故である(註)。而も人民は間もなく彼を召喚し、其の名譽を恢復した。

(註) 第四七節註三

第四七節註

ケーザルのガリア知事(前註)

執政官の任期を終るや、ケーザルは紀元前五九年に

ガリア・チザルピナ、ナルボネンシス、イリリクムを統治する命を受け、久しく希望せし地位を占め國家至上の權力を左右する軍隊を統帥することが出来た。彼の任期の終る以前に三頭政治家は其の盟約を新にした。ケーザルは更に五年間ガリアを統治することとなり、ボムペイとクラススとは紀元前五五年に執政官となり、更に其の後は帝國最善の屬領の統治に任することとなつた。斯くして彼等はローマ世界を分割した。

第四〇節 **ガリアの状態** ガリアの南岸にあるローマの屬領ナルボネンシスと、其の北部に住せる獨立自由のガリア人に就ては既にこれを述べた(註)。ガリアは一個の肥沃なる國土にして、人口稠密、文明は多く海岸の希臘都市マシリア(註)を経て入つた。彼等は文化に於てローマ人に劣るも主に農業によつて生活を營み、多くの堅固なる要害都市を有してゐた。其の主なる地方的區劃は南方のアキタニア人 Aquitanians 即ちケルト種族を僅に交へたイベリア(註)民族と、中央の純粹なるケルト種族と、北方のゲルマニ種族とケルト種族との混交せるベルギー人とであつた。アキタニア人は最も高度の文明を有し、ベルギー人は最も野蠻且つ好戰的であつた。此等の三部落は更に獨立せる若干の部族より成つてゐた。

ライン河の東部には野蠻半牧のゲルマニ人が居た。ローマと此等北方民族との關係は、尙ほマリウスが彼等を撃退せし當時の如き危機が存してゐた。酋長アリオヴキスツス Ariovistus の率ゐし有

力なるゲルマニ部落は、ラインを過ぎガリア人の土地を掠めた。この運動はゲルマニ移住の端緒であるに過ぎぬ。されば若しこれを阻止し得ざりしならば、ガリアは動亂の渦中に投じ、ゲルマニとケルトとは共にナルボネンシスに闖入し、更に伊太利をも侵したであらう。尙ほローマに取つて一層直接の脅威となりしは、アルプスのケルト種族なるヘルヴェチア人 Helvetians であつた。彼等は山間の故國を出で南ガリアの廣き沃野に向つた。

(註一) 第四三節

(註二) 第三〇節。希臘名はマツサリア Massalia ラテン語にはマシリア Massilia 近代のマルセイユ Marseille Mar-seilles である。

(註三) 西班牙(古代の名稱はイベリア)の土人と同種族なり。

第四節 ガリア征討(前五)

當時殆んど軍隊指揮の經驗を有せざりしケーザルは、斯くして多くの困難と危険とに直面した。然し彼は獨自の方法を以て容易に一切に打克つを得、偉大なる戦術家の名聲を博した。彼は機敏に各所に散在せる軍隊を集め、新軍團を編成し、新兵には老兵等の勇氣と熱誠とを鼓吹した。彼は直ちにヘルヴェチア人を敗りて多大の損害を與へ、殘兵を驅逐して其の本國に追うた。同年の夏彼はゲルマニ人に對して大勝利を得、彼等をして再びライン河を渡り歸國するの已むなきに至らしめた。翌年ベルギー人の彼に迫り來るを見、直ちにこれを征服する決心を

なし、その國土に侵入し殆んど抵抗を受けず、終に最も劇野死の勇氣を以て、唯只管勇氣の旺盛に至つた。ベルギー人はローマ商人の齎す葡萄酒に耽らず他の奢侈品に溺れず、唯只管勇氣の旺盛にして戦闘力の潑刺たることを希望してゐた。彼等はケーザルの接近するを見て、急に激しく殺倒し來つた。彼は戦列を整へ命令を下す暇なき程であつた。兵士は各自其の判斷に應じて戦つた。然し軍團兵の沈着と勇氣と、指揮官の剛膽とは危機を脱して間一髪に勝利を得、ネルヴェキ種族の生還者は極めて少數であつた。その結果北部ガリアは全く屈服し、翌年ケーザルは西海岸に占據せるヴェネチ Veneti 人を攻撃した。海上民族たる彼等は、其の都市を四面潮流の保護ある岬角に建設し、ローマの船舶は淺瀬のため接近し難く、彼等は不恰好な平底船に革帆を張り海に浮んでゐた。さればケーザルは其の輕快なる小船を以て、彼等の海軍と公海に於て戦ふまでは策の出づるを知らなかつた。ローマ人は咄嗟に機智を働かせ、長竿に鎌を附して敵の船具を斷ち、其の行動を不自由ならしめて、容易に勝利を得、ヴェネチ人は同盟國と共に降伏した。

ケーザルは殘任期間に更にゲルマニ軍を驅逐し、其の侵略を阻止するため二回彼等の國土に攻め入つた。ケーザルはケルト種族たるブリトン人がガリアの同族の急を聞き來援せしを見て、彼等の本國を攻撃して敵の後援を斷つ必要を發見し、紀元前五五年英佛海峡を横斷してブリテンに上陸し土人の軍隊を容易に撃破することを得た。然し彼はその小軍隊を以て、これ以上には何事をも爲し

得なかつた。翌年彼は更に大軍を以てこの地に上陸し、深く内地に入り各種族の降伏を容れた。然しその国土は瘦せ奪掠物に乏しく、ブリトン人は質を出して朝貢を約し、ケーザルは此等の結果に満足して島國を去つた。彼の二回の侵入は將來のブリテン征服の準備となつた。

ガリア征討を完成するには更に數年を必要とし、又た新附民族の間に起りし叛亂をも鎮めねばならなかつた。されば紀元前五〇年までガリアの平和を見るに至らなかつた。

第四三節 ガリア經營とローマ化 ケーザルのガリア征服は全土に荒廢と死とを與へた。然し結局彼の公正にして人道的なる裁決は人民をして悦服忠誠を誓はしめた。全ガリアは最初一人の知事の下に統轄せられたが、アウグスツスの時四個の屬領に分割された。三個の新屬領とは南部のアクタニア、中部のルグズネンシス Lugdunensis (リオン Lyons) 及び北部のベルギカ Belgica であつた。ガリア人は相當の自治と其の民族的制度とを保持し、勇敢なるものはローマの軍隊に入り、住民は牧畜と農業とに専ら従事し、金銀鑛の開發を見た。ローマ人の植民地は新屬領には殆んど設置されず、唯伊太利人は群をなして貿易のためにこゝに殺倒し、土人は學校を開き、ラテン語とラテン文學とを熱心に研究し、その結果數代の後には純粹のラテン語はローマよりも却つてガリアに行はれた。ローマ化の進展は、ライン河に沿うてゲルマン人に對する國境防禦のために設けられし屯田兵の連絡によつて助けられた。従つて文明はこの防禦線に沿ひ、その國の南部に深き根柢を有す。

るに至りしは自然のことである。

ガリアはローマに取つて兵士の徵募・食糧の供給及び有力なる租税の財源となり、また野蠻のゲルマン人に對しラインの國境を保障した。ガリア征服は新政策の發生を見た——即ち北西及び中部歐羅巴をローマ文明に對して開放する事となつた。

第四三節 クラススの最後(前)・ポムペイとケーザルの衝突 當時クラススは屬領シリアを統治して居た。彼は輕率にもパルチア人を怒らし、彼等と戦ひ終に敗死した。ポムペイは命を受けしも西班牙及び阿弗利加の屬領に赴任せず、ローマ附近に留まり元老院の秩序維持を助けた。貴族は今や

民黨の代表者たるガリア知事ケーザルの勢力に對抗して彼に保護を求めた。

彼等二人は既に親友でなかつた。次いで紀元前四九年元老院はケーザルに指揮權の拋棄を命じ、これを拒むに於ては公敵と宣言せらるることとなつた。護民官マーク・アントニーとクキンツス・カシウスとは此の命令を拒否した、然るに彼等は甚しく虐待され、終に身を以てケーザルの陣營に遁れた。護民官虐待はケーザルに聖職保護の口實を與へ、ローマに軍隊を入れることとなつた(註)。

(註) 第三三節

第四四節 第二回の内亂(前四九) 傳ふるところによれば、ケーザルは屬領と伊太利との境界をなすルビコン河畔に於て、若し侵入者として伊太利に入らば、自ら國敵たる結果を招くべく、盟友とそ

の方法を議し躊躇の色があつた。やがて彼は『骸子は投げられたり』と叫び、ルビコン河に至り喇叭を吹奏して軍隊を集め我に続けと叫んだといふ。この物語は事實でないにしても、ルビコン河の渡渉はケーザルの生涯にも、又たローマ國家の歴史にも一個の危機であつた。法律に反して伊太利に軍隊を入れることそれ自身が既に、共和政府に對する宣戰であつた。

ボムベイは執政官及び多くの元老院議員と共に東方に退き、彼の偉大なる勢力により、多くの後援者と潤澤なる戦費とを豫期した。ケーザルは間もなく伊太利及び西班牙の支配權を總攬し、反對黨に對して寛容なりしと、不幸なる債務者の救助並びに財産保護の處置すべて宜しきを得、平和を好む市民の間に深き同情を博し、更にボムベイの與黨をして自己の誤れるを悟らしめた。ローマに政府を設けたる後ケーザルは、海を渡つて希臘に赴き敵とテッサリーのファルサルス Pharsalus に會戦した。表面ボムベイは元老院の代表者たる如きも、當面の實際問題は兩雄のうち何れがローマ世界を支配すべきやを解決するにあつた。ボムベイの軍は數に於て優つた。然しケーザルの精神的背景は西部歐羅巴より伴ひ來りし軍隊の卓越せる男性的氣質と呼應して終に勝利の榮冠を彼に與へた。ボムベイは埃及に遁れ、ケーザルこれを追うてアレキサンドリアに至りし時、彼の味方と自稱するものボムベイの首級を彼の許に持參した。それは彼に取つて喜ぶべき贈物ではなかつた。埃及國王クレミーは姉クレオパトラ Cleopatra の位を廢せしが、ケーザルは美貌の女王に味方し、彼女を唯一の君主となし、次いでシリア・小亞細亞に赴き屬領を安定し、一戰してミトリダテスの後嗣ファルナケス Pharnaces を粉碎し、危險なる敵に最後の止めを刺した。この勝利の後彼はローマに簡明なる報告を送つた "Veni, vidi, vici" (我來たり、我見たり、我克つり)。一年後彼は元老院の軍を阿弗利加のタプスス Thapsus に敗つた。この地方の貴族軍を指揮せし將軍の一人はケートーであつた——正直・忠實にして且つ頑迷、狹量なること曾祖父に當る有名な検査官に似てゐた(註)。彼は共和政治に失望して自殺した。其の後間もなく西班牙のムンダ Munda に於ても勝利を得、ケーザルは最後の反對を一掃した(註前)。

(註) 第四九節

第四五節 ローマ世界の狀態

ケーザル時代のローマ帝國は、ユウフラテスより大西洋に至り、地中海に境するすべての國土を掩有し、そのうちに多數の國家を網羅してゐた。此等諸國の地位は完全にローマに服屬せるものより、あらゆる程度の從屬的同盟國に及び、その領土には多くの國民と言語と各種各様の文明とがあつた。ローマ帝國は結合力の鞏からざる國家の群團にて、共通の利害若くは同情によりて結束せるにあらず、専らローマの強大なる權力の下に平和を欲する集群に過ぎぬ。吾人はこれを帝國と稱するも、而も現代の帝國の如く一貫せる組織を有するものではない。統治國家は共和國であつた。吾人はこれを帝國の首腦たる故を以て帝國的共和國と稱する。理論は

兎も角、實際共和政府の首脳は元老院であつた。元老院は帝國を創建し、これを保護し且つ統治せんとしつゝあつた。而もケーザルがボムペイに勝利を得るまでの一世紀の歴史を見るに、元老院は帝國を外敵より保護し、叛亂を鎮定し又た臣民を満足せしむる能力を有しなかつた。事實元老院は全體としても議員個人としても、多くの善良なる企圖を有せるに拘はらず、其の政治は本質的に奪掠と壓制とを容易ならしむる組織であつた。従つて其の結果帝國は既に衰微の徴候を示してゐた。改革者の目的は、ローマ世界に一層善良なる組織を與へ、帝國を内外の敵より一層完全に保護し、弊政を矯正し、最後にはすべての住民が、中央並びに地方の政治に參與し得る制度を設けることであらねばならぬ。然らばケーザルは此等の方面に如何なる事業を成就せしやを検討する必要がある。

第四節 ケーザルの統治と改革 (前四)

彼は同時に執政官及び大都統の職に就き、最初は任期を延長し最後に至りて終身其の職に留ることとなり、Pontifex maximus として國教の首長となつた。此等の官職は稱號としては兎も角實際に彼を國王たらしめた。彼は又た元帥 Imperator の稱號を受けた。皇帝の語はこれに發する。ケーザルは明かにその權力を世襲的に傳ふる希望を抱いてゐた。然し彼は近親に後嗣を有せざりし故、大甥オクタヴィウス Octavius なる秀才の青年を養つて嗣子とした。

ケーザルは民會に僅小の權力を與へ、元老院は唯諮詢機關とした。スタッフは元老院議員の勢を二倍にしたが、ケーザルは更に九百名に増し、武士のみならず多くの下級市民と半文明のガリア人若干を加へた。恐らく彼はやがてこれを全帝國の代表機關とする考へであつたらう。

曩に述べし屬領に於ける貴族統治の弊害は其の絶頂に達してゐた(註一)。ケーザルは徵稅契約請負制度を廢し、資本家が從屬國家より掠奪するを防止した。彼は手腕力量あり正直なる知事を任命し、嚴重に統治の責に任せしめた。知事の下に軍團の指揮に任せし士官と收稅吏とは、曾て彼の侍僕たり解放者(註二)たりしを以て、彼は至るところにその意思が實行せられ居るや否やを知るを得た『ローマ人民の土地』と稱せられし屬領は、耕作され改善され最早や掠奪の憂はなくなつた。彼はガリア人に市民權を與へた。彼の希望は出来るだけ早くすべての屬領民をローマ市民とするにあつた。同時に彼はローマ及び伊太利の状態を著しく改善した。

(註一) 第三章第四節

(註二) 第二九節

第四七節 ケーザルの死 (前四)

貴族はケーザルを猜み、世界に虐政を行ふ彼等の特權を恢復せんと希望した。彼等は唯神々のみ有する名譽を彼に與へつゝ、彼の暗殺の計畫に着手した。この陰謀は『瘦せ且つ飢ゑたる』カシウスと、學者にして非實際的の熱心なる共和主義者マーカス・ブルータス

とを首領とし、参加せしもの總數六十名あつた。彼等は元老院に於て請願に託して彼の周圍に集まり、劔を揮つて彼に迫つた。彼は二十三傷を負うて仆れ、元老院は解散した。ケーザルの同僚執政官たりしマーク・アントニーは、葬儀演説を試み彼の遺言書を讀んだ。これによつてケーザルの市民に對する意思は明瞭となり、彼等は暗殺者の行動に激昂した。

第四八節 ケーザルの批判 恐らくハンニバルを除きケーザルは、當時の世界が生みし最大の軍事的天才であつた。彼は又た簡素なる文章の著者であり明快にして力ある雄辯家であり、絶えず有益なる營造物の建設者であつた。彼は多方面の性格と無盡藏の才幹とを具備してゐた。彼は被征服者に對して溫良であり、政敵と雖も一度武器を捨つれば百年の親友たり又た恩人であつた。彼は兵馬控惚の間の短き平和の期間に、將軍として戰場に發揮せし神謀鬼略を、爲政家として發揮した。彼は最大の弊害を是正し且つ屬領知事の責任を保障する手段を講じ、以て其の臣民の將來に於ける安寧を保持したと固く信じてゐた。斯くして帝國の住民は彼の統治によつて一層幸福となつた。而も彼の政策を繼續するには、永く其の職にある有力なる爲政家を必要とした。假りに彼の專制王政樹立の計畫が成功したとしても、それは改革問題の部分的解決に止まつたに過ぎぬ。專制政治の弊害はこれを唯東洋諸國民に、又たローマ帝國それ自身に見れば足りる。ローマ帝國に於てはケーザルの死後三世紀にして專制政治の特質を備うるに至つた。ケーザルも又た他のローマ政治家も共に

帝國の住民は族父專制主義の制度と歩調を合せ、以て自己の利益を擁護し得べしとの思想を抱きし如く思はれる。市民權を屬領民に與へ、彼等の代表者を元老院に迎ふることは甚だ利益あることであつたかも知れぬ、然しこの種の制度と雖も、帝國最後の衰退を如何ともする能はざりしに相違ない。若干年長命なりしとするも、ケーザルは何を成就せしやは不明である。兎まれ彼の死は一個の大なる政治的錯誤であつた、それは世界を再び荒涼たる戦争の渦中に投じた。この争闘に於て當面の問題は、いかなる政體を採用すべきではなく、將軍のうち何人がケーザルの權力を繼承すべきかであつた(註)。

(註) ケーザルの性格に關してはボツフォード著ローマ史第八章を見よ、Botsford, Story of Rome, ch. viii.

第二款 繼承の戦(前四)

第四八節 第三回内亂の開始(前四) ケーザルの後繼者 昂奮せる民衆を怖れて陰謀の主唱者即ち自

稱『解放者』Liberators等はローマを遁れた。この暗殺を是認し而もこれに加盟せざりしキケロは、希臘に向ひしも途中暴風に遭ひて吹き戻され、再びローマに歸りて元老院を率ゐ、進んで專制君主の行動に出でし執政官マーク・アントニーに反對し、數個月間雄辯を揮つて彼を攻撃した、それは尙ほマセドンのフェリッパに對するデモステネスの雄辯に似たる故を以て『フェリッパクス』と知られて居る(註)。然し雄辯は最早や世界を動かす力ではなくなつた。今後問題の解決は武力を待つこと

となつた。

オクタヴキウス Octavius はイリリウムに於て研學中、大叔父の訃報に接した。彼は直ちに伊太利に向つて出帆し、ガイウス・ユリウス・ケーザル・オクタヴキアヌス Gaius Julius Caesar Octavianus と稱して單身ローマの敵中に投じた。然し彼は間もなく味方を得た。彼は人民に對し最後の統治者ケーザルの遺せし一切を與ふる約束をなし、容易に彼等の心を捉へ一時元老院に加擔してアントニーに對抗した。彼の飾りなき單純なる風貌に欺かれてキクロは、青年オクタヴキアヌスを共和政治の味方なりと宣言した。この十九歳の青年は事實ある主義に對して熱情を有してゐたのではない、彼は沈着狡猾なる點に於ては首都政界の古兵に優つてゐた。

(註) 第三七節。

第四〇節 第二三頭政治(前)・フキリツピの戰(前)

オクタヴキアヌスは其の召募せし軍兵を以てアントニーに勝利を得た。元老院は地位の安定せるを見て彼を捨てた。彼は直ちに政敵アントニー及びケーザルの主馬頭にして依然重要な軍隊を指揮せしレピズス Lepidus と盟約を締結した。彼等は自ら『國家再造の三頭政治』を組織し、五年間意の儘にすべての保安官を左右し、法律の效力を有する命令を發し得る權威ある地位に就いた。彼等はローマに其の軍隊を入れ憎むべきスッラの公權剝奪を再現した(註)。彼等は各々其の親友或は其の親戚すら、他の憎惡の犠牲に供した。ア

ントニーのために犠牲となりしもの、うちには古代世界最後の雄辯家キクロがあつた。

アントニーとオクタヴキアヌスとは軍隊を率ゐてマケドニアに至り、こゝにカシウス及びブルータスの集めし共和主義者の軍隊と會戰した。フキリツピ Philippi 附近に行はれし二回の戰爭は、勝敗何れとも決し兼ねしが、第一回戰の後カシウスは失望の餘り自殺し、ブルータスは次の戰ひに敗れ、其の僚友の例に倣つた共和主義の學者は武斷政治の下に長らふことは出来なかつた。

(註) 第四一節。シエクスピアー『ジュリアス・シーザー』第四幕第一場を參照。

第四一節 アントニーとオクタヴアヌスとの衝突(前)・共和政治の最後

三頭政治は更に五年間その權威を繼續し、無能なるレピズスの脱退後残りの二名にて帝國を二分し、アントニーは東方を支配し、オクタヴキアヌスは西方を統治した。締盟を鞏固にするためケーザルの後嗣は、其の姉オクタヴキアをアントニーに嫁せしめた。然し紛争は次いで起つた。聰明なる雄辯家・外交家にして將軍の器略あるも、アントニーは奢侈惡徳を好み、妻を疎んじ國家の利害を無視し、クレオパトラと不義の逸樂に溺惑した。伊太利人は彼がクレオパトラを王妃とし、アレキサンドリアを首府として東方帝國の專制君主たらんと企圖せるものと考へた。されば彼等は心よりオクタヴキアヌスに隨從して國敵膺懲の軍に従ひ、兩艦隊は希臘の西岸にあるアクチウム Actium の沖に會戰した(註)。有爲の將軍アグリッパ Agrippa はオクタヴキアヌスの艦隊を率ゐ、アントニー・クレオパトラの聯合

艦隊に對抗した。戦争の開始後間もなく痴情に溺れし兩名は戦場を去り、艦隊は自由の行動を取りしが、終にアグリッパのために撃破された。戦後アントニーの陸軍は降伏し、彼はクレオパトラとアレキサンドリアに於て自殺し、オクタヴィアヌスは遂に帝國の支配者となつた。

アクチウムの戦は古代史の最も重要な事件の一であつた。この一戦の結果歐羅巴文明は不義なる東洋の勢力より救はれ、ケーザル死後の長き無政府状態は終りを告げ、かくして帝國の運命は一人の器量ある政治家の掌中に委ねられた。

第五節 共和政より帝政に至る經過約説

(一)世界征服の結果少數のローマ人は多大の権力と富とを得、同時に多數の市民は貧困と不幸とに陥つた。(二)此等の富者を代表する元老院は腐敗し、壓制を極め又た微力となり、ローマの秩序を維持し、屬領を保護する能はざるに至つた。(三)チベリウス・グラツカスは改革に着手せしも、元老院は暴力を以てこれを阻止し、ガイウス・グラツカスは都市の暴民を以て革命軍を組織し、これによつて元老院の權威を無視した。(四)其の後間もなくマリウスによつて改革せられし軍隊は、野心家の眼には元老院を顛覆し、自ら政府の首脳たるには最も信頼すべき有力なる武器に映じた。(五)スツラは初めて軍隊を政治上の目的に利用した。(六)ポンペイの海賊討伐とミトリダテス戦争とは、唯一人の支配がいかに利益多きかをローマ世界に知らしめた。(七)ケーザルの政治は實際王政であつた。然し彼は餘りに有力なる敵を有し、その事業は永續しなかつた。(八)彼の死後元老院は其の權威を恢復する能はず、次いで起りし内亂はケーザルの後嗣オクタヴィアヌスを帝國の支配者たることに決定した。

第三款 文 化

第四節 共和時代文學の隆盛期

(前八三)
(一三)

此の時代の最も著名なる文學者の一人はケーザルであつた。彼の『ガリア戦争記』

Commentaries on the Gallic War 及び『内亂記』 On the Civil War はその戦争物語にして、模範的の歴史的著作である——平明・率直・典雅・何等の修飾的外觀を

有せぬ。これ等の物語は著者に有利なる方面を示すと共に、ケーザルも亦書中ガリア戦争中の行動を辯明せんとする意思の存せしことも疑なき事實である。然し此等の事情はこの物語が信用に價せずと言ふ意味ではない。殊に彼は自己の功績を謙遜に語り、他人の過誤は寛大に叙し、却つて其の功勳を十分に賞揚してゐる。この點は此の著述を以て眞實の叙述と推稱し得る。この時代の末期にサルスト Sallust は『カチリナ陰謀志』 On the Conspiracy of Catiline 及び『ユグルタ戦争記』 On the Jugurthine War の小篇を著した。彼は事實の叙述と共に、公平に社會の特色、其の由來する動機の解剖を試みた。彼の著述は其の論述せる題目の貴重なる資料である。以上はこの時代の主なる歴史家である。コルネリウス・ネボス Cornelius Nepos は『名士傳』 On Eminent Men を著し、

有名なるローマ人と外國人とを擧げて居る。今日尙ほ残存せる彼の著述は多く希臘將軍の傳記である。これによつて彼は信賴すべからざる著者なることが分る。

この時代の第一流の雄辯家——あらゆる時代を通じて最も有名なるもの——はキケロであつた。彼の出生地はマリウスと同じくラチウムの山間にある自治市アルピヌム Arpinum であつた。然し彼はマリウスの經驗せし如き嚴格なる田舎の訓練を受けなかつた。両親は彼の少年時代にローマに住居を轉じ、其の子女には出来るだけ最善の教育を與へた。キケロは家庭に於て又た私立學校に於て初期の教育を受け、青年時代には法律を研究し、當時の有名なる雄辯家の辯論を熱心傾聴し、希臘・ラテンの修辭學を修め、最後にアテネ及びロード島に赴き、最善の教師に就き雄辯家としての準備を完成した。ローマに歸りて後彼は公生涯に入り、其の才幹によつて官吏生活の階段を昇つた(註一)。狹量なる貴族社會は常に排他的であつたが、彼のみは貴族も彼等と同様に承認せねばならなかつた。彼の著述を通じて吾人は、他のローマ人よりも彼の性格を更によく知り得る。彼自身の言葉によれば彼は虚飾家であり、政治に就ては意見の動搖もあつたと言ふ。然し此等の點に於て彼は同輩より特に庸劣なりし譯ではない。彼の趣味は文學的・知的であつた。そして彼は多少の弱點ありしに拘はらず、大問題に際して常に正義と信ずるところに味方した。

彼の『雄辯集』Orations は他の政治家論客のそれと等しく、史料に利用せんとするには、これが内容に注意選擇して決定せねばならぬ。『雄辯集』よりも一層信頼すべきは、彼の友人に宛てた『書翰集』Letters である。彼はこれに事件の推移を明瞭に述べてゐる。實際此等の書翰はこの時代の社會的・道徳的・政治的狀態の知識を完全明瞭に提示してゐる。彼の多くの哲學に關する著述は、ラテン語を以て希臘思想を表明したものである。彼の健全なる性格と讀書子の道徳的標準を向上せんとする希望とは、單に實用的・物質的理想よりも、一層高尚なる哲學的理想を常に把握せしことによつて明かである。彼は『共和國』Republie に於て、その時代のローマ帝國の如く國家の内亂紛糾に際しては、其の指導的市民——プリンセプス Princeps の慈父的注意の必要を暗示してゐる。プリンセプスの職務は國家各種の官職と權力とを夫々協調せしめ、一切を擧げて有效なる運用を期するにある。アウグスツスの政治はやがて述ぶる如く(註二)、キケロの思想を具象化せしものなることは顯著なる事實である。然しキケロの偉大なるは主として彼が驚くべき天才的文學者なりし事實に存する。『彼は十六世紀間文明世界の用語たりし言語を創造し、この言語を用ひて千九百年間代ることなき文體を作つた……彼の時代以前のラテンの散文は、廣き見地より見て、單に古代の方言の一たるに過ぎぬ。彼がこれに手を染めて以來世界語となり、決定的に希臘語其の他一切の國語に代つて文明人の表現する文體となつた』(註三)。

この時代の詩人ルクレチウス Lucretius は韻文にて『世界の自然に就つ』On the Nature of the

Worldを著し、科學によつて死と神々との恐怖より全く解脱せんと試みた——人類を迷信より解放せんと試みたる天才の著述である。同時代のカツルス Catullus は愛と生活の美しき叙情詩と悲歌とを書き、又た激越なる諷詩を物した。全體として此の時代の詩歌は次の時代程に有名なるものはない。

(註一) 第四六節。 (註二) 第四六節

(註三) マツケイル『ラテン文學史』六二頁 Mackail, Latin Literature, 62.

第四四節 教育 少年は先づ小學校に入り、こゝに讀書算術の基本を學ぶ。その課程を終へたる後、希臘ラテン文學を教授するグラムマチカス Grammaticus の管理する高等の學校に進む。ラテン語の讀本中にはネーヴキウス及びエンニウスの詩(註一)、プラウツス Plautus の喜劇、ホーマーのラテン譯がある。歴史、雄辯、十二鏢法(註二)をも又た研究する。女學校もまた存在せしもこれは充分判然してゐない。富者は屢々其の子女を家庭に於て、希臘人の奴隸若くは家庭教師に就て教育せしこと前代に異ならぬ。文學の課程を終へたる後公生活に入らんとする青年は、修辭學者に就て雄辯術の理論並びに科學及び哲學の研究が行はれる。吾人は既に因果律の研究が無視せられ、科學と歴史の深き眞理が皮相なる知識に代る傾向の端緒を認識する。實用に偏して高遠なる精神的才能は顧みられず、萎靡するが儘に放任された。富豪の子女は兩親の愛に浴せず、奴隸教師に甘やかされた。

疑もなく多くの兩親は其の子女に強き道德的性格の發達を希望した。然し青年の環境は最早かのローマを偉大ならしめし英雄的美徳を養成するに適はしきものではなかつた。

(註一) 第四六節註一。 (註二) 第三七節。

第四五節 公共營造物——藝術(前三一)に至る

ローマの美術も文學と等しく希臘の影響を受けたけれども、ローマ人は唯單に模倣を事とせず、他より習得せしところを必要に應じて獨自の方法に應用した。彼等の作品は實用に次いで莊重と耐久力とに於て最も有名である。此等も亦ローマ人の性格の特質であつた。然し彼等が其の理想を成就し得たるは、ローマ附近に優秀なる建築材料を有したると彼等が圓形アーチを利用したるとによる。彼等は此の建築様式を下水道・橋梁に用ひ、必要なる改良を加へて神殿の圓天井に應用した。現存せるクロアカ・マキシマ(註)のアーチ形圓蓋は、共和時代の後期に屬する。ローマに於ける比較的新しき建築様式はバシリカ Basilica であつた。大なる長方形の建築物にして、廻廊を繞らしたる中央の大ホールより成つてゐた。廻廊は圓柱若くは角柱の上に建てられ、設計を希臘より採り、近代に至るまで基督教會堂の一様式として存続した。ローマに於ける最初のバシリカは老ケーターの建設せしものである。ケーザルはフォラムの南側に此の種の大建築を作り、彼の名を取つてバシリカ・ユリア Basilica Julia と命名し、今日依然として其の基礎を残すローマのバシリカは商館及び銀行、並びに法廷に使用せられた。

巨富を擁せし家族は個々の家族の成員を國家よりも更に高く評價した。その思想は壯大なる墓所建築に現れてゐる。市外數哩のあひだ此等大家族の墳墓の遺跡はアピウス街道の兩側に並列してゐる。ケーザルの時代に建てられしカエキリア・メテラ *Caecilia Metella* の墓所は最も壯大なるものである。

吾人はローマの文明及び知識の進歩を理解すると共に、殆んど他のすべての點に於てローマは急に衰退しつゝ、ありりし事實を看過してはならぬ。ローマの嘗て健全なりし道德は惡徳に代つた。共和時代の自由は既に久しく單なる形影に過ぎぬ。帝國は内部の無秩序と疆外の野蠻人によつて脅かされてゐた。

(註) 第三六節。

第三章 プリンセプスの政治・ユリウス

家の君主(紀元前三—紀元四)

第五節 アウグスツスの政治 アクチウムの戦はオクタヴキアヌスをローマ世界の主人公とした(註)。レピヅスは既に脱退しアントニーは自殺し、オクタヴキアヌスは唯一の殘存せる三頭政治家であつた。彼は又た執政官の職に就いた。一時彼はケーザルに倣つてあらゆる權力を自己の掌

中に收むべきか、或はスッラの例によりこれを辭すべきかに躊躇した。然し最後に中道を取つた。紀元前二七年彼は三頭政治を廢止しその特權を共に辭し、政府を元老院と人民との手に返した。これは形式的に共和政治に復歸せしことであつた。元老院は彼の平和克復の功績を認め、彼にアウグスツス *Augustus* の稱號を與ふことに決定した。この時までこれは神々と其の殿堂とのみ附加せられた。これをオクタヴキアヌスに與ふるに當り、元老院は同時に少しの權力を附加したのではない、唯萬人の特に崇敬すべき人物として他と區別するためであつた。吾人は今後彼をアウグスツスと稱するけれども、彼の後繼者はすべてこの稱號を殊遇の名譽として用ひしことを記憶せねばならぬ。これは殆んど猊下 *His Sacred Highness* に相當する、然し宗教的にも政治的にも何等官職を表明したのではない。

而も元老院は彼が私的生活に隱退するを許さず、若干の屬領の統治を委任した。その統治に對して彼はプロコンサル(知事)の權力を與へられ、其の後間もなく元老院はこの權力を屬領知事の監督權とした。知事はすべて屬領の軍隊を指揮する。されば彼等よりも優越せる地位にあるアウグスツスは軍隊の統帥者・總司令官であつた。彼は數年間毎年執政官に選舉せられた後、その職を辭した。民會はこれに代ふるに護民官の職を與へず唯その權力を以てした。この權力は彼を神聖不可侵とし(註)且つ人民の代表者となした。これによつて彼は又たローマ及び伊太利の政治に參與した。時と

巨富を擁せし家族は個々の家族の成員を國家よりも更に高く評價した。その思想は壯大なる墓所建築に現れてゐる。市外數哩のあひだ此等大家族の墳墓の遺跡はアピウス街道の兩側に並列してゐる。ケーザルの時代に建てられしカエキリア・メテラ *Caecilia Metella* の墓所は最も壯大なるものである。

吾人はローマの文明及び知識の進歩を理解すると共に、殆んど他のすべての點に於てローマは急に衰退しつゝ、ありりし事實を看過してはならぬ。ローマの嘗て健全なりし道徳は惡徳に代つた。共和時代の自由は既に久しく單なる形影に過ぎぬ。帝國は内部の無秩序と疆外の野蠻人によつて脅かされてゐた。

(註) 第三六節。

第三章 プリンセプスの政治・ユリウス

家の君主(紀元前三—紀元四)

第四節 アウゲスツスの政治 アクチュウムの戦はオクタヴキアヌスをローマ世界の主人公とした(註一)。レピヅスは既に脱退しアントニーは自殺し、オクタヴキアヌスは唯一の殘存せる三頭政治家であつた。彼は又た執政官の職に就いた。一時彼はケーザルに倣つてあらゆる權力を自己の掌

中に收むべきか、或はスッラの例によりこれを辭すべきかに躊躇した。然し最後に中道を取つた。紀元前二七年彼は三頭政治を廢止しその特權を共に辭し、政府を元老院と人民との手に返した。これは形式的に共和政治に復歸せしことであつた。元老院は彼の平和克復の功績を認め、彼にアウグスツス *Augustus* の稱號を與ふことに決定した。この時までこれは神々と其の殿堂とのみ附與せられた。これをオクタヴキアヌスに與ふるに當り、元老院は同時に少しの權力を附加したのではない、唯萬人の特に崇敬すべき人物として他と區別するためであつた。吾人は今後彼をアウグスツスと稱するけれども、彼の後繼者はすべてこの稱號を殊遇の名譽として用ひしことを記憶せねばならぬ。これは殆んど猊下 *His Sacred Highness* に相當する、然し宗教的にも政治的にも何等官職を表明したものではない。

而も元老院は彼が私的生活に隱退するを許さず、若干の屬領の統治を委任した。その統治に對して彼はプロコンサル(知事)の權力を與へられ、其の後間もなく元老院はこの權力を屬領知事の監督權とした。知事はすべて屬領の軍隊を指揮する。されば彼等よりも優越せる地位にあるアウグスツスは軍隊の統帥者・總司令官であつた。彼は數年間毎年執政官に選舉せられた後、その職を辭した。民會はこれに代ふるに護民官の職を與へず唯その權力を以てした。この權力は彼を神聖不可侵とした(註二)且つ人民の代表者となした。これによつて彼は又たローマ及び伊太利の政治に參與した。時と

して彼は同僚と共に検査官の任に就き、ボンチフェックス・マキシマス(司祭長)たりしレピダスの死後は終身この職に任命せられ、斯くして國教の首長となつた。アウグスツスは又た元帥イムペラートルであつた。彼の時代にこの稱號は依然『將軍』を意味し、彼の死後一世紀以上の間は尙ほ『皇帝』を指すものではなかつた。最後にアウグスツスの得たる地位を比較すれば、軍事的權能は北米合衆國大統領のそれと等しく、其の政治的權能は稍これに劣ることを知るであらう。すべて舊共和時代の保安官は依然存続し、従前と同じく其の職務に執掌しつゝあつた。制度上より見ればアウグスツスは執政官と同列であつたが、彼の榮譽と個人的勢力とは他のすべての官吏に優つてゐた。彼は常に各種の官吏候補者の適不適其の他一切の諮詢を受け、其の政策は常に實施されることを得た。彼の權力は保安官としてではなく、政治的『頭領』Political "boss"として行使された。ローマ人はこの地位にプリンセプス Princeps (指導的市民 Leading citizen)なる稱號を與へ威嚴を附した。その思想は既にキケロの『共和國』に端を發する(註三)。プリンセプスは其の轉化せる『君主』Prince と譯し得べきも、ローマの歴史に於ては單に最も勢力ある市民を意味し、其の制度上の權威よりも遙かに優越せる『頭領』として實際の權力を有してゐた。此の意味に於てプリンセプスの政治は、事實に於て共和政より君主政に至る過渡期であつた(註四)。

(註一) 第四九二節。

(註二) 第三八二節。

(註三)

第四九三節。

(註四)

第五二二節。

第四九七節 屬領

國境及び他の危険なる屬領はプリンセプスの直轄であつた。其の代官は司法及び軍事を掌り、其の代理は財政を管理した。埃及はこれを屬領 Province と稱せずしてプレフェクチュア (都督府) Prefecture と言ひ、アウグスツスの任命せる總督 Prefect の統治とした。埃及人はプリンセプスを國王と崇め、總督を其の代官と考へた。舊來の靜謐なる屬領は依然元老院に屬し年々知事を任命した。プリンセプスと元老院との權力の分擔は全政府を通じて行はれ、兩者は各々互に他を牽制した。プリンセプスが元老院所轄の屬領を監視するため、知事には公正有能の士が登用せられ、他方元老院は二方面よりプリンセプスの權威を抑制した。即ち(一)埃及を除き屬領の知事と軍隊の幹部とは元老院議員たるを要す。(二)プリンセプスは他の保安官と等しく元老院に對し、定時政務の報告を提出し、一切の行動につき元老院に對して其の責に任ずる。

アウグスツスはユリウス・ケイザルの例に倣ひ公正有力なる政府を主張した。彼はローマ市民權を與ふることに躊躇せしも、屬領民は著しく地方的自由を享有してゐた。彼は貿易を獎勵しローマ世界の最も遠隔なる地方まで、美しき鋪裝の國道を建設して帝國を結合した。斯くして帝國の統治は屬領に保護と幸福とを齎した。

第四九八節

東部國境

國境の研究には其の附近の屬領及び從屬國家を考慮せねばならぬ。蓋し此等

諸國の統治は國防問題と密接なる關係を有する。アウグスツスの時代に於てアドリア海の東部にあ
る帝國の領土は人口稠密にして且つ富み、伊太利及び西方は比較的人口稀薄且つ富の程度も低かつ
た。されば東方鎮撫に際しアウグスツスは、此の地方の反抗を誘起せざるやうに注意し、概してボム
ペイの經營を繼承し(註一)、小亞細亞の小王國カパドキア及びガラチア(Calatia)(註二)の如きは、其の
儘手を觸れずに放任した。猶太も亦王國となりヘロデの統治を受け、エルサレムにエホバの大殿堂
を建築せし彼は、イエスの生れし時の國王であつた。然しヘロデの死後數年にして王政は廢止せら
れ、猶太はアウグスツスの代理 Procurator の所轄となつた。一般的傾向は從屬的國家を屬領と爲
すにあつた。東部國境の廣大なる屬領はシリアであつた。こゝには三軍團を駐めユウフラテスの防
備に充てた。シリアの知事はこの軍隊を指揮するため、軍事の經驗伎倆ある人たることを必要とし
た。ユウフラテスの彼方にはアルメニアとバルチアとがある。後者はローマ帝國以外の唯一の最も
統制された大國家であつた。ローマとバルチヤと何れが果してアルメニアを支配するやは、兩大國
家の不斷の争闘の原因であつた。

(註一) 第四六節。 (註二) ガラチアは紀元前二五年に屬領となつた。

第四九節 南部國境 埃及はローマに一年間に必要なる穀物の三分の一を供給し、あらゆる産物
を出し、アレキサンドリアは依然商工業と知的生活の中心であつた(註三)。同國の富源を支配するも

のは帝國統治の鍵を握れるものである。さればアウグスツスは機敏にもこの地を直轄とし、常にそ
の總督には武士階級の親友を任命し、元老院議員と雖も彼の特許なくしてはナイルの平野を訪れる
ことさへも出来なかつた。ここに一軍團の兵を置きヌビア人に對し南部國境を防備した。

埃及の西部にある砂漠種族は人口稀薄、これに對して國境守備の軍隊を置く必要はなかつた。埃
及西部にあるキレナイカ Cyrenaica 地方は既に、屬領クリートに併合せられ、更に西方のアフリカ
はユリウス・ケーザル以來前王國ヌミディアのうちに包含されてゐた。阿弗利加の西部には尙ほ從屬
王國モレタニアがあつた。阿弗利加にはフェニキア語が依然日常生活に行はれて居たが、ローマは
ラテン語以外は公用語として使用するを許さなかつた。カルタゴはユリウス・ケーザルによつて恢
復され既に繁榮せる都市であつた。ローマはアフリカの屬領より穀物果實の供給を仰いだ。

(註) 第三六節。

第五〇節 北部國境・(上)ダニューブ及びアルプス 北部國境の防備は依然ローマ統治者の最困難
とする問題であつた。其の國境外には慍悍なる種族が尙ほ群がづつてゐた。アウグスツスの治世にマ
ケドニア知事は、帝國を北方下ダニューブまで擴張し、新征服地はモエシア Moesia の屬領として
經營された。アウグスツスは親しくモエシアの西、イリリクム北部の國土の征服に着手したが、此
の地方の住民は自由を愛し好戰的であつた。彼等は屢々叛亂を起せしも、激戰の後終にアウグスツ

スの養子チベリウスの征服するところとなり、(註一) 屬領パンノニア Pannonia となつた。アルプス及び其の附近の部族は、北部伊太利を屢々窺ひつゝ、ありしが此等の山間の住民はチベリウスと弟ヅルスに依り征服された(註二)。この征服地より更に二個の屬領が出来た——パンノニアの西部山嶽地方のノリクム Noricum と、ダニユウブ及びライン上流に在るラエチア Raetia とである。此等のダニユウブ地方の屬領を經營し、各地の要塞と連絡を通じてこれを保護する事業は、當代の最も手腕あり謹慎なる將軍にして行政家たりしチベリウスの責任であつた。

(註一) アウグスツスの妻リウキア Livia は彼と再婚する以前既にチベリウスとヅルススの二子を擧げ、チベリウスはアウグスツスの養子としてユリウス家に入り第二のプリンセプスとなつた。第五節。

(註二) 彼等の光輝ある戦勝は詩人ホレースの『短詩』第四篇第一四(Horace, Odes iv. 14)に讃誦せられてゐる。ポツフォードの『ローマ史』二三三頁の引用を見よ。

第五節 北部國境(下)ライン アウグスツスがガリアを四個の屬領に分割せしことは、既に述べしところである(註)。其の後彼はゲルマニの國境を守備するため、ライン左岸に二個の邊疆屬領を組織する必要を認め、これを上部ゲルマニ、下部ゲルマニと稱した。

此等新屬領の知事は軍隊を指揮し、常に不穩なるゲルマニ人の攻撃を監視するため軍人たるを要し、アウグスツスは終に、少くともエルベ河に至るまで土地を征服して帝國を保護せんと決心し、

ヅルススはその任に發り、二年間成功を收めしも、後彼は落馬して重傷を負ひ終に歿した。これ帝室に取つて一大損失であつた。ヅルススは才幹あり且つ軍隊の間に好評ありし人物であつた。

チベリウスの征服完成後、アウグスツスは遠戚のヴァルス Varus を新屬領の知事とした。彼は屬領民を單に奴隸の如くに考へ、東洋流の壓制政治を試みた。然るに彼等は反抗し、ローマの教育を受けし酋長の子アルミニウス Arminius の指揮を受け、この殘忍なる知事に對抗する計畫を立てた。ヴァルスが部下の三軍團を率ゐて冬營地に向ふため、トイトベルグ Teutoberg の森林を通過しつゝ、ありし時、彼等は不意に軍隊を包圍してこれを粉碎した。ヴァルスは自殺し、野蠻人は捕虜を樹に吊してこれを責め殺した(紀元)。アウグスツスは雄々しくもこの悲報に堪へた。然し彼の精神は永久の傷手を受けた。屢々彼は『ヴァルスよ、ヴァルスよ、予に予の軍團を返せ』と繰返したと言ふ。彼は帝國の國力を更に斯る無謀の計畫に徒費するの愚を信じ、ライン河を以て國境となし斷乎として平和政策を取ることをなつた。

(註) 第五節。

第五節 軍隊 この平和政策の主なる理由は、兵士を得ることの極めて困難なりし故である。軍團兵はローマ市民であらねばならぬ。時として屬領民を軍隊に編入せし場合には、彼等に市民權を與へねばならなかつた。然しアウグスツスは屬領民に市民權を與ふることに反對した。彼は帝國の

統一と保護とは、ローマ人の軍隊精神を維持し、彼等の種族的優越性の矜持を持続すれば、これを最も有効に保障し得るものと信じた。マリウスの時代以來一軍團は五千乃至六千の正規兵より成り、アウグスツスは更に各軍團に屬領民の豫備隊を加へその兵數を約一萬とした。彼の統治の晩年には總數二十五軍團あつた。彼は尙ほ地中海及び其の支海、竝に國境の河川に相當の海軍を備へ、一身の警衛に備ふるため禁衛軍 *Pretorian Guard* (註) と稱する一隊の兵士をローマの内外に駐屯せしめた。首府の消防及び警察も同様に軍隊組織であつた。ローマ及び其の附近にある軍隊はすべて約二萬に達し、屬領に於ける警察事務は土人の民兵によつて行はれた。

帝國の常備軍は全然新組織であつた。然しアウグスツスの組織せしものは極めて少數にて屬領の警察隊を除き三十萬を越ゆることはなかつた。軍隊徵募の困難なる上に、アウグスツスは費用をも考慮せねばならなかつた。帝國の富は既に長き内亂のために蕩盡し、従つて彼は増税の不可能なるを感じてゐた。彼は屬領民の負擔を免除するために、その莫大なる私財の大部分を當面の行政と土木事業のために投じた。

(註) 將軍の幕營 *Praetorium* より轉ず——禁衛軍は將軍の幕營を警備せし軍隊より發達せしものである。

第五三節 公共營造物の改善・建築 アウグスツスは多くの植民地を伊太利及び屬領に設けた。彼の目的は隱退せし老兵に田地を供給するのみならず、人口稀薄なる地方に植民を行ひ國家の富強を

増加するにあつた。

ローマ建築の黄金時代は彼に始まる。彼自ら其の土木事業に就き記して曰く——
『予は巨費を投じてカピトール(註)とボムペイ劇場とを修理せり……予は時代を経過せし爲めに多くの破壊せる個所のありし水道を復舊し……予の父(註)が着手して殆んど完成を見んとせしユリウス家のフォラムと、カストルの神殿とサツルンの神殿との中間にあるバシリカとを完成せり。又たこのバシリカの灰燼に歸せし後、更に大規模にこれが再建に着手しこれに予の子孫の名を刻せり。若し生きてその完成を見る能はざれば、予の後繼者にこれを命ぜん。元老院の命により第六回の執政官たりし時、予は八十二の神殿を復舊し、修理の必要ありしものを一も遺すところ無かりき。予は第七回の執政官たりし時、アリミヌムに至るフラミニウス街を再建し、ムルヴキア及びミヌシアを除くすべての橋梁を再造せり。』

『私有地に予は勝利品を以て復讐者マルスの神殿と、アウグスツスのフォラムとを建設せり』(註)。このマルスは征服の神にあらで寧ろ帝國の平和を攪亂する外國の膺懲神であつた。『萬神廟』を意味するバンテオン *Pantheon* は彼の最も信頼せし宰相アグリッパ *Agrippa* の造營せしところであつた。ここに人民はユリウス家の主神マルスとヴェキナスとを禮拜した。バンテオンは後に至りハドリアヌスの時に再建された。アウグスツスの活動性はローマの面目を全然一新し、統治の晩年彼は煉

瓦の都市を化して大理石となしたりと誇るに至らしめた。

この時代の最も顯著なる建造物の一は、元老院が西班牙及びガリアに於ける叛亂の鎮壓を記念し、帝國の平和的精神を更に一般に表明するために建設せし平和の大祭壇である。そは帝室・元老院議員・保安官祭司の代表者のみならず、又た樹木・花環等の浮彫を以て美しく裝飾されてゐる。人物の浮彫は疑もなく實物の寫生にて、當時の胸像・彫像と等しく希臘の理想主義(註三)の影響を受けてゐる。果實及び花束は驚くべき精巧を以て趣味多く彫刻され、帝政時代の最も美しき藝術である。

(註一) カピトールにあるゼユビターの神殿。

(註二) アウグスツスの養父ユリウス・ケーザルを意味す。パシリカ・ユリアに就ては第五節を見よ。

(註三) アウグスツス『功業碑』第三、三節。この文書はアウグスツス自ら編述せる功業の記録である。

これは碑銘として現存し、學者の間には其の發見せられし場所アンキラ Ancyra の名を冠して、アンキラ文書 Monumentum Ancyranum として知られて居る。

(註四) 第三節

第五節 文學・宗教

アウグスツスの治政はローマ文學の黄金時代として知られて居る。彼は文學者を奨勵しまた援助した。彼は彼等の著述により偉大善美なる過去の生命を表現して、現在を純化高貴ならしむるを其の目的とした。此の時代の最も有名なる散文作家リヴァーティ Livy は、百二十

二卷のローマ史を著したが、彼はその準備に際して眞理の探究に努力せず、主に初期の年代記者に準據した(註一)。彼は更に深奥なる軍事上の知識と又たローマ史家に必要なる法律の知識とを缺いてゐた。然し彼は眞實と信ぜしところのものを好んだ。彼のローマ史は常に生彩あり、又た興味豊かなるものがある。

詩人ヴァジル Vergil (ウエルギリウス Vergilius) は種々の點に於てリヴァーティに酷似して居る。兩者共に高遠なる道德的目的を氣品ある文章に表現した。ローマの偉大性に感激せし兩者は著しく愛國的であり他人よりも完全に國民の理想を描寫した。詩人の物語は歴史家の叙述の如く生氣潑刺として戲曲的であつた。ヴァジルは優美・典雅にして稚氣がある。彼の主著はエーネイド Aeneid と稱する叙事詩にして、エーネアスの漂泊譚のうちにローマ建國を讚美し、同時に主人公の子孫と稱する帝室の上に榮光を稱へた。

『短詩』Odes『諷詩』Satires 及び韻文の『書翰』Epistles の著者ホレース Horace(ホラチウス Ho-

racius)は満足と常識の詩人であつた。彼は其の友人に告げて言ふ――

『瞬間の與ふる悅樂を喜んで捉へ、一切の憂慮と苦惱とを捨て去れよ』(註二)

未來は神々に委ねよと彼は教へた。悠々自適せる別墅の、夏は綠濃き木蔭に、冬は櫓火の盛んな

る爐邊によき葡萄酒と愉快なる友と共に、愁ひを忘れた心とは、彼に取つて理想の生活であつた。

共和政治が暴風狂雨のうちに終りを告げた後に、世界は斯くの如き教訓を必要とした。

共和政の末期ローマ社會は神々と其の教訓とを忘れた。アウグスツスは忘却された古代の祭典を復舊し、人民をしてローマの偉大を創造せし古の宗教と祖先の純正簡素なる生活とに復歸せしめんと試みた。ケーザルは死後神と祠られ、その後多くの君主はその例に倣つた。屬領民は神殿を建てアウグスツスを神として生贄を獻けた。伊太利及び西方屬領の解放民は、彼を崇拜するために團體を作つた。それは氏神 *Genius* 即ち守護神の崇拜とは全く異つたものである。最初よりローマ人は地方及び都市の十字路には、其の地方の守護神 *Lares* の像を立つる習慣があつた(註三)。今やアウグスツスの氏神の像を、此等の守護神のうちに加へる習慣となつた。その意は彼の氏神を人民崇拜の中心たらしむること、尙ほ家父の氏神を家庭的宗教的中心とするが如きものであつた(註四)。斯くして君主の守護神に生贄を獻ぐることとは、政府に對する忠誠の認識となつた。實に君主と其の氏神とを崇拜することは、基督教を採擇するまでのローマ世界の宗教の中心となつてゐた。

(註一) 第五〇節註一

(註二) 『短詩』第三篇第八

(註三) 家の守護神も亦 *Lar* である、第六八節、

(註四) 第六八節。

第五〇節

チベリウスの治世(註五)

アウグスツスは四十五年の統治の後、紀元一四年に歿した。

彼の生涯中有力なる援助者たりし彼の妻リヴキアは、平和のうちに其の子チベリウスをして其の後を繼承せしめた(前二)。

彼の登極後間もなく、ダニューブ及びライン地方の軍隊は叛亂を起した。新君主に對し忠義の誓約をなす代償を求めたのである。幸にして將軍等は動搖せず、一揆は多少の困難ありしも鎮壓するを得た。チベリウスの甥ゲルマニカス *Germanicus* はライン地方の軍を督し、兵を率ゐてライン河を渡りヴァルスの慘敗に復讐した。然しアウグスツスは遺言狀のうちに、後繼者に對し帝國の國境を擴張せざることを勸告し、従つてチベリウスはゲルマニカスを召喚した。

其の後彼の治世を案す重要な戦争は無かつた。されば彼は全く帝國の行政に没頭し、この點に於て彼は勝れたる手腕を發揮した。『彼は屬領に新しき負擔を課して苦しむることなきに注意し、また舊來の義務につき知事の貪慾より人民を保護する様に監視した』(註三)。彼は地震のために破壊されし小亞細亞の十二都市を再建し、ローマ人に屬領と緊密なる關係を持するは、彼等の特權たると共に義務なることを教へた。されば臣從國民が彼を尊敬せしことは怪しむを須ひぬ。

然し大衆は彼の恩澤薄く、且つ劍客の技を觀覽せしめざりし爲め彼を好まなかつた。貴族は更に一層彼を憎んだ。陰謀は日常の茶飯事となり、従つて彼は叛逆罪に對しては嚴重に法律の適用を命じ、尙ほ密偵 *Delatores* を放つて告發を獎勵した。彼の猜疑心と當時の社會的道德の廢頹とは密偵恐

怖時代を出現した。貪慾と憎悪と流血の快感——約言すればすべての惡德的犯罪的欲望——は彼の治世に高潮に達した。何人も等しく不安を感じ、各々他人を審判し、君主すら元老院が微罪に對し有罪の宣告することを抑止し得なかつた。

(註一) 第五〇〇節註。

(註二) タシツス『年代記』第四篇第六節 Tacitus, Annals, iv, 6.

第五〇二節 カプリ・チベリウスの性格と死^(七三)

彼は統治の前半をローマに送り、晩年はナポリ灣の風光明媚なるカプリ島 Capri に過した。彼は此の隱居所にあつて尙ほ政府を監視し、直接の支配は禁衛軍總督セヤーヌス Sejanus に委ねた。然るにセヤーヌスも亦君主に對して陰謀を企て、叛逆罪をもつて死刑に處せられた。

チベリウスは一層貴族とローマ暴民とに憎悪を感じた。彼は特に殘忍或は惡徳なりしにあらず、彼は寧ろ頑固にして嚴格なる人物であつた。彼の心理は貴族の理解せざるところであつた。彼は社交を好まず奇智を缺き且つ吝嗇であつた——斯くの如き性格は如何なる君主をも不人望ならしむるものである。彼は幾多の缺點ありしに拘らず、手腕あり良心を具へし統治者であつた。

ゲルマニカスの子にしてチベリウスの後繼者たりしカリグラ Caligula は、精神に異常あり、その治世^(三七一)には重要な事件はなかつた。

後にアウグスツスと稱せしオクタヴキウスはユリウス・ケーザルに養はれてその家に入り、アウグスツスはまたチベリウスを養ひチベリウスはカリグラを養嗣とした。されば最初の二君主はユリウス家に養はれたものである。彼等は亦ケーザルの家族に養はれてケーザルと稱した。カリグラの後プリンセプスの政治は他のゲンス及び家族に移りしも^(七四)ケーザルの名は稱號として繼承された。

(註) ユリウス・ケーザルのユリウスはゲンスを、ケーザルは家族を示す(第三八節)。ユリウスのゲンスはクラウヂウスのゲンスがこれを繼承した。

第三十九章 ローマの君主政治・クラウヂウス家及びフラヴキウス家^(四一)

第五〇三節 クラウヂウスの施政^(四一)

元老院はユリウス家の系統を以てプリンセプスの政治は終るものと豫期してゐた。然るに其の論議の最中に禁衛軍は新君主を擁立した。彼等の指命せしはカリグラの伯父クラウヂウスであつた^(七五)。彼は青年時代より熱心に歴史と科學との研究に耽り、此の方面に若干の著述を公にした。態度も整はず精神的平衡を缺ぎしたため、一般よりは學問せる愚者と見られてゐた。されば吾人は彼が新時代を翹めしに驚嘆を禁ずる能はず。

彼はアウグスツスの政策を棄てローマ市民權を無制限に屬領民に與へ、屬領と伊太利及びローマとを同等の地位に置く端緒を開いた。彼は屬領の知事を任命するに當り常に次の如くに言つた、

『予に感謝するを要せぬ。予は特に貴下に私恩を估るのではなく、予と共に帝國統治の共同負擔を求むるのである。若し貴下が遺憾なく其の義務を遂行すれば、予は貴下に感謝するであらう』と。この寛容と聰明と、他方また斷乎として犯罪者を處罰し國境を保護した。彼は將軍の一人を派して南ブリテンを征服してローマの屬領とし、爾來殆んど四百年間ブリテンは帝國の一部であつた。

彼の慈悲深き性質は、老病の奴隸を保護せし法律と、ローマの飢饉を豫防せし施設とに現はれてゐる。彼は二個の壯大なる水道を建設してローマに上水を給し、その一は有名なるクラウヂアである。後代の君主も引續き水道を建設し、終に其の全部を合して毎日ローマに給する上水量は、現にチベル河が海に注ぐよりも多量に上つた。

多くの陰謀の企てられしに拘らず、彼は密偵を用ひず又た叛逆法を適用せず、身邊に衛兵を附し、食卓に侍せしめ又た元老院に同伴した。彼は貴族と武士とを信任せず、フレドレン解放者(三)を左右の股肱として任用し、此等の記室・史官のうちより帝國の宰相を出した。斯くして彼は元老院より全く獨立せんと企て、元老院と君主との權力はやがて後者に重倚するに至つた。換言すればプリンセプスの政治は君主政に向つて進展しつゝ、あつた。

(註一) 斯くてクラウヂウス家の統治が行はるゝに至つた。この家系よりは唯二名の君主を出せしのみである。即ちクラウヂウスとクラウヂウスのゲンスに養はれた嗣子とである。父も子も共にクラウヂウスと稱す。
(註二) 第五九節

第五八節 **ネロの治世**(五四一) 後繼者は彼の妻アグリッピナ Agrippina と前夫の間に生れしネロであつた。新君主は年僅かに十七歳に過ぎず、政治よりも舞踏と音楽とに興味を有し、従つてその治

世の最初十年間は師セネカ Seneca と禁衛軍總督ブルス Burrus とが政を攝し、共に有能才幹ある人物であつた。

セネカは西班牙に生れしストア哲學者にて、道德を以て幸福に至る唯一の道と考へ、人はすべての煩惱より解脱して其の理性に服従せよと教へた。ストア學派はまた、自己の生命を支配するは自己である、適當と信ぜし時には生命を斷つても可なりと言つた。この嚴格にして實際的なる哲學はローマ人の特性と合致し、共和政の末期より基督教の國教となるまで多くの識者はこの教義に自己鍛鍊の指導を發見した。セネカは道德的堅固を缺ぎしも彼の意圖は正しいものであつた。彼とブルスとの下に屬領はよく統治され、彼等の制定せし法律により、全帝國を通じて薄倖の奴隸は不満を保

安官に上訴するを許された。この規定は人類の進歩に一大寄與せしものである。ブルスは六二年に死し、ネロは親しく政治を見るに至りしを以て、セネカは私的生活に隱退した。然るに彼は隱謀に参加せりとして告訴され、君主の命により終に自殺した。此の時代の人々は死

を恐れず、自由と主義とのために生くることを知らなかつた。自殺を奨励せしストア學派は壓制を奨励する結果となる。

ネロの親政は無定見なる専制政治であつた。然し彼は虚榮心に富み奢侈を好みしとは言へ、その残忍なる行動は僅少にして數ふるに足らぬ。ローマの大部分が大火のため灰燼に歸せし時、彼は罹災民を救護し其の家屋の再建を助けた。彼の治世の最大汚點は基督教徒にこの災厄の原因を歸し、彼等を根據なき疑惑より迫害せしことである。多くのものは有罪の宣告を受け、『彼等の刑死にはあらゆる侮辱が加へられた。獸皮を被せられては犬に噛み裂かれ、或は十字架に懸けられ、若くは火刑に處せられ照明の代りとして君主の花園を照した』(註)。基督教徒に就て充分の知識を有せざりしローマ人は、彼等を猶太人の一派と考へ、社會の最下層に屬する故を以て甚しく輕蔑した。而もネロの迫害は突發的の残忍なる所業にして、ローマ以外には波及しなかつた。

然し彼の壓制は終に叛亂を起した。西部西班牙の知事ガルバ Galba は自ら元帥イムペラトルと宣し、ネロは數名の從者を伴ひてローマを遁れ、一解放民の作りし汚穢なる洞穴に避難した。『誰ぞ予に死の方法を示せ』と彼は求めた、然しこれに應ずるものはなかつた。結局は近づきつゝあつた。元老院は彼を公敵と宣言し、彼は馬蹄の近づく音を聞いた。『斯くの如き藝術家の死や憫れむべし』と彼は語りて自刃した。

(註) タシツス『年代記』第一五篇第四四節 Tacitus, Annals, ⅩⅤ, ⅩⅤ. 1. ネロ自身ローマに火を放ちしものと疑はれて居るが、然し其の根據はない。

第五九節 ヴェスパシアン(六九一—七九一)の治世(七九一—八〇七) ガルバの後にオト Otho 立ち、オトはヴキテリウス Vito-

Tius の嗣ぐところとなり、合せて一年間の統治をなせしに過ぎぬ。彼等は何れも皇位繼承の内亂に不慮の死を遂げた。次いでヴェスパシアンがプリンセプスとなつた。彼と其の子孫はゲンスの名を取つてフラヴキウス家の君主と稱せられてゐる。彼は平民出身なるも識見廣く才幹あり、又た政治の經驗もあつた。

彼が即位と共に直面せし多くの難關のうち、最も重要なものは猶太人の反亂であつた。彼の子チツス Tius は防禦の堅固なる首府エルサレムを圍んだ。彼等は一切の講和條件を拒絶し、従つて其の後の助命は許されず、眞に生死の戦であつた。猶太人の信仰によれば神は神殿を保護し、危期に臨めばメシアは必ず出現して人民を壓制より救ひ、彼等を世界の支配者たらしむると思つてゐた。されば彼等は狂熱的信仰を以て戦ひ、飢餓に類しては人間さへも食つた。五個月の包圍後ローマ人が強襲して都市と神殿を奪取せし時、猶太人は運命の命するが儘に其の妻子を殺して自殺を遂げ、唯狂焰と死體の外何ものをも發見することが出来なかつた。百萬を算せし猶太人はこの包圍中に死し捕虜となりしものは十萬に過ぎぬ(七〇七)。ドミチアンの建設せしチツスの凱旋門は、今尚ほこの勝利の

記念としてローマに立つてゐる。

貴族と武士とは漸次滅亡しつゝ、ありしゆへ、ヴェスパシアンは伊太利及び屬領より新家族——最良にして且つ最も忠誠と認めし——を選び新にその階級に加へた。此等の屬領民は君主を保護者と仰ぎてこれを援け、従つてプリンセプスの政治の基礎は一層鞏固となり、陰謀を以て脅すこと能はざるに至つた。共和政の晩年よりプリンセプス政治の初期にかけて、ローマ社會は惡徳に満ち腐敗してゐた。然し此等の新家庭は首府に健全なる思想と道徳とを注入した。

久しく等閑に附せられたる要塞其の他の公共の營造物を修理するため、ヴェスパシアンは増税の必要に迫られてゐた。彼は巧みに財政を經理し、教育費を捻出し屬領の貧都市に補助金を支出し、又た新建築物のために剩餘金を残した。彼の事業中最も有名なるは通常コロセウム Colosseum として知らるる巨大なる圓形劇場である。約五萬五千の觀客を收容し(註)、其の長圓形の巨大なる外觀は圖に就てこれを察すべく、現に廢墟となれるも尙ほ世界の偉觀たるを失はぬ。こゝにローマ人は劍客と人獸との格闘を見物するために集まつた。ヴェスパシアンはその完成を見ずして死し、チツスの時代に成就した。

(註) 古代人の記録によれば、この建物は八萬七千人を收容し得ると言ふも詳細なる測定の結果、その誇張なることが發見された。

第五〇節 チツスの治世(五九) チツスは父のあとを繼ぎローマ市民及び屬領民を愛せし、従つて彼は皇帝中最も人望あり、「人類の喜び愛せし」ものであつた。嘗て晚餐の席上彼は其の日何人にも恩恵を垂れしことなきを回想し、叫びて曰く、「友人よ、予は一日を失へり」と。司祭長として彼は潔白を自己の義務と考へた。即位以來いかに重罪を犯せしものも、これを死刑に處することがなかつた。實際彼は正義であると言はんよりも放任的であつた。この御し易き性質が彼の後繼者をして遺業の完成を困難ならしめた。

彼の治世中の主なる事件はヴェスヴァウス Vesuvius の爆發であつた。この火山は數十年來活動を休止し、由つてカムパニアの住民は大膽にも其の側面に葡萄園を作つた。然るに七九年の恐ろしき爆發は人口二萬のポムペイ Pompeii ヘルクラネウム Herculaneum の兩市及び他の小村落を埋めた。その後千八百年を経てポムペイは發掘され、神殿・店舗・住宅は其の彫像・壁畫・家具・道具と共に、古代人の生活と文明とを吾人に如實に示してゐる。

第五二節 ドミチアンの治世(六一) チツスは僅かに二年にして歿し弟ドミチアンその後を繼承した。ドミチアンの治世に帝國は平和を見ること稀なりしが、特に北部國境戰を以て有名である。有名なる將軍アグリコラ Agricola は屬領ブリテンの國境を、近代の蘇蘭に當るカレドニア Caledonia に進め、君主も亦親しくゲルマニ人と戰場に見えた。其の後更にダニューブの北部に住し、ローマ

文明に浴せるダキア人 Dacians の帝國に侵入するや、ドミチアンは彼等と戦ひ充分の成功を博する能はず、不利なる講和條件を諾し、其の酋長には貴重なる贈與をなし、従つて政敵よりはこれを以て朝貢なりとの非難を受けた。

ドミチアンは堅實なる統治者であつた。國境には有力なる將軍を配置し、屬領には善政が彼の時代に行はれた。獨裁政治家の性格を具へし彼は政治の全權を掌握し、元老院を其の下位に立たしむる考へであつた。彼は多くの元老院議員の參與せる陰謀を發見したる後、愈怒つて彼等に反對し、爾來その死に至るまで彼は貴族社會の恐怖であつた。然し遂に陰謀は其の家庭より起つた。彼の妻ドミチアは一身の安全を怖れ、従者と禁衛兵とを誘ひ彼を弑するに至つた。

『ローマ皇帝は神ヤヌスの如く、兩面を有す』。彼等の性格を批判するに當り、吾人は貴族に最も憎まれし君主は、屢々屬領民に取つては最も正義仁愛の保護者なりしことを記憶するを要す。ドミチアンも亦然り、貴族的の歴史家(註)は彼に暴君の烙印を與へた。若し臣從國民にして率直にその意を語るを得ば、彼等は彼の治世を祝福するであらう。

(註) こゝに言ふ歴史家とはタシツスのことである、第五六節參照。

第五二節 アウグスツスよりドミチアンに至る王政の發達 アウグスツスの政治は、彼の個人的家系的大勢力を背景とした共和政治であつた。プリンセプスは文武宗教の權力を兼有し、政治は依然

共和政と稱し元老院は政治の中樞をなし、豫期せしよりも遙かに獨立せる地位を把持してゐた。元老院は君主を抑制し、其の勢力を縮小する地位にありしも、議員は進んで彼に阿諂し却つて多くの權力を與ふるに努めた。此等の事情の下に君主は元老院を犠牲として漸次權力を握り、遂に紀元第二世紀に至れば多少元老院の掣肘を受けしも、眞の君主たるに至つた。イムペラトールは元來元帥を意味するものなりしが、こゝに至つて皇帝の意味に用ひらるゝこととなつた。君主權の増大には著しく宗教の援助を受け、君主崇拜は元老院及び普通保安官よりも其の地位を高めた。

君主の權威の増加せし他の理由は、人民が君主に其の冤枉を訴へ、彼等の必要とする善政を實行せしむる態度に出でし結果である。尙ほ北米合衆國の人民が現に益々大統領に依頼する傾向あるに等しい。或は公安の利害關係より、若くは人氣を求むるの餘り、君主は斯る要求に應じて一般の満足をかふため、彼等の希望する善政を行ひ、斯くして新に義務を負擔すると共に、また新に權力を得た。

いかに力量手腕ありと雖も、多數の熟練忠實なる補助者なくしては君主としての統治は出來ぬ。アウグスツスは元老院議員以外に政務に練達せるものを發見しなかつた。武士は帝國の朝貢を集め、ローマに於て陪審官となりしも、その他の政務には參與しなかつた。伊太利及び屬領に於ける文武の高官は、久しく元老院議員の獨占するところであつた。彼等は全體として共和政に忠誠であつた。

アウグスツスは君主の政務に關係あるもの、うち、左して重要ならざる職務は、知力ある奴隸・解放者及び武士中の親友に委ねた。時代の経過するにつれ此等の武士階級より政務に通曉し、且つ政治的榮達を全然君主に依頼する腹心のものを生じた。他方クラウヂウスの時代に至り、上述せる各種の公務は始めて官職となり、新しき職務が絶えず加はり遂行された。此の官僚組織の發達はプリンセプスの政治より君主政への變遷を助けた。

第五三節 國境及び屬領

アウグスツスよりドミチアンに至るまで帝國の國境政策は、概して平和主義にして防禦戦が行はれた。猶太及びモレタニアは屬領となりしが、東部國境に於ても南部國境に於ても重大なる變化は行はれなかつた。ローマ人はダニューブ河方面に於て國境の維持に困難を経験した。彼等はゲルマニ人を上部ラインの右岸より驅逐し、其の後に植民し始めた。この地方は屬領として經營せられず、『貢税地』“Tithe Land”と稱する附屬國となつた。東部國境は有力なる要塞を以て連絡し、其の完成せし曉にはラインよりダニューブに及んでゐた。ブリテンの征服は既にこれを述べた。ローマの文明はその南部に始めて根據を置きしが、西班牙或は南ガリア程に完全なるローマ化をなすに至らなかつた。

此の期間屬領に於ける生命財産は従前よりも著しく安全の度を加へ、其の結果一般の幸福と繁榮とを來し、且つ富の増加となつた。然し政費の膨脹と租税の増徴とは壓制政治の端緒にして、

て人民をしてこれに堪ゆ能はざるものたるに至らしめた。

第五四節 商業及び交通

國內の安全は商業を發達せしめ、ローマを中心とする道路網は全帝國に行き互つた。此等の道路に沿ひ又た河海を利用してあらゆる種類の商品は運輸せられ、過重なる關稅の貿易を阻止するものはなかつた。商業は帝國內に限らず印度・中央亞細亞・北部歐羅巴にも及び數千の伊太利商人は屬領と國境諸國に群をなして集まつた。屬領の朝貢はローマに入り、次で生活の必需品と奢侈品とを交換するために再び屬領に輸出された。多くの金銀は斯くして印度に流出し、再び還り來ることはなかつた。此の時代の終りに金銀は商業と政府との需要に不足を感じるに至つた。

この商業的大活躍の最も重要な結果として、帝國內の民族はすべて一種族・一文化に融合し、同じ希臘ローマ的宗教と、同じラテンと希臘の著者による教育と教養と、同一の社會的政治的組織とは汎く帝國に行はれ、ラテン語は西方の國語となり希臘語は東方の國語であつた。

完備せる道路と往來の安全とは交通を助長した。それは全世界が流動しつゝ、ありし時代である――商人は市場に、軍隊は駐屯地に、官吏は任地に、病者は醫療のために聖水を求め神々の靈場の巡禮に、迷信家は有名なる神殿と神託とに、怠惰なるものは祝祭と祭禮とに、好古趣味のものは歴史と藝術とに聖化せられし場所に、又たローマと希臘と埃及の壯大なる建築所在地に急ぎつゝ、あつた。

(註) 學生は學校の所在地に、教師は學生を求めて遠隔の地方に旅行し、修辭學者と詭辯家とは市より市を訪れ、群集せる聽衆の前に其の雄辯と智慧とを示した。

(註) ヅールイ『ローマ史』第六卷一七以下(Duruy, History of Rome, vi, 117 f.)

第五節 都市と村落 ローマが高度の文明國と認めし地方には、多くの大都市が存在し、其の他西部歐羅巴・ダニユウブ流域の如き地方にては、人民は通常田舎に住居してゐた。ローマは此等の地方に都市の發達を奨勵し、その結果ローマ帝國の西方諸國は、既に東方諸國の如く都市國家たるに至つた。此等の都市國家は希臘若くはローマの權力擴張以前の都市國家の如きものであつた。

都市の住民は奴隸と自由民より成り、後者は市民と非市民とに別れた。市民權は住居によつて獲得するを得ず、時に施與として與へられた。すべての市民は民會に出席し、保安官の選舉及び立法に參與する權利を有し、法律により一定の財産を有し且つ尊敬すべき品性と定職とを有するもののみ官職に就くを得た。最高の保安官はローマの執政官に模せしゾオヴキリ Duoviri (二人會)であつた。重なる保安官はゾオヴキリも、すべて退任と同時に、若し未だ市會 Curia に席を有せざれば茲に終身議員となる。五年毎にゾオヴキリは戸口調査を行ひ、都市の賦課を定める。隠退せし保安官のみを以て市會の定員(通常百名)を満たす能はざるが故に、ゾオヴキリは都市の富豪及び名士、時として富裕なる若くは有名なる外國人を議員 curiales となして缺員を補した。當時は激烈なる運動行はれ、ボムベイ廢墟の壁には大文字にて(註)次の如き文章を散見する、『理髮師等はツビウスを造營奉行となさんと欲す』、『果實販賣人は協同一致ホルコニウス・プリスカスをゾオヴキールに推舉する』と。又た此等の候補者を嘲りて次の如く記して居る、『すべて醉生夢死の徒はヴァチアを造營奉行に指名す』と。

(註) 此等の文字は伊太利語にてグラフィキチ Graffiti と稱する。

第五節 都市の公共心 保安官等は俸給を受けず、官職に就き若くは市會議員となるには、一定の費用を支拂はねばならぬ。公生活は彼等に不法利得の機會を與へず、寧ろ反對に人民は彼等が規定の支出の外に、自費を投じて祝祭を行ひ觀覽物を提供し、公共營造物の建設若くは修理を期待して居る。多くの都市は富裕なる市民の寄附により、租税によらず必要の經費を収益支拂による財源を有してゐた。多くの都市はまた同様にしてローマに支拂ふ歳貢を生ずる財源の寄附を受けた。斯る都市は毫も租税を課することをしない。概して古代國家は金錢或は貸附財産の形式にて莫大な資本を有し、その収益は必要なる經費を支拂し得て尙ほ剩りあつた。然るに近代國家或は都市は原則として生産的財源を有せず、寧ろ多額の債務を有しその利息は他の巨額の經費と共に、市民の租税を以て支拂はねばならぬ。この顯著なる對照によつて見るも、吾人は帝國都市の榮華と其の

富豪市民の郷土愛とを理解することが出来る。彼等の動機は屢々利己的のものであり、時として單に人望を得んが爲めでもあつた。何れにせよ都市はその利益を受け、其の結果帝國は未曾有の繁榮を見た。吾人はこれを當時の著述に讀み、又たこれを現存せる優秀なる道路・橋梁・水道・劇場・神殿・要塞其の他、當時帝國の領土たりし地中海諸國のあらゆる部分に現存せる土木事業の遺跡にこれを見る。

第五七節 ローマ及び都市の私生活・住居

都市は勿論大小甚しき相違はあつたが外面極めて酷似し街路は近代都市よりも遙かに狭く、地方道路の如く石を敷いてあつた。

私的生活は現在吾人の生活よりも公衆の眼に觸るゝこと尠なかつた。ボムペイの道路を歩む旅客は其の兩側に一階の窓なき唯の壁を見るであらう。二千年前此等の家屋を訪れし來客は先づ前房に達する。入口は狭き庭にして重き樞戸を通じて廣間に達する。訪客の近づくや門番は其の小舎より睡眠を擦りつゝ戸を開く。番犬が吠える、若くは番犬の代りに訪客は多分敷石にモザイクにて犬の像を現はし、これに『犬に御注意』Cave Canem の文字を見るであらう。

訪客は庭園 Atrium に入る。い、にこの家の主人の出迎を受ける。この室は屋根を葺き、中央には天窗を作りて光線を採る。雨滴は床上にある方形の水盤に注ぐ。水盤は屢々美しき大理石の噴水を以て飾られ、庭園には貴重なる石柱・彫像・繪畫・樂器を置き、床は美しきモザイクである。

庭園に接し又た家屋の各所にトリクリニア Triclinia と稱する食堂がある。各室少くとも一脚の卓を備へる。食卓の三方には寢椅子を置き、贅澤なるローマ人はこれに倚りながら大牢の美味を賞する。他の一方の卓上には主人の所藏する高價なる容器・骨董品を載し、部屋は美術品を以て贅澤なる裝飾が施されてある。

ペリスチル Peristyle とは樹木花卉を植ゑ、柱廊を廻らせる内庭の謂である。その周圍に婦人の寢室及び私室を設く。男子のそれは庭園 Atrium を中心として配置してある。調理室・浴室あり、時には圖書室もある。以上は第一階の状態である。上階の室は判明せぬが、確かに餘り美しいものはなかつた。

第五八節 家庭及び道德

吾人は既に初期ローマの家庭 (註二) と、キケロ時代の少年及び青年の教育 (註三) とに就て述べた。父の子女に對する絶対權は長く續いた。初期の慣習は妻を夫權の下に置きしも、妻は自由に社交に出入し、劇場及び競技に出席し、子女を教育し時として夫の政治的生活を助けた。主婦としての妻の地位は政府並びに社會の尊敬を得た。

然し父は漸時家族に對する權力を喪ふに至つた。子女は家庭に於ても學校に於ても更に親切なる待遇を受け、同時に古ローマの嚴格なる道德は其の影を潛むるに至つた。ローマ社會は全く腐敗し男女共に法外の奢侈と逸樂とを求むるのみならず、驚くべき惡徳と罪惡とに惑溺した。道德は初期

プリンセプスの時代に最も低下し、ヴェスバシアンの時代に至り稍改善せられつゝあつた(註二)。

(註一) 第百八節。 (註二) 第百四節。 (註三) 第百九節。

第五九節 奴隸 富豪の邸宅は管理に多数の奴隸を必要とした。來客の案内、浴室・寢室・調理室・食堂の監督、家族の雑用を始末するに人手を要した。主人或は主婦は外出に當り多数の僕婢を伴ひ、其の數と華美なる服装とによりその階級と富とを誇つた。其の他の奴隸は紡織・裁縫・家屋の修理に従事し又は病者の看護に當り、時には他の奴隸に命を傳へこれを監督するものもあつた。

主人は一般に奴隸を虐待し、僅かの過誤に對してもこれを鞭撻苛責した。地方にては屢々鎖にて繋がれし、勞働を強ひられ、汚穢なる地下室に群居してゐた。然しプリンセプスの時代に至れば、男女共に漸次奴隸を優遇すべきことを知り、クラウヂウス及び其の後の君主は彼等を保護する法律を制定し、遂に彼等を人間として待遇するに至つた。

奴隸は屢々其の忠實なる奉仕により、又は其の貯蓄を以て自由を獲得することが出來た。斯くて彼等は舊主人の被護民となり、其の事業を補助するを常とした。解放民は多数の知識階級を包含し社會的には自由民よりの下位にあるも活動的にして勢力が有つた。

第三〇節 社會生活と娛樂 君主の家庭は貴族と等しく、奴隸及び解放民の勤勞に待つところ多かつた。君主は朝より保安官、元老院議員、廷臣及び友人と接見し、同様に貴族は其の被護民を引見

し、貧困のものには毎月二十五アセス sestertii 即ち晩食に相當する金額を與へる。獵官者は勢力ある富豪の一瞥を得んが爲めに蝟集し、毎朝これ等の訪問客を以て街路は充滿する。午後主人は友人を招いて正餐を共にし、或は饗宴に招かれて外出する。ローマの宴會は希臘のそれに似て更に豪華を極め巨費を要した。富裕なるローマ人は時に劇場に赴くも、彼等は寧ろ公共の浴場に其の時を費し、若くはサーカス・マキシマスの競争或はコロセウムの劍客の闘技に出席するを好んだ。期に至れば、資産あるものはローマを去りて其の別業に赴き若くは海濱に行く。其の最も有名なるはベリアエ *Baiae* であつた。各都市の生活は首府の生活に似て唯だ規模の小なるのみ。

第四章 五賢帝・制限王政 (一九六—二〇〇)

第三二節 皇帝ネルヴァ (一九六—一九九) 元老院はドミチアンの死を聞くと、議員の一人ネルヴァ *Nerva* を

君主に任命した。彼は當時六十五歳の老齡にして、其の生涯は何等非難を受くべきもの無く、善良皇帝として知られし最初の君主であつた。ドミチアンは自ら君主となつた。若し彼の後繼者にして彼に模倣せしならば、吾人は專制君主制を論述すべき時期に至つたであらう。然し彼の前例は繼承せらるるに至らず、善良皇帝は元老院に自由と政權參與とを保障し帝國は制限王政となつた。プリンセプスの稱號は依然用ひられたけれども、イムペラートルは今や『元帥』と共に『皇帝』を意味する

ものとなり(註二)、元老院は新政體と協調するに至つた。この協調はその後五代の間に及び好感時代を出現した。ネルヴァはドミチアンの復活せし叛逆法を廢止し、次で臣民をして現在の幸福を以て過去の不幸を忘却することを勸告した。然し彼はチツスの如く愛すべく而も正義有力の統治者であつたとは言はれない。彼は自ら禁衛軍を支配する能はざるを見て、當時上部ゲルマニア(註三)に司令官たりし有力なる將軍トラヤーンヌス Trajan を養子としこれを後繼者と定めた。

(註一) 第四六、四六節。

(註二) 第五〇二節。

第五三節 皇帝トラヤーンヌス^(六一)_(二七)

トラヤーンヌスはネルヴァに次ぎ皇帝となつた。彼は西班牙に

生れた最初の屬領出身の皇帝である。トラヤーンヌスは更に全く平和政策に没頭せし初期の君主と異り、征服の野心を抱き、再戦してダニューブの北部にある大國ダキアを征服し、これを周圍一千哩に互るローマの屬領とした。植民事業は征服に次ぎて發展し、皇帝はこゝに老兵に分與すべき土地を發見し、同時に他の植民者も各所より入り込んだ。技師・建築家・工匠は道路と要塞とを建設し、鑛業家は鐵鑛と金鑛とを山中に發見し、忽ちにしてこの地はローマ風の性質を具備するに至つた。トラヤーンヌスの記念碑は今尚ほローマにあつてこの征服を物語つてゐる。

數年後皇帝は東方の征服を計畫した。將軍の一人は既に北西アラビアを屬領とせしが、トラヤーンヌスは親しく軍旅を率ゐてバルチア人を攻め、彼等をアルメニアより驅逐し、この地に臣下の國王

を封ぜんとせし彼等の計畫を顛した。彼はアルメニアを屬領とせし後バルチア帝國に入り、チグリス河畔に達し更に南下して波斯灣に至つた。その間チグリリス・ユウフラテス附近に設けし屬領は急に分裂し、住民は叛亂を起した。彼の班師は表面叛亂を鎮定するにあつたけれども、事實は悲惨なる退却であつた。彼はローマへの途中キリキアに於て歿した。

第五三節

内治

吾人は轉じて彼の内治を觀察するであらう。彼はネルヴァの政策を奉じ元老院議員を皇帝と同等に待遇した。然し彼等は唯多く論議するのみ、アウグスツスの時代よりも實權は乏しかつた。執政官も亦多くの重要な意義を失ひ、その任期は漸次短縮せられて二個月となり、王政は共和制を犠牲として發達した。

斯くの如き皇帝權の發展は、ローマに於けると等しく伊太利及び屬領に於ても觀取された。地方都市の財政紊亂を見たるトラヤーンヌスは、代官を派遣して其の收支を管理せしめ、斯くして皇帝の官吏は漸次權力を増し、終に一二世紀後には都市の自治權を奪つた。而もトラヤーンヌスの時代にはこれが唯一の効果ありし制度であつた。伊太利住民の減少を憂ひ、トラヤーンヌスは地方都市に巨額の貸付金を交付し、これを土地を擔保として投資し、その利子を以て貧兒の教育と扶養とに使用せしめた。表面の目的は軍兵の徵募にありしも、かゝる制度は人道的のものであつた。吾人はこゝに人類の道德的發達を察し得る。

彼の政治は精力に充ち且つ公正であつた。彼は不善を罰し、苛税を撤廢し、外征と建築とに多額の費用を要せしも、人民に何等新しき負擔を課することをしなかつた。彼の妻プロチナ Plotina は彼と等しく勤儉にして、リヴキアの如く皇帝の信賴する補助者であつた。彼の歿するや彼女は機智をもつて皇帝の最も信任せし人物を王位に即けた。

第五四節 皇帝ハドリアヌス^(二十七)

後繼者ハドリアヌス Hadrian は、將軍にして兼ねて力量ある

屬領の知事たり、又た學者であつた。彼は其の治世の三分の二を屬領の旅行に用ひた。第一の目的は疆外の國民と親交を増進するにあつた。軍備を増加せずして平和を維持するために、彼は前皇帝の征服地のうちダキアとアラビアとを除きすべて拋棄する必要を感じた。

第二の目的は軍隊と國境防備とを改善するにあつた。彼は軍營より有害なる娛樂を逐ひ、單に情實によつて任命されし年少士官を免じ、彼の所謂『アウグスツスの訓練』を復活した。軍隊は彼の治世に充分の訓練を受け、行軍に築城に驚くべき活動をなし得るに至つた。彼の國境防備のうち最も有名なるはハドリアヌスの城壁と稱せられるものである。タイン Tyne 河口附近に起り、北部ブリテンを横斷してソルウエイ・フェルス Solway Firth に達して居る。次の世紀には一層大規模に改築されたが、その擴張後防禦線は二個の平行せる壕と城壁より成り、小塔・城塞・軍營を以て連絡を通じてゐた。此等の遺跡は今尚ほ存してゐる。同様に重要なものはライン・ダニユウブ兩河の中間防

備の完成である。此の如き防備と軍隊の改革と相俟つて帝國は、野蠻人の侵寇に抵抗し得る新しき力を與へられた。

彼は帝國の隨所に神殿・劇場及び水道を建設した。彼が多くの時を屬領に費したることは、ローマ及び伊太利よりも屬領を重要視せしことを示すものである。

第五五節

ハドリアヌスとローマの建造物・文官制度

ローマに於ける彼の建造物中に萬神廟 Pantheon がある。アグリツバの着手せしものであるが、ハドリアヌスによつて再建された^(註一)。直徑百五十二呎、高さこれに準ずる圓形のもので、宏大なる圓屋を以て蔽はれ、正面には大なる廻廊を設く。この建物は今尚ほ完全に保存せられ現に基督教會に使用されて居る。この圓屋の下に立つ旅客は、こゝにローマの高大無邊なる威力の象徴を觀取するに相違ない。ハドリアヌスが彼自身のためにローマよりチベル河の彼岸に建設せし廟墓は、等しく大規模のものではあるが、藝術的價值より言へばバンテオンに遙かに劣つてゐる^(註二)。

プリンセプスの政務はアウグスツス以來頓に増加し、クラウヂウスはこれが執行機關に文官制を創設せんと試み、自身の解放民に重要な職務を課した^(註三)。然しかゝる階級の出現は貴族に取り不愉快なものであつた。他方多くの武士も今や政務に熟達するに至つた。さればハドリアヌスは文官制度を改正し、武士以外のものは一切高官に採用しなかつた。官吏制度は從來よりも一層範圍を

廣くし且つ有效なるものとなつた。

(註一) 第五〇三節

(註二) 中世の時代には要塞——聖アンゼロの城——となり、現在は軍事博物館となつてゐる。

(註三) 第五〇七節

第五三節 皇帝アントニウス・ピウス^(一六〇) ハドリアヌスの後嗣にしてピウスと稱せられしアン

トニウス Antonius は、正義と平和とを愛せし敬すべき品性の士であつた。彼の治世は人道的立法を以て有名である。殊に彼は證據を得る目的にて奴隸を拷問する主人の權利に制限を加へ、現に文明世界の通則となれる法律上の原則、即ち被告人は有罪と決定するまで無罪と見做すべしと考へた。彼はトラヤヌスの慈善政策を擴張して、女子の孤兒のために特別の財團を設け、妻ファウスチナ Faustina の名を取つてファウスチアナエ Faustianae と稱した。彼の長き治世は特に事件の著しきものなく、繁榮せる幸福の時代であつた。

第五七節 皇帝マークス・アウレリウス^(一六〇) 彼の死後養嗣マークス・アウレリウス Marcus

Aurelius 帝權を繼ぎ、養弟ルシウス・ヴェルス Lucius Verus を僚友として協力政務に當つた。さればローマは、一時二人のアウグスツスによつて統治された。ヴェルスは唯逸樂を求め、アウレリウスはストア學派の哲學者として、其の目的は國人に對して義務を遂行するにあつた。然し彼は讀

書と冥想とに耽る餘裕に乏しく、其の原因は前皇帝の樂天的性格が、彼に多くの問題を遺せし故である。彼の即位するや北部及び東部國境には戰雲搖曳し、シリアの軍隊は甚しく懶惰に過せし結果バルチア人の侵寇に抵抗する能はざる程であつた。然し幸にして東方には多くの有力なる將軍を有し、就中最も傑出せしはアヴェヂウス・カシウス Avidius Cassius であつた。彼はシリアに生れ而も古ローマ風の嚴格を具へ、放縱なる軍隊に嚴重なる訓練を施し其の規律を舊に復した。彼はバルチア人を撃破し、其の國土を蹂躪して和を請ふに至らしめ、斯くてローマはメソポタミアの一部を尙ほ持續するを得た。

當時怖るべき疫病が東方に猖獗を極めてゐた。軍隊の凱旋するや、この疫病は帝國の東半及び伊太利に傳播し、その結果軍隊は微弱となり、所によりては伊太利にても人口の半數を失ひ、これが救済に國庫は窮乏を告げ、國防に必要な資源を失つた。ローマの敵は益々強大となり、國境外の歐羅巴全土は不穩なる種族に滿ち、彼等は地中海の文明諸國を脅し、バルチア戰爭の未だ終らざるに、北部伊太利よりダキアの國境に至るまで一線をなして帝國に侵入し來つた。其の中心はゲルマニ種族中の有力なるマルコマンニ Marcomanni である。彼等は南獨逸に住してゐた。この戰爭は彼等の名を以て知られてゐる。

兩皇帝は共に出征し、翌年ヴェルスの死後アウレリウスは單獨に戰爭を續け、七年間苦戰の後名

譽ある平和を得た。然るに彼がアヴヂウス・カシウスの亂を鎮定するため東征せし間に平和は破れた。彼は戦争を終りて再びダニューブに歸り、マルコマンニを征服しその國土を屬領となさんとせしが、中道にして歿した。

第五八節 文學の白銀時代 アウグスツス時代を文學の『黄金』時代と言ふに倣ひ、この時代を通常『白銀』時代と稱してゐる。アウグスツスの治世以後文學は衰微し、多くの文學者は簡素なる文體を無趣味と考へ、舞文曲筆・誇張修飾其の他不自然なる方法を以て注意を惹くに努めた。

哲學者セネカは時代の風潮に順應して華麗なる用語を驅使した。而も彼は廣大なるローマの領土が示す博大深奥なる思想を示してゐる。この方面の一大進歩はフラヴキウス家の君主によつて行はれ、彼等は文學を保護し屬領より新生命を輸入した。この時代に大プリニー Pliny the Elder は三十卷の『博物志』 Natural History を著し、自然科学以外に地理學・醫學及び美術をも包含してゐる。プリニーの科學的貢獻に對し西班牙出生のクキンチリアン Quintilian は、修辭學の方面に於て同様の成果を遂げた。彼の十二卷の『雄辯家の養成』 Training of the Orator は、少年時代に始まり演説家の資格を備ふる迄の修辭學の全課程を教へてゐる。此の書により有名なる著述家の修辭學原理を窺ひ得るのみならず、又た主なる希臘・ラテンの文學者に關する彼の意見を知る貴重なる資料である。善良皇帝の時代は、古典ラテンの最後の偉大なる記者タシツス Tacitus とジュヴァナール Juvenal

とを産した。タシツスの『年代記』 Annals と『歴史』 Historiae (註) とは、アウグスツスの歿時よりドミチアンの死に至る時代に及び、此等の大著述の外に彼はブリテンの征服者『アグリコラの傳記及び性格』 Life and Character of Agricola と、更にその時代のゲルマニア人の性格及び制度を記せる『ゲルマニア』 Germania とを著した。彼は軍人として又た政治家としての經驗により、軍事的及び政治的事件を明瞭に理解し、且つ鋭敏なる良心を有し、従つて事件の發生せし際一般に周知せられたる一切の事實につき、吾人は彼の叙述に信賴することが出来る。彼の文章は暢達にして潑刺真に迫り又た力がある。而も彼の歴史家として卓越せる點は其の重大なる過失によつて割引されて居る。彼はチベリウスよりドミチアンに至るプリンセプスを、すべて僭奪者・暴君と見る偏狹なる貴族階級に屬し、従つて此等君主の動機を批判するに公正を缺く。歴史家タシツスと同じく『諷刺』 Satires の著者ジュヴェナールは、氣魄あり戲曲的であつた。彼はタシツスの精神を以てネロとドミチアン時代のローマ社會を回想し、そこに唯憎むべき惡徳以外の何ものをも發見しなかつた。然し若し彼の著しく誇張せる叙述を寛容するならば、吾人はその著述に時代の風俗・習慣及び道德に關する知識の寶庫を發見するであらう。

大プリニーの甥に當る小プリニー Pliny the Younger の『書翰』 Letters は其の時代の研究に貴重な資料であるが、文章は雄渾ならず衰頹の徴を示してゐる。ハドリアヌスの記室スエトニウス Suetonius

のユリウスよりドミチアンに至る『皇帝傳』Lives of the Caesars は、有益なる事實と愚にもつかぬ贅言とを雜然混交してゐる。マーカス・アウレリウスの『冥想錄』Meditations は良書の一にして、希臘的ローマ哲學の最も圓熟せし成果である。

此の時代に於けるヘレネス文學の復興は比類なき名聲ある著者を出した。アレキサンドリアのアッパン Appian は有益なる叙史的『ローマ史』History of Rome を著し、同時代にパウサニアス Pausanias は又た『希臘旅行』Tour of Greece を編し、其の國の古典的碑銘に關して述べてゐる。『わけてプルトークは不朽の「英雄傳」 Lives を著した。これ恐らくは世界の著作中、最も廣く知られ、且つ最も多く讀まれた書物である』(註二)。希臘人は文學を起すと共に科學を無視しなかつた。マーカス・アウレリウスの侍醫ガレン Galen は、解剖學・醫學に關する著述を公にし、トレミー Ptolemy は天文學の體系を刊行し地球を宇宙の中心と説いてゐる。彼の見解はコペルニカス Copernicus (1473—1543) の出でてこれに代るまで、一千年以上の間承認せられてゐた。

(註一) 『年代記』のうち第一—四篇、第五、第六篇の一部と第十一—十六篇とが残つてゐる。但し第十一—十六編の最初と末尾を缺ぐ。『歴史』のうち第一—四篇と第五篇の前半とが現存して居る。

(註二) モーレー『古代希臘文學史』三九五頁以下 Murray: Ancient Greek Literature, 395 f.

第五五節 美術

アウグスツスの時代以來、ローマは世界の美術の中心であつた。希臘最大の建

築家・彫刻家・畫家はこゝに集り、君主若くは富豪に仕へた。君主の富と権力との増大するにつれ、宮殿・神殿・水道・浴場其の他の土木事業が大規模に計畫せられしは自然のことにて、曩に述べしクラウヂウスの水道及び萬神廟はその一例である(註一)。斯くの如き建築物は其の設計に當り、應用科學の豊富なる知識とこれが施工に最大の注意と熟練とを必要とした。ハドリアヌスの時代以來建築物は美術的價値を減じた。

吾人はトラヤヌスの記念碑彫刻に新思想を發見する。其の周圍には基底より頂上まで螺旋狀をなして浮彫(註二)せられし群像がある。ダキア戰爭中の事件を連續して表現せるものにて、進軍・攻圍・築城・都市の燒毀乃至負傷者の看護等を示し、これ等の戰爭に關するトラヤヌス自身の記録は亡失したけれども、この『彫刻せる畫帖』は戰爭のみならず、ローマ人及び北方の隣接種族の軍事的慣習に就て貴重なる知識を與へる。浮彫の人物は精巧且つ興味深く彫刻されてゐる。マーカス・アウレリウスのゲルマニ戰役記念碑は、トラヤヌスのそれに似て唯藝術的價値に於て劣つてゐる。

此の時代の彫刻家は又は彫像の制作に活躍し、神々其の他理想的人物の形態は全く希臘巨匠の作を模したものである。現存せる理想的彫像は殆んどすべてが、斯くの如き『ローマの模型』である。而もこの時代は君主と其の近親、乃至私人の胸像及び彫像に獨創性を發揮してゐる。この種の彫像はフラヴキウス家時代に完成の域に達し、特に大理石像は最も自然に且つ生動して居る。ヴェ斯巴

シアンの像は其のよき一例である。ハドリアヌスの時代に、希臘の理想主義が一時勢力を得しことは、彼の肖像が如實にこれを示してゐる。其の後他の美術と等しく彫刻も著しく衰微した。

(註一) 第五七、五五節 (註二) この意味については第二五節を見よ。

第三〇節 紀元第二世紀に於ける帝國の狀態

帝國はこの時期に最大の領域に達した。ローマ人は引續きユウフラテスの東部に一時メソポタミアを占有し、ダニユウブの北部にダキアを保持した。搖ぎなき平和は遠隔の國境に起りし戦争と、首府に發せし動亂とに攪ざる、こと無く、皇帝は屬領民の父と仰がれ、彼等の幸福を主なる目的とした。彼等の多數はラテン人の權利(註二)若くは完全なるローマ市民權を得、伊太利と屬領との政治的區別は殆んど存せざるに至つた。

吾人はこの時代に建築の著しき發展を認める。皇帝はそのために莫大の國帑を投じたが、更に多額の費用が富裕なる私人より寄進された。小プリニーは其の都市——北部伊太利にある近世のコモ Como——に圖書館と學校と貧兒院とを寄附し、更にケレス Carac に神殿を造つた。廣大なる廻廊を備へしこの殿堂は、特にこの都市に開かる、大歳市に際し商人の使用に供した。この時代の最大の寄附者は希臘人ヘロデス・アッチカス Herodes Atticus であつた。彼は伊太利及び希臘の都市に多くの土工を起し、生れ故郷のアテネにては市民を饗し又た建物を寄進した。現在尙ほ六千人を收容し得る彼の音樂堂 Odéon の遺跡がある。此等は單に寄附者の例として擧げたに過ぎぬ。すべて

の都市には仁慈なる保護者を有し、彼等は其の資財を社會のために投じた。寄附と建築とは史上に比類なきこの時代の特色である。

然し此等の驚くべき活動は異常なる富力若くは繁榮の象徴ではない。單に寄進と建築とを愛する時代精神が、文明世界に發露したに過ぎぬ。尙ほ中世のある時期に、十字軍的精神が全西歐を動かした如きものである。ハドリアヌス及び兩アントニウス時代の帝國は、外面的に繁榮せしに過ぎぬ。内面的には全文明世界は凋落しつゝ、あつた。精神的には發明力を失ひ、肉體は容易に瘴癘の侵すところとなり、住民の數は急減しつゝ、あつた。闘志は既に萎靡し、マーカス・アウレリウスは國境防備のために奴隸と劍客とを採用せねばならなかつた。更に彼は大規模にゲルマニ人を軍隊に用ゆる政策を取つた(註二)。貴金屬は其の影を潜め、従つて彼は銅三〇パーセントを加へて銀貨を鑄造するの已むなきに至つた。然し此等の衰微の徴候は、當時何等の注意を惹かず看過されて居た。

(註一) 第四六節 (註二) 第五五節

第四章 革命の百年・軍人皇帝 (一六〇—一六四)

第三節 コムモツス・禁衛軍の統治 (一六〇—一六四)

アウレリウスの子にして繼承者たりしコムモツス Commodus は意思薄弱なる青年にして、容易に悪友に誤られて下賤の逸樂に耽り、圓形劇場に野獸

第四一章 革命の百年・軍人皇帝

の鬭争に溺れつゝ、ある間に、帝國の衰微は歴然として現はれた。軍人は其の統制を失ひ君主に對して尊敬を拂はず、屬領は弊政百出し、首府は禁衛軍の左右するところとなり、最早や彼等を統御する能はざるに至つた。斯くして十二年間の無力野蠻なる統治の後、コムモズスは弑せられた。君主を守護する禁衛軍(註)は、今やな勢力ある常備軍となり、漸次自己の重要な地位を認むると共に其の訓練を失ひ傲慢なる暴力團となつた。彼等は元老院を壓迫し、ローマを脅し、皇帝すら左右するに至つた。特にコムモズスに甘やかされし彼等は彼の後續者を弑し、君主の地位を最高の評價者に賣り渡した。かゝる不名譽極まる事件の報が一度國境守備軍に傳はるや、彼等は一齊に憤慨した。皇帝は彼等の元帥であり、彼等は皇帝權の本源である。さればシリア、ダニユウブ、ブリテンの駐屯軍は各々司令官を皇帝に指名し、武力に訴へて其の意思を遂行せんとした。ローマに最も近きダニユウブ駐屯軍の指揮官セプチミウス・セヴェルス *Septimius Severus* が終に勝を制した。

(註) 第五三節

第三三節 セプチミウス・セヴェルス(一九三)・カラカラ(三三) セヴェルスは頭腦明晰、確乎たる

人物にしてよく帝國の必要を知り、ローマの秩序を恢復し、王位を覬覦するものを征伐し、且つ外敵を壓伏した。彼の權威は全く其の軍隊を背景とする。従つて彼は元老院を輕視するに躊躇せず、されば元老院は彼の時代に至りて前に有せし勢力を多く失墜した。彼の治世は事實專制君主政に一大躍進を遂げし時代である。彼の政策は其の顧問たりし法律家の支持するところであつた。ローマ法學者中の偉材なりしパピニアヌス *Papinian* は、この時代に出で禁衛軍總督の職にあり、ウルピアーヌス *Ulpian* も亦等しく聲名あり、彼等と其の同僚との努力によりローマ法は眞にその發達の絶頂に達した。

此等の偉大なる法學者の立法は、全帝國に利益を與へた。セヴェルスの没する以前に於てすら、屬領民の大多數はローマ法の保護を受けしローマ市民であつた。彼は屬領と伊太利とを同じ水準に置くを目的とした。ユリウス・ケーザルは市民權を自由に屬領民に與ふる政策を開始し、アウグスツスは屬領を伊太利より劣等視せしも、クラウヂウスは熱心にユリウスの政策を踏襲した。クラウヂウス以後の君主はこの自由政策を繼承し、遂にセヴェルスの歿せし時には市民たらざるものは殆んどなきに至つた。セヴェルスの後嗣たりしカラカラ *Caracala* は、帝國を通じて相當の地位にある自由民はすべてローマ人となし(註)、數世紀に渉る難事業を完成した(註)。而もセヴェルスの時代に市民の兵役の義務と特別税とは苛重を加へ、カラカラの時に新にローマ市民となりしものは、臣從民としての負擔の上に更に市民の負擔を負はねばならなかつた。斯くして市民の利益と不利益とは相殺された。實際この改革を斷行せし者の意圖は唯其の兵士を顧慮せしのみ、一切他のものに對しては無遠慮に残酷であつた。彼も亦弑された。

(註) この利益に與り得ざるものはデヂチシ *Deitici* (『降伏者』) と稱する下層階級にて、(一)降伏して帝國內に移住せし野蠻人と(二)罪を犯したる解放民とより成つてゐた。

第五三節

アレキサンダー・セヴェルス^(二三三)

・新波斯帝國

重要ならざる二皇帝^(註)の後、愛すべき青年にして卓越せる品性を有せしアレキサンダー・セヴェルス *Alexander Severus* 即位し、元老院を尊敬せしのみならず、又た教育を保護し貧民の要求に注意を拂ひ、且つ穩和公正なる點に於て善良皇帝に稍似てゐた。然し彼も亦微力にして軍隊の訓練を維持し、若くは帝國の防禦に當ることが出来なかつた。

彼の治世に至り、ローマ世界に取つて新しき危険が東方に起つた。トラヤヌスの時代以來バルテア帝國は衰微し、勇敢なる波斯人は其の獨立を主張し、二二七年に國王アルタクセルクセス *Artaxerxes* はバルチア王國を顛覆してこれを波斯帝國とした。彼は熱心に征服を志し、其の經國の才はよく數十年の間東洋に見ざりし軍國を窺むるに至つた。アジア屬領の割讓を要求せる傲慢なる波斯王に對し、アレキサンダー・セヴェルスは宣戰せしも不幸慘敗を喫した。爾來波斯帝國はローマを脅し、將にゲルマニ種族の侵入せんとする時期に際してユウフラテス方面に軍隊を集中し、北方の防備を薄弱ならしむるの已むなきに至つた。波斯人との戰爭後、アレキサンダーはライン方面のゲルマニ人と戰場に見へ、^(註) 彼は

ために獄された。禁衛軍は既に其の總督ウルピウスを殺し、ローマの住民並びに政府を脅しつゝ、あつた。斯くしてある點に於て幸福なりし治世は失敗に終つた——暗黒の前の樂しき黄昏の時期であつた。

(註) マクリヌス *Macrinus* (二二七—二二八) 及びエラガバラス *Elagabalus* (二二八—二三三)

第五四節

無政府狀態^(二三三—二三四)

アレキサンダーの死後半世紀間、政府は引續き暴力の支配に苦し

み、皇帝は朝に立ち夕に仆れた。時として二名の同僚が協同して帝位に即き、更に多くの王位の僭稱者は帝國を内亂の渦中に投じ、天壽を終へし皇帝の數に至つては極めて稀であつた。此の混亂せる時期の中葉、帝國は將に分裂せんとした。軍隊は夫々其の司令官を皇帝に任命し、『三十の暴君』と誤算誤稱せられし此等の僭稱者は、争うてローマ世界を無政府狀態に導いた。

内亂は帝國を荒廢に歸せしめ、軍隊を國境より撤退すると共に、ローマの敵は直ちに帝國を攻撃し最初の成功を贏ち得た。北方のゲルマニ種族のゴート族は、モエシア *Moesia* 及びマケドニアを掠奪したる後、皇帝デシウス *Decius* ^(二三三) を破りてこれを殺し、殆んど同時に西方の同族フランクは下部ライン河より國境を越えてガリアと西班牙とを荒掠した。其の後間もなくアルタクセルクセスの子にして有爲の國王サポール *Sapor* は皇帝ヴァレリアヌス *Valerian* を捕虜とし、文明世界は全く無防禦の狀態となつた。ゲルマニ種族のアレマンニ *Alemanni* は北部伊太利に殺到し、ゴート

族の大群と共に婦人小兒を伴ひ、ダニユウブを横断して屬領内に其の住居を求めた。この危機に當り幸にしてローマには有力なる君主マーカス・アウレリウス・クラウヂウス(一七〇)出でて、アレマンニを退けゴート族の侵入者を撃破した。

第五節 皇帝アウレリアヌス(一七〇)

彼の後嗣アウレリアヌス Aurelian はダキアより最後の戍兵を撤退し、この地を西ゴート族(註)に與へ國境を再びダニユウブ河とした。これ帝國が最初に喪失せし領土であつた。野蠻人の首都ローマを威嚇するに及び、彼はこれを城壁を以て圍み、その遺跡は今尚ほ存する宏大なる事業であつたが、同時にローマの微力と衰微とを語る記念碑である。近く帝國より分離せし二大地方は、東方にては女王ゼノビア Zenobia がバルミラ Palmyra に壯麗なる宮殿を造り、シリア・埃及及び小亞細亞の大部分を支配し、西方にては元老院議員テトリカス

Tetricus がガリア・ブリテン及び北部西班牙の皇帝となつてゐた。アウレリアヌスはバルミラを征服してこれを破毀し、ゼノビアを捕虜とし、其の後テトリカスの降伏を容れた。斯くして彼は帝國の統一を恢復し、更にゲルマニ人と戦ひライン及びダニユウブを再び帝國の北部國境とした。恐らく他のローマの將軍にして短時日に斯る大成功を博せしものはなく、彼はアレキサンダー・セヴェルスの死後半世紀に出でし軍人皇帝の尤なるものであつた。此等の皇帝は多くイリリクム及び其の附近の出身であつた。さればイリリアの皇帝とも稱する。この地方の住民は主にゲルマニ人にして彼

の間には帝國の他の地方よりも軍人精神の旺盛なるを見る。この環境に生長せしイリリアの皇帝等は、陣營に進軍に戰場に其の時を過し、鬪志満々たる才幹の優れし人物であつた。彼等は多く短命にして敵のため若くは味方の軍隊に殺された。

アウレリアヌスは軍事のみならず、政治上にも偉大なる努力のあとを示した。私的生活は質實簡素なりしも、民衆に對しては東洋流の専制君主を以て任じ、壯嚴なる儀式を以て圍繞され、臣下には『主なる神』の尊敬を要求し、元老院の干渉を許さず、而も彼は此等の新思想によつて政治の改革を斷行する以前に刺客の爲めに仆れた。軍隊と人民とは死後彼を有徳の君主として尊敬した。彼の死後數代の短命君主の治世が續きしも、特にこゝに注意する必要はない。

(註) 第五節

約説 (一) マーカス・アウレリウス時代の帝國の匿れたる弱點は、彼の後繼者の治世に現はれた。(二) セプチミウス・セヴェルスは主に軍隊の力によつて、秩序を恢復せんとした。(三) 然し帝位は微力となり野蠻人は軍隊に参加し、こゝに帝國は無政府の状態に陥つた。(四) 紛亂はゲルマニの侵入により更に加はりしが、(五) アウレリアヌスは帝國の統一を恢復し、改革の方針を示した。

第四章 専制君主政(一七五)

第一款 政治史

第三節

デオクレチアン^(三八四)・アウグスタス、ケーザル及び禁衛隊長

Deletian は軍人精神の旺盛なるダルマチアの出身であつた。デオクレチアン Di-

軍隊に入り、その天才と意思の力により遂に帝位に登つた。政治家として彼の偉大なる功業は、帝國の新經營に過去百年の時代精神を容れし事である。

彼は先づ同僚として粗樸なるも才能ある將軍マキシミアン

めローマ世界を二分し、デオクレチアンは東方を治め、彼の同僚は西方を支配した。吾人はこれを

以て二個の分裂せる帝國の創造と解してはならぬ。帝國は從來の如く唯一であつた。唯マーカス・

アウレリウスの場合の如く^(註)に、各自アウグスツスの稱號を取りしも、眞に政府の首腦たりしも

のはデオクレチアンであつた。その後二名のケーザル、ガレリウス Galerius とコンスタンチウス・

クロルス Constantius Chlorus とは、夫々アウグスツスの補助者・後繼者に任命せられた。ケーザル

は經驗ある將軍たるを要す、彼等は敵の最も攻撃を受け易き邊境の最も困難なる土地に赴任した。

此等の四名の保安官は何れも禁衛隊長を副官とした。かゝる組織全體の目的は明瞭である。第一に

國境はその範圍極めて廣く、一人の將軍にてはこれを防禦する能はざるに至り、而して

にあつて皇帝より大軍隊を委任せられたる將軍は、同僚即ち後繼者たるにあらざれば、必ずや皇帝の敵となり王位の競争者たることを確實である。次に皇帝が天壽を終り若くは弑殺に會ふ時、ローマ世界は屢々王位の覬覦者のために内亂の渦中に投ぜられた。新制度の下にあつて帝國は決して首腦者、若くは合法的の王位繼承者を缺ぐことなく、斯くして皇帝弑害の誘惑は著しく減少した。

(註) 第五二七節

第三節 州・區・縣

アウグスツスは屬領の大なるを、若干の小部分に分割する政策の端緒を開

いた。其の目的は幾分知事の權力を減少するにあつた。デオクレチアン及び後に至りコンスタンチ

ンはこの政策を繼承し、帝國は百個以上の小屬州より成るに至り、従つて知事の地位は多く重要な

らざるものとなつた。此等の小區劃は更に十三の區 *Dioecese* に分ち、區は四名の禁衛隊長によつ

て支配された。隊長は夫々直接には唯一個の區を支配するのみ、従つて残りの九區は隊長の代りに

副長 *Vicarii* を以てこれに宛てた^(註)。若干の州知事はプロコンサルの稱號を有し、他の知事より

重きを爲し皇帝に直屬してゐた。其の他の知事は隊長若くは副長等各區の首腦に服従し、副長は隊

長の下位にありしも唯アウグスツスに服屬してゐた。此等高官の複雑なる相互の關係は彼等の權力

を抑制する効果があつた。

(註) コンスタンチンの死後區は四個の縣に併合せられ、四名の總督に統治されることとなつた。

第三八節 官僚制度

五七〇

を擴張した(註一)。デオクレチアン及びコンスタンチンは官職の数を増加し、保安官は最下級の州の宮廷は斯くの如き多数の官吏より成り、更に地方官憲と中央政府とを連絡する一團の皇帝代表者を必要とした。上下多数の階級と地位とより成る官吏の複雑なる組織を官僚政治と稱する。この官僚を機關として政務は圓滑に進捗し、假令薄弱若くは悪徳なる皇帝の下に於ても障碍は起らなかつた。これにより皇帝は自ら絶對的となつた——國家一切の他の權力より獨立するに至つた。同時にこの制度により皇帝は屬領の隅々に至るまで綿密徹底せる政治を行ふを得た。換言すれば皇帝は官僚政治により、本來帝國を組織せる(註二)都市國家の聚合體を、有力なる中央集權的國家とした。これ現在の佛蘭西に似て、又た北米合衆國の漸次化せんとする制度である。

文官の保安官に對して、軍隊にも又た軍團長、公及び下級の士官があつた。『伯』なる稱號は戰時若くは平時に重要な地位に就きしものに用ひられた。文武の高官は當時尙ほ存せし貴族にのみ與へられた。貴族の主なる三階級を下級から上級に列擧すれば、クラシム・クラシム(Classimi)のみに與へべくタビレス(Spectabiles)イラストレス(Illustres)のみに與へべく、皇帝を一時的なる戰時の首長の地位に既に久しく主にグルマニ人(註三)より組織せられし軍隊は、皇帝を一時的なる戰時の首長の地位に貶黜せんと試みた。此等の野蠻人は酋長以外の首領を知らなかつた(註四)。彼等の勢力に對抗するたためアウレリアヌスは、東洋流の君主思想を採用し、デオクレチアン及び其の後繼者はこの前例を繼承した。新制度に於て皇帝は國家の所有者であり、市民は其の奴隸であつた。彼は王冠と絹袍とを着け、寶石・黄金を以てこれを鏤めた。彼は自ら神なりと主張し、臣民を叩頭匍伏せしめ、此等の手段により帝位はゲルマニ野蠻人の手より破滅を免れた。

(註一) 第五七、五五節 (註二) 第四五節

(註三) 第五〇、五六節

(註四) 此等の説明は次章を見よ。

第三九節 デオクレチアンの失敗・皇帝コンスタンチン(註六) 紀元三〇六年デオクレチアンは

其の職を退き、同時に同僚マキシミアンをも退職せしめた。當時ローマ帝國は平和と秩序とを維持して居た。其の後間もなく新制度は、王位繼承の缺陷を暴露し、尙ほ前任アウグスツスは、其の同僚と後繼者とを夫々の義務を遵守せしむる手段に缺けるところあることが明瞭となつた。デオクレチアン及びマキシミアンの退位すると共に、二人のケーザル、コンスタンチウス及びガレリウスはアウグスツスとなり、比較的著名ならざる新ケーザルの任命を見た。然るに三〇六年コンスタンチウスのブリテンに死するや、彼の部下は嗣子コンスタンチンをアウグスツスの地位に進め、合法

的の後嗣を無視した。ローマにては退隠せし皇帝マキシミアンの子マクセンチウスは市の禁衛軍によりアウグスツスに擁立せられた。其の他自立せる二三のアウグスツスあり、政局は甚しき混亂に陥つた。三二二年コンスタンチンはマクセンチウスに對して軍を進め、これをローマ市外ミルヴァ橋に於て撃破し、マクセンチウスはチベル河に溺死し、コンスタンチンは西方世界の主人公となつた。ガレリウスは既に歿し、三二三年リキニウスと稱するもの東方唯一のアウグスツスとなりしが、數年後コンスタンチンは同僚リキニウスに挑戦し、これを撃破し^(三三)終に彼を倒して唯一の皇帝となつた。コンスタンチンの治世は二個の重大なる事件によつて著名である——即ち基督教の公認と、ビザンチウムを帝國の首府と選定せしことである。基督教の起源よりコンスタンチンの死に至るまでの發達は、第二款に叙述するであらう。

第三世紀の邊疆戰爭中、皇帝は多く國境の陣營に其の日を送り、ローマは實際の首府たらざるに至つた。コンスタンチンはビザンチウムを住所と定め、彼の名を取つてコンスタンチノープルと命じた。この地は商業的に優秀なる地位を占め、又た特に外敵防禦に必要なダニユウブ及びユウフラテスの國境にはローマよりも接近してゐる。ラテンの西方とヘレネスの東方とは、既に分離の傾向を取りつ、あつた。帝國の東半は西半よりも富に於て人口に於て優つてゐた。東方遷都は西方を犠牲とし東方を保持するものと考へられた。

第五〇節

コンスタンチン死後の狀況^(三三五)

コンスタンチンの死後三人の皇子がこれを繼承し

た。彼等は基督教徒と自稱せしも奸譎にして暴虐を極め、對手を除くために殆んどすべての血族を殺し、續いで互に拮抗した。その一人は弟の手に仆れ、他の一人は篡奪者に弑され、第三は神學に没頭せし間に、波斯人・フランク人・アレマンニ人は帝國に侵入した。彼の從兄弟ヂュリアン Julian はアテネに於て哲學の研究を従事せしが、起つてガリアに軍を進め、ストラスブルグの大會戰に於てアレマンニを撃退し、野蠻人を屬領より驅逐して國境の防備を堅固にした。斯くて其の統治能力を發揮せし哲學者は、從兄弟の死後唯一の皇帝となり、基督教徒たりし彼等の惡むべき性格を嫌ひて異教徒となり、基督教の壓迫に努めた。これ彼の背教者と稱せらる、所以である。而も彼は迫害を敢てせず、舊世界の神々を復興せんとしてその平和的努力は失敗に歸した。彼は尙ほ弱冠にして波斯人に對して花々しく軍を進め、戰爭中敵矢に仆れた。帝國は彼に於て才幹ある統治者・國防者を失つた。

ヂュリアンの歿せし翌年、軍隊はヴァレニチニアン Valentinian を皇帝に擁立した。彼は勇猛なる性質を具へ而も有力公正であつた。多數の野蠻人より成る帝國軍隊の司令官に適してゐた。彼は治世二年を通じてブリテン、ガリアの困難なる邊疆を維持し、進んでライン河を越えてアレマンニを其の本土に壓迫した。彼は多くの時を西方に送り、東方は彼の弟にして殆んど傀儡に等しきヴ

アレンス Valens の支配に委ねた。而もヴァレンチニアンの生存する限り、帝國は動搖しなかつた。彼の死後帝國の歴史は、主として野蠻人の侵入と移住とに關係する。然しこの問題を述ぶる先ち、(一)初期基督教の歴史と、(二)帝國衰微の一般的原因を考察する必要がある。

第二款 基督教の歴史

第四節 基督教の起源及び特質

初期基督教の歴史は、『新約書』の諸篇より學ばねばならぬ。『福音書』は基督の生涯と教訓とを述べ、『使徒行傳』は基督の死後、其の事業を繼承すべく命ぜられし人々の生涯と教訓と、初期の教會の起源に關する叙述である。『書翰』は聖保羅及び其の他の使徒が、各々教會に宛て、基督教を説明し、人々にこれを受け信仰に生くる獎勵を與へし手紙である。至るところに下層階級は奴隸の靈魂と皇帝の靈魂とを同一視する宗教を歓迎した。更に基督教は基督によつて人は神とつながり、人生のあらゆる危機に際して智慧と力とを受くるものと教へた。信者は其の罪を赦され、永遠の祝福を嗣ぐものと信するに至つた。この積極的の贖罪と永生との保證により、基督教は當時の世界に擡頭せし精神的願望を満足せしめた。

第五節 基督教と帝國との關係・迫害

紀元第一世紀のあひだ基督教徒は殆んど世間の視聽を惹かなかつた。帝國內にあるすべての民族の宗教を保護し、其の神々をローマの神々とせし政府は、

基督教徒を猶太人と同一視し彼等に信教の自由を許した。この宗派は第二世紀に至り著しく其の數を増し且つ勢力を加へ、こゝに社會の平和と幸福とを紊すものと感ぜらるるに至つた。基督教徒はローマ人と異り他の宗教を寛容せず、偏狹にして改宗者を出すために積極的攻勢に出で、全世界は其の信仰を奉すべきものを思つた。ローマの社會的祝祭はすべて宗教的のものであつた。然し基督教徒は偶像崇拜を排斥し、一般人と共にこの悅樂に参加協同するを欲せず、由つて『人類の憎惡者』と認めらるゝに至つた。彼等は同様に皇帝の守護神 Genius (註) を禮拜することを拒否し、自然不敬虔と叛逆とを疑はるゝに至つた。彼等の秘密集會を疑念を以て眺めし政府は、基督教徒の會合を公安に危害あるものと認め、事實彼等の教會は一大秘密結社をなし、其の支部は都鄙に普及し、異教徒は彼等が甚しき不徳の罪を犯し、小兒を食すとの風評を誠しやかに流布した。此等の迷信的憎惡に加ふるに更に飢饉・疫病其の他の不幸は、基督教徒に對する神々の怒りの結果によるとの思想を抱いた。彼等は暴民に襲はれ、官憲に無辜の罪を以て訴へられた。君主のうちには彼等を卑陋無秩序なる惡漢と考へ、官憲に命じてその信仰を抛棄せざるものを監禁・拷問・死刑に處した。教會歴史に於ては此等の命令の實行を迫害と稱してゐる。最も良心的なる皇帝例へばマーカス・アウレリウスの如き、迫害者として最も活動した。迫害は又た比較的微温の時期を中間に置き、第三世紀の終り第四世紀のはじめに最も激しく行はれ、而も此等の災厄を経て、基督教會は其の數と勢力とに急

速なる發達を遂げた。世界は久しく理想を缺いで居た——新宗教はこの缺陷を充した。教會に活動力を與へ世界に新生命を與へしは、創立者の人格に發する精神的道德的の力であつた。

(註) 第五〇四節

第三節 教會組織

基督教會は其の精神のみならず、組織に於ても有力であつた。その特色は國家組織に模倣したとである。最初信者は獨立の役員を有し、執事 Deacons は貧民を賑はし長老 Presbyters は宗教的教訓を會衆に垂れ、會議に出席しては教會の利害關係を注意し、監督 Bishop は長老の主長となつた。やがて都市の教會は其の支部を附近の町村及び地方に設け、母教會の監督は此等の會衆に權威を有するに至り、その他各種の方法により大教會は多くの小教會を支配するに至つた。更にコンスタンチン時代に至れば監督の間に階級と勢力との相違を生じ、州都の監督は他の都市の監督に優る權威を有し、同時にローマ、コンスタンチノーブル、エルサレム其他一二の監督は、更に高き尊敬を拂はれ、州監督は大監督 Archbishop, or Metropolitan と言ひ、一層高級の監督は一般に總主教 Patriarch と稱し、ローマの總主教は特に法王(註)と呼ばれた。コンスタンチン時代の教會政治は民主的であり、自由民は勿論奴隸と雖も最高の地位に就くを得た。基督教會は既に一人の主長に統一せらるる傾向を有し、上記の民主的性質を失はずして、やがて鞏固なる中央集權的教主政治を布くに至つた。

(註) 法王なる語(ラテン語の父)は一時他の監督及び普通僧の權位にも等しく用ひられた。第一節でローマの監督に限定されるには至らなかつた。

第四節 基督教の公認

數年に互る激烈なる迫害の後、皇帝ガレリウスは基督教徒に完全なる信仰の自由を允許する勅令を出し、皇帝のために彼等の祈禱を要求した(註)。然し帝國の一部には尙ほ迫害が續いた。コンスタンチウス・クロルスは異教徒なりしも、其の支配下にある基督教徒を極めて寛大に待遇し、其の子コンスタンチンも彼等に等しく好意を示した。實際基督教の思想は深くコンスタンチンの宗教に僭入し、其の異教思想と混合してゐた。

超自然的信仰は、アウグスツスの時代以後著しく勢力を加へ、第四世紀には異教徒たと基督教徒たとを問はず、人民は超自然力が直接人事に干渉することを信じた。コンスタンチンは、基督教徒があらゆる災厄を経て而も勢力を張り、これを迫害せしものが却つて種々の苦惱を経験する事實に注意し、基督教は一切の異教の神々を合するも尙ほ遙かに力あるものなりとの結論を下した。斯くして彼はミルヴァ橋の戦争前(註)に、基督の組合文字 $\chi\rho\iota\sigma\tau\omicron\varsigma$ を部下の兵士の楯に附けしめた。これ基督教徒の信奉する神の力ある救援を得る法術の一種である。その實驗の結果は一切の希望を超越し、將來同様の援助を得る保障として戦勝者コンスタンチンは基督教徒となつた。戦後彼の公布せし最初の法令は、先づ基督教會の課税を免じ更に帝室より補助金の交附を命ぜしものである。斯

くして彼は基督教を國家が承認せし他の宗教と同一水準に置いた。基督教徒の信仰自由を實際化するためには、ガレリウスの勅令を強制する必要があつた(註二)。コンスタンチンは基督教を承認し、これに異教以上の好意を表明したるも、尙ほ昔の神々の存在を信じ、引續き卜占によりその神意を窺つた。

(註一) 第五九節

(註二) 學者の信するところによれば、戦前コンスタンチンが夢みたりと言ふ物語は後世の作爲である。

而もこれは一瑣事に過ぎぬ、彼の基督教に就ての經驗は疑を容れる餘地はない。學者は更に基督教徒に信仰の自由を許したる『ミラン勅令』なるもの、存在せざることを力説する、實際に新勅令の必要はない。

第五節 ニケアの宗教會議^(三)

一方基督教神學は發達した。基督の教訓は『福音書』を讀むもの、知る如く單純である。何等信仰個條なるものはない。彼の死後一時弟子等は、彼等と救主の個人的關係を考へ、主にこれを説いた。彼等のうち單に信仰を以て満足せざるものは、其の信仰の性質と其の相互關係とを説明せんとし、特にこの信仰に入りし希臘哲學者に於てこれを觀取する。彼等は基督教を説明しこれを體系に組織するに當り、希臘哲學を利用し、又たローマ法より多くの思想を採用した。彼等は本來單純なる信仰の上に、漸次複雑なる神學を建設し、基督教徒以外には理解し難き微妙なる區別を有し、その相違點に於ては全く反對の教理を説いた。各々自己の意見を以

て唯一の眞理、唯一の靈魂救濟策となし、同時に異なる意見を抱くものを異端と呼び、神の激怒に觸るるものと考へた。コンスタンチンの時代に既に精妙なる神學が存在し、兩派の間には甚しき相違があつた。主なる論争は埃及の教會役員——アタナシウス Athanasius とアリウス Arius——との間に行はれし基督の性質に關するものであつた。兩者は共に基督は神の子なりと認め、而もアリウスの主張によれば、子は本來父に劣るものであると言ひ、アタナシウスは父と子とは絶對平等であると主張した。この問題並びに其の他の點に就て信仰を統一し、教會を有力ならしむるためコンスタンチンは、世界のすべての監督を北小亞細亞の一市ニケア *Nicaea* に召集して會議を開き、爭論を決定し萬人の取るべき信條を決定せしめた。會議はアタナシウスの見解を容れこれを以て正統となし、反對の意見を異端とした。西方世界はこの決定によるニケアの信條を直ちに容れ、これをローマ加特力教會と今日の新教諸派の多くに傳へた。然しアリウス派は東方世界に傳播し、又たゲルマニ人の間に廣く行はれた。ニケアの宗教會議は、全キリスト教世界を代表する最初の會議と稱せられ、斯くして必要に應じて總會を開く制度は、異教主義との衝突に當り基督教會に著しく力を加ふること、なつた。

第三章 帝國衰微の原因

第五節 精神力の凋落 善良皇帝の章に述べし繁榮の時期に於てすら、地中海諸國民の生活は既に衰微の徴を現はし、世界を半野蠻の状態に逆轉せしむる凋落の秋が既に萌してゐた。其の衰微は主として精神力に存し、精神力の喪失は主に希臘都市の衰微と帝國の建設とによる。若し都市國家にして互に扶助し、外界世界の影響を受けて希臘人特有の潑刺たる精神を生みしならば、この政治的社會的制度の衰微は全く反對の結果を生じたに相違ない。帝國的統治は自由を壓迫し思想を抑制した。ローマ帝國はアレキサンダーの帝國に始まりし衰亡を完成した。ローマが地中海世界に與へた長き搖ぎなき平和は、溫和・柔順・慈悲・愛等の美德を進めた。然し他面力の美德、例へば勇氣・意思・健全なる肉體と精神及び野心等を抑壓した。帝國の住民は世界には唯一個の國家の存するを知り、これを『世界』と稱した。戰爭に外交に商業に國際的競争なく、——外部の刺戟を缺き其の結果因循となり魯鈍となつた。帝國時代には文學と藝術と科學とは殆んど進歩の見るべきものなく、典籍の形に集積せられたる世界の知識は漸次失はれ、人類は無智と半野蠻の境に墮落した。

第六節 人口減少・奴隸制度 帝國衰微の他の理由は人口の減少であつた。人口減少の原因は主として既に述べし都市生活の發達である。都市の住民は概して地方住民より生命力に於て劣り、都市の人口は常に地方より補充するにあらざれば死滅するは周知の事實である(註)。彼等は一般に地方の住民よりも多くの娛樂と奢侈とを求め、即ち生活の標準が高い。更に地方にありては小兒の養育に多額の費用を要せず、且つ早く勞働に従事し實益を收める。これに反し都市にては小兒の養育は可なりの費用を要し且つ勞働の機會が少い。此等の理由より都市の住民は地方の住民よりも晩婚にして大家族の扶養を避くる傾向がある。これはローマ帝國に取つて疫病よりも更に怖るべき人口減少の原因であつた。

人口の減少は更に奴隸制度によつて増進した。大征服の結果捕虜は奴隸として廉價に賣買せられ、元老院議員及び武士は廣大なる土地(ラテン語にて *Latifundia*)を買収してこれに奴隸を使役した。農民の小地主はこれと對抗する能はず、僅小の田圃を賣り或は富裕なる隣人より強制的に立退を命ぜられた。此等人民は都市に來るも職業を發見する能はず、熟練工業は多く奴隸によつて行はれ、商業其の他の事業はまた武士及び解放民の掌中にあつた。されば生業なき貧民は家族を維持して國家に兵士と市民とを供給することが困難となつた。帝政の後期に於ては次に詳述する如く壓制的課税により多數は悲慘と絶望の淵に陥つた。基督紀元第一、二世紀にローマ市住民は半數以上に減じた證據がある。恐らく帝國全體として人口減少の程度は可なり甚しかつたに相違ない。

(註) 然し最近衛生設備により都市は概して衰退の法則より免れて居る。

第八節 貨幣制度の崩壊 プリンセプスの治世に貴金屬の採掘は極めて乏しく、従つて帝國內の金銀は實質的に増加して居らぬ。他面貴金屬は美術品に使用され、神殿の獻納物として集貯せられ

又た個人の死蔵するところとなつた。通貨はアラビア・印度・支那に絹絲・香料・香水其の他の奢侈品と交換するため絶えず流出し、極東に出でし金銀は殆んど再歸することなく通貨の量は年々減少した。君主は唯貨幣の量を軽くし質を低下せしむる以外にこれが救済方法を考へなかつた。貨幣の混和量は急に増加し、紀元第三世紀の中葉には嘗て銀貨たりしものは、依然銀貨と稱するも殆んど實質は銅貨たるに至つた。アウグスツス時代に四十仙の價値ありし銀貨は、今や僅かに一仙の價値を有するに過ぎぬ。無限に鑄造さるゝ市場價値より低き惡貨は、すべて良貨を驅逐するは周知の事實である、法律により低位の銅貨使用を禁止せられざるに、良金貨を以て債務を支辨するとなきは自明の理である。惡貨發行の結果すべて金銀貨の流通を停止した。然し一仙の價値を有する貨幣は帝國の事業經營を満足に遂行し得るものではない。

第五節 チオクレチアン及びコンスタンチン時代の租税

貨幣の缺乏は政府及び政府を通じて社會に甚しき影響を與へた。吾人は先づチオクレチアン時代の國費はアウグスツス時代より數倍せることに注意せねばならぬ。其の理由は(一)軍隊の増加とこれに伴ふ給料の増加、特に(二)官吏の著しき増加と、更に(三)皇帝及び高官等の豪華に耽りし結果である。然し貨幣價値の減じたため貨幣を以て課税するも殆んど價値なきに至つた。されば政府は物資——穀物・食料品・衣服・皮革・鐵器其の他の産物を租税品とした。其の後男女の勞働者に課せし苛酷なる人頭税は、貧民をして避艱を行はしむるに至つた。法外なる地租は多くの農民をしてその負擔を軽減するため、所有の良田を捨て、不毛なる山野に移住せしめた。斯くて帝國の土地は絶えず生産力を減じ、更に人口の減少を促した。

大地主は依然其の土地より利益を得た。そは(一)租税の比較的に輕微なりしと、(二)其の權力を以て脱税の方法を講ぜしが故である。然し農民の土地所有者に取つては、其の田圃は無價値以上のものとなつてゐた。

第五節 世襲的社會階級

吾人は今やローマ社會が帝政の晩年に至り世襲的階級制度を組織するに至りし經過を理解すべきである。この制度は多數の精神と肉體とを束縛し、古代文明の崩壊を完成した。政府は久しくローマ及び後にはコンスタンチノーブルに食物を供給するを主要なる事務とした。この事業に参加せしものは主として穀物商・パン屋・牛豚業者であつた。彼等は組合を組織し、能ふ限り多數の組合員を糾合する特權が與へられてゐた。チオクレチアンはすべて國有財産は租税品を含み無償運送の義務を命ぜし程多數の商人が居た。此の新負擔は彼等に取つて堪へ難きものであつた。従つて多數のものは其の職業を放棄せんと試みた。皇帝は驚き彼等に職業の繼續を命じ、死後は子孫にこれを繼承せしめた。同様の理由によりすべての組合は世襲的となり、組合員は國家より義務を強要せらるゝに至つた。斯る組織ほど自由を破壊するものは他にあるまい。組合は

常に疑惑の眼を組合員に注ぎ、彼等が共同負擔の責を免かれ居らざるやを監視した。組合規則の壓制は専制君主よりも甚しきものがあつた。

第五二節 市會議員・文武の勤務 上述せし徵稅制度により市會議員職の世襲となりし經路を説明せねばならぬ。既に述べし如く(註)市會議員は富豪であつた。租稅の徵收を保障するため皇帝は彼等に市負擔額の責任を負はせ、若し徵收不能の場合彼等はこれを補填せねばならなかつた。而も彼等は既に都市の爲めに尠からざる費用を負擔し、此の上尙ほ責任の加重するを見ては私的生活に隱退せんと欲するもの、多數に生ずるは自然である。由て皇帝は其の地位を世襲とし、すべて廿五英町以上の土地を所有するものは終身其の地位を保持し、若し他の市に轉住すれば兩市の市會議員たる責任を帯びねばならなかつた。議員の地位は一切の名譽を失つた。候補者の性質或は職業は問ふところでない、一度其の地位に就けば破産以外にはその負擔より免るゝを得なかつた。市會議員の地位は商人の地位よりも望ましからざるものであつた。

文武の官吏は市會議員たる責任を免れしが其の子孫には及ばなかつた。然るにコンスタンチンは父子相續の權利ありと宣言し、その勅令により文武官は世襲となつた。何人も安樂にして名譽ある地位を犠牲として、市會議員の如き嫌ふべき生活に就くものはない。同じやうにして兵士の子孫も其の父祖の業を繼承するに至つた。

(註) 第五二節

第五三節 小地主・小作人及び奴隸の農奴化 最後に吾人は小作人及び小地主の地位が法律によつて世襲となり、此等兩階級は地方の奴隸と共に農奴階級を組織するに至りし經過を考察しよう。人口の減少につれて政府は自由民と奴隸とを問はず、彼等の支持を一層必要とした。されば政府は個人の監視を一層嚴重にせしが、奴隸は屢々土地より土地へ轉賣され課稅を免れることがあつた。政府は奴隸の移動を一層嚴重に取締るため、コンスタンチンは奴隸所屬の地を賣却し若くは奴隸を釋放することを禁じた。斯くして彼等は奴隸より轉じて農奴たるに至り、土地と共に賣買せらるるに至つた。小作人 Coloni は曾て意の儘に移動し、その満足する條件を以て地主より土地を借りた。然るに苛稅のため生活困難となるや、彼等はその土地を捨て、他の一層自由放任的な地主を求むるか、若くは都市に蝟集した。この弊を抑止せざれば人口は久しからずして絶滅するに至るべく、由つてコンスタンチンは小作人と其の子孫とを永久に土地に隸屬せしめた。斯くして小作人も亦農奴となつた。同様に小地主は過重なる課稅を免れんとせしめたため、彼等も亦其の子弟と共に皇帝の命により永久に土地の隸農となり、大多數の地方勞働者の隸農化は斯くして完成した。

第五三節 大地主・封建制度の端緒 既に述べし如く大地主の大多數は元老院議員であつた。彼等は多く現役若くは退役の文武官にして、そのうち小數のもの、みローマ若くはコンスタンチノープ

ルにて常に會議に出席し、終に元老院議員とは地位若くは職能よりも階級を示す語となつた。此の階級は市會議員たる義務を有せず、土地及び労働者に對する課税以外には殆んど公課を負担しなかつた。地主は多くの公務を免れたのみならず、又た其の小作人を不當の——時としては正當の義務より免れしむるを得る地位にあつた。されば小作人の状態は久しからずして小地主よりも幸福なること明瞭となり、多くの小地主は急に其の土地を地主に贈與し、其の保護を受くるを條件として小作人となつた。地主は一般にこれを歓迎し、被護民の増加により更に權力を加へ、收税吏其他帝國の官吏を無視するを得た。斯くて地主の保護を求めしものは永久に忠誠を盡す宣誓をなし、その誓約と共に自己を他人の保護に置く行爲を保舉 *Commendation* と言ふ。保護を得んとする將來の主人に自らを推舉する意味である。當時耕作者なきため至るところに多くの荒廢せる土地ありて、地主は労働と忠誠とを宣誓するものに容易に土地を分與することが出來た。分與せる土地を封地 *Beneficium* と稱す。政府は保舉及び封地を禁ぜんと試みたが無効であつた。斯くて地主は益々勢力を得て遂に殆んど主權者の如く、其の支配する土地は小王國の如く廣大なるものとなつた。これ實に封建制度の端緒であつて、中世に至り完全なる發達を遂ぐるに至つた。

第四章 ゲルマニ人の侵入(三六—四六)

第一款 ゲルマニ人の生活と特質

第五節 國土及び人民 帝政時代に中央歐羅巴即ちラインの東、上部ダニユウブの北部は森林を以て蔽はれ、此處彼處には健康に好からぬ沼澤が散在してゐた^(註)。國土は碣确にして氣候酷烈、全く文明の發達には不適當であつた。此の地方のゲルマニ人は小舎に住し普通聚落を作り、漁獵を試み家畜を飼ひ、僅かの田畑を耕耘して穀物・野菜を作つてゐた。彼等は軀幹長大強健にして容貌秀麗の野蠻人であり、戰爭を好みて労働を輕蔑した。飲酒と賭博とに耽るも帝國の人民に缺くる美德を有し、家庭生活は純正無垢、誓約は忠實に守り、且つ個人の自由を愛した。彼等は當時のローマ人とは反對に大家族を擁し、従つて彼等の間には久しく戰爭の行はれて死者を多く出せしに拘はらず人口は急激に増加した。彼等は基督教に接する以前には自然力を崇拜し、殿堂も偶像も有してゐなかつた。

(註) ローマの歴史家タシツスは紀元二〇〇年頃に編纂せし『ゲルマニア』に於て(第五節)、彼等がローマと基督教との勢力に浴せざる以前の國土と住民とを述べてゐる。

第五節 政治・『盟友』 戰爭を始むる前に部族の人民は會合して酋長を選舉する(ラテン語の *Concilium*)。部族によりては永久的の酋長を載くものもあつた。此の場合に酋長は世襲職たるべき傾向を有

し、これを國王と稱しても差支ない。國王は常に貴族であつた。部族には他に貴族もあつた、——即ち自己の武勇により若くは其の祖先の勇氣によりて有名なる人物である。部族の貴族は國王と共に部族民の利益を商議計畫する。小事件は彼等の責任を以て決定するが、重大事件即ち戦争・講和・移住・官吏の選舉等は武士の集會にてこれを決定する。

部族間の戦争と共に私闘が行はれた。剛健勇敢にして野心ある自由民は、自己の周圍に冒險を好み名譽を欲する青年の一團を擁し、これを盟友(Companions ラテン語の Comites 或は複數にて Comitatus)と稱した。彼等盟友は常に忠誠を盡す誓約の下に獨り其の部族的戦争のみならず、主公の計畫せる私的侵略にも亦隨從した。彼等につけて最高の名譽は戰場にあつてはその側近に侍し、食卓に於てはその次席に坐することであつた。戦利品及び友人の贈與は夫々勳功により彼等の間に分配される。されば彼等は常に餘裕ある生活をして居た。この關係は戦争と服従と名譽とに一種の訓練を施し、従つてこの制度は封建制度の發達に可なりの影響を與へしこと疑を容れぬ(註)。

(註) 第五六節。

第五節 初期のローマ人との關係

ゲルマニ人はすべて同一の文明状態にあつたのではない。帝國より遠隔なる土地に住せしものは常に野蠻であつたけれども、國境に近き部族若くは國民はローマ人の生活を習得してこれに模倣した。彼等は更に廣大なる土地を耕作し、一層愉快なる家屋を

建築し、衣服を整へ又た精巧なる道具・武器を製作した。基督教の宣教師は彼等に福音を傳へ、ダニユウブの北にありし西ゴート族 Visigoths は、聖書を彼等の言語に翻譯せし監督ウルフキラス Rufinus によつて基督教を傳へられた。ウルフキラスはアリウス派の教義を信じた。——アリウスの信條に就ては既にこれを述べた(註)が、斯くてゴート族はアリウス派となり、尙ほ帝國侵入前に基督教を信仰せしすべての他の野蠻人も亦同様であつた。この事實は歴史上に重大なる結果を及ぼすこととなつた(註)。

ローマ人は引續き勢力を失ひ、ゲルマニ人及び其の他の北方種族は漸次其の數と勢力とを加へ、こゝに野蠻人が帝國の脅威となるべきは自然の數である。最初の野蠻人侵入は共和政時代に大舉して行はれしが、彼等はマリウスの爲めに紀元前一〇〇年頃撃破された(註)。アウグスツスはゲルマニ人を征服せんとして失敗に終り(註)、其の後北方民族は引續き危険の度を加へた。マークス・アウレリウス(一六二)は其の治世の盛時を彼等の侵襲に對する國境維持に費した(註)。彼等の侵襲は只時の問題であつた。更に國境に最も近接せる國民は他の野蠻種族のために外部より壓迫され、其の結果多數相率るて帝國內に移住せんとするは、特に廣大なる土地が耕作者なく荒蕪に歸せる場合には自然の勢である(註)。マークス・アウレリウスは野蠻人を帝國に植民する大規模の計畫に着手し、これを以て敵の勢力を微弱にし人口の減少を抑制せんとした。